

---

# 真祖の吸血鬼と漆黒の異端者

kokoro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真祖の吸血鬼と漆黒の異端者

### 【Nコード】

N5774S

### 【作者名】

kokoro

### 【あらすじ】

エヴァが吸血鬼になって間もないころ一人の男に救われるところから始まります。その男は師であると同時に最愛の人になっていた。しかしその男は……。

オリ主はネギの双子の弟。

ヒロインはエヴァ、真名、刹那、茶々丸の予定。話が進んでいくうちに増やす可能性大。

追加：明日菜、木乃香。

ネギ、立派な魔法使いに対するアンチ要素が多いと思われます。

原作好きの人は敬遠したほうがいいかもしれません。

作者はネギまの知識が不十分です。原作と異なることが多いと思います  
ますがご了承ください。

一話が短いです。

## 零話

とある少女がいた。

その少女は真祖の吸血鬼だった。

少女の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

彼女は魔法世界では『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』  
など様々な異名を持ち恐れられていた。

かつてその少女の傍には一人の男がいた。

吸血鬼になって間もない無力な彼女の命を救い、鍛え、愛した男。

その男は他人が決めた法律、常識、秩序あらゆるものを無視し、ただただ己が決めた法則のみを守り自由に生きていた。

男が決めた法則とは

互いの同意があれば何をしようが構わない。

同意なく行われることは何であろうと許さない。

この法則で生きている男には当然敵も多かった。

男は立ちほだかる全てものを敵と認識し、排除していった。

敵には人種、種族、老若男女は関係がなかった。

敵は敵なのである。

漆黒の衣を纏い、黒い炎で敵を容赦なく焼きつくす彼を一部のものはこう呼んだ。

『漆黒の異端者』

その男の名は

シギ・スプリングフィールド

## 一話

Side: シギ

とある森で昼寝をしていると爆発音で目が覚めた。

何処の馬鹿だ。こんな静かな森の中で魔法をぶっぱなしている奴は。

普段人が寄り付かない場所なので、どんな奴か興味が出てきたので少し様子でもみてくるか。

決して安らぎの時間を邪魔された腹いせをするためではない。

しかし、せっかくなのでくだらん理由なら一発殴っても良いか。

どうやら一人の少女が六人ほどの男達に追われているようだ。

さて、どうするかなあ。

ぱつとみ、いたいけな金髪少女がむさ苦しい男達に襲われているようにしか見えないが、どのような事情があるか分からないからな。

少女は男が放った魔法をなんとか避けたが爆風で吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

体力の限界が来たようで少女は起き上がれないでいた。

男達は苦しんでいる少女をみて反吐が出るような笑み浮かべる。

あの顔は俺がこの世で一番嫌いな顔だ。自称‘正義の味方’どもだ。

S i d e : エヴァンジェリン

10歳の誕生日に目覚めたときに私は自分が吸血鬼にされた。

私を吸血鬼にした奴に復讐を果たした後、逃亡の日々が始まった。

何処へ逃げても私を殺すとする奴は現れた。

私が何をしたというのだ。

私の意志とは関係なく吸血鬼にさせられ、人ではないと言っただけで命を狙われる。

私はただ静かに生きていきたいだけなのに。

何時終わるとも知れない逃亡の日々。いや恐らく私が死ぬまで終わらないだろう。

世界にとっての異物。存在してはいけないもの。

男達が一斉に魔法を放つ。

逃げるのはもう疲れた。孤独は寂しいくて怖い。

死にたくない。

でも一人で生きていくのも、もう嫌だ。

ひとりはこわい。

死んだらどこにいくのだろうか。

わからない。

だがそれもいいかもしれない。

男達が放った魔法が迫ってくる。

私は死を覚悟した。

突然、私の前に漆黒の衣を纏った男が現れた。

男は向かってくる魔法を片手でいとも容易くかき消した。



## 一話

Side:シギ

突如現れた俺に男達は驚き立ち尽くしている。

「大丈夫か？」

振り返り後ろにいる少女に声を掛けた。

「…あ、ああ」

少女は戸惑いながら答えた。

「な、なんなんだてめーは!？」

男達の一人が怒鳴り散らす。

「んー。唯の通りすがり…かな？」

「ふざけるな!なんで俺達の邪魔をする!」

「そつだ!お前、そいつがなんなのか分かっているのか!？」

ぎゃーぎゃー五月蠅い連中だねー。

「そつだなー。吸血鬼かな。しかも真祖だな。おそらく吸血鬼になつて一年もたつて無いんじゃないか？」

人間じゃない奴なんて数え切れないほど見ている。

真祖の吸血鬼も何度か見たことはあったので見当はついた。

「そうだ！そいつは化け物だ！人間に災いをもたらすものだ！」

「今すぐ殺さなくてはならない！」

……はあー。やっぱりそう言う考えなのね。

種族による差別はある。

特に人間は他種族を毛嫌う傾向が強い。

こいつ等のように他種族は悪って考えている連中も少なくない。

まっ、同じ人間同士でも人種や宗教の違いで差別があるしな。

ほんと、くだらない。

俺は少女になんで吸血鬼になったかを聞いた。

くだらない嘘をつけば殺すという脅し付きで。

少女は誕生日に気が付いたら吸血鬼にされていたと答えた。

殺したのは自分を吸血鬼にした奴だけで血も吸ったことはないとのことだ。

殺された奴は仕方ないだろう。

同意なくやったんだしな。殺されても文句は言えまい。

少女は泣きそうな声で話した。恐らく嘘は言っていないだろう。

しかし目の前の『正義の味方』共はまったく信じてはいないようだ。

「なあ、ものは相談なんだが大人しく手を引く気はないか？そうすれば見逃してやる」

「ふざけるな！その化け物はここで始末する！我々の邪魔をする貴様もな！」

ま、それはそうだろうな。

こいつは吸血鬼。しかも真祖だ。

いずれ力を付け、人間に牙をむく可能性はある。

そうなればかなりの脅威になるだろう。

だがこいつはまだ何もしていない。

人一人殺しているが、それは相手が腐ってたからだ。

こいつを責めることはできない。

「悪いが俺はこいつを見殺しにはできん」

「なら貴様もろとも殺すまで！」

「ならこれはお互い同意の殺し合いでいいな」

「愚かな。これから行われるのは神の裁きだ！」

そうかい。

俺は一瞬にして男達との距離を詰め、炎の刃で男達を無数の肉片に変えた。

俺は一瞬の出来事に驚いている少女の元に行く。

「一緒に来るか？」

俺は少女に手を差し伸べた。

少女は俺の手を取る。

小さな手だな。

### 三話

Side：エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

私を助けてくれた男、名をシギ・スプリングフィールド。

黒髪で漆黒の衣を纏い、頭の前から足の先まで真っ黒だった。

何故そこまで黒に拘るのかと聞いたところ、単純に黒が好きだということだ。

いくら好みの色だからと言って持ち物全てが黒だと言うのは異常だろう。

私がそう指摘すると奴は不思議そうな顔をしていた。

まあ、なんというか……変わった奴だ。

変わっているな、と私が言った時も

「良く言われるな。自分ではそれほど変わっているとは思えないんだがな」

苦笑いしながら答えた。

奴は私をエヴァ、私は奴をシギと呼ぶことになった。

シギは優しくそして強かった。

人間、化け物、老若男女構わず平等に扱った。

基本的には他者とは関わらない。

たまに気まぐれで困っているものを助けたりもした。

その時には自分が勝手にやったことだと言って見返りを求めたことは無かった。

しかし敵と認識したものは誰であろうと容赦なく殺した。

自分が戦う姿を見せることによって私に戦いを教えていた。

私も自分の身は自分で守れるぐらいには強くなりたかった。

何時までも守ってもらえばかりなのは嫌だった。

私はシギに頼み稽古を付けて貰った。

厳しいなんて言葉ではとても表わせなかった。

何度死ぬと思ったことか。いつそのこと殺してくれとさえ思ったことあった。

そんな辛い稽古も自分が強くなっていくことがはっきり分かるので同時に楽しくもあった。

シギは私の成長を自分のことのように、いやそれ以上に喜んでくれた。

シギの腕を枕にシギの暖かさを感じながら寝るのが好きだった。

いつしか私はシギにひかれていた。

小さい子供が父親に気持ちを寄せるような感じなのかは良く分からない。

だが私にとってこれが初恋だと思う。

ある時私は異常なほどの渴きを感じた。

いくら水を飲んでも収まらない。

体が求めるものが何なのかは直ぐに分かった。

いままでも軽い衝動は何度もあったが我慢できた。

今まで抑えてきた反動なのか今回は耐えられないかもしれない。

意識がとっのいていく。

気がつくときギギが目の前に立っていた。

駄目だ。

傍に来ないでくれ。

お前を襲いたくななどない。

「エヴァ。辛いのか？まったく、こんなになるまで我慢するなよな。

飲みたくなったら遠慮なく言えと言ってあるだろうが。俺の血でよければいくらでも飲ませてやる」

シギは私を吸血鬼だということなど気にしてはいない。

でも私はシギに血を飲むところなど見られなくなかった。

シギはナイフで自分の指先を切った。

血が、シギの血が目の前に。

「早く飲め。血がもつたいない」

ああ。口の中にシギの血が。

身体がもっとシギの血が、血が欲しいと騒ぐ。

シギの指をくわえ、血を飲み続ける。

シギが自分の血を首に塗り、私の頭を首に近づける。

もう何も考えられない。

私はシギの首に噛みつき。血を飲み続けた。



## 四話

S i d e : エヴァ

目が覚めるとそこにシギの姿はなかった。

そっだよな。

私はあいつの血を飲んだんだ。

何も考えることなんかできなかった。ただ本能のままに血を飲んで  
いた。

あの時の血の味は忘れられない。

人の血が美味しいと感じるなんて、自分が吸血鬼だと改めて思い知  
らされた。

また一人になってしまった。

「よー、エヴァ。目が覚めたか」

シギが林の中から出てきた。

私はシギが現れたことが信じられなかった。

「身体の調子はどうだ？初めて血を飲んだからな。何処か調子の悪  
い所とかはないか？」

「なんでお前はいつもと変わらないんだ？」

「なんでって。お前ひょっとして俺の血を飲んだことを気にしているのか？」

「当たり前だ！何でお前は気にならない！私はお前の血を飲んだんだぞ！」

「といつてもなあ。お前吸血鬼だろ？」

「当たり前だ！」

「だったら何の不思議もないだろうが」

……な、何を言っているんだこいつは。

「俺達人間が他の動物や植物を殺して喰うのと一緒だろうが。人間が兎の肉を喰うのも、吸血鬼が人間の血を飲むのも同じ食事だ」

「そんな考え方をする奴がいるか！」

「ここにいるが。他の連中がどう思おうとも知ったことじゃない。俺は自分の意見を変えるつもりはない」

「だ、だけど……」

シギは優しく私を抱きしめてくれた。

「大丈夫だ。俺はずっとお前の傍にいるよ」

私は涙を堪えることが出来なかった。

シギに抱き付き泣き続けた。

それから私達の生活は変わらなかった。

いやーっただけ新しい修行が追加されたか。

人に迷惑がかからない血の吸い方だ。

はじめシギに言われたときは意味が分からなかった。

「基本的に俺はお前の傍にいるがそれが不可能な状態も起こりえるからな。普段から少しずつ飲んでおけ」

不可能な状態。

その最悪のケースをシギは考えているのだろう。

私はそんなことは考えたくなかった。

『この世にあり得ないなんてことはありえない。どれほど信じられないことであろうとも起こること、存在していることはある』

ことあるごとにシギは私に言ってきた言葉だ。

私はシギの言う通りにした。

まずは魔法で眠らせ、指の爪で軽く傷をつけ血を舐めた。

間隔を短くすることで一度に摂取する量は抑えられた。

襲われている方はなにも気がつかない。

血の好みを知る為に色々な人間の血を飲んだ。

性別で言うとな。特に十代の女が美味しかった。

魔力も高い方が良い。

だがシギの血に勝る血は出てこなかった。

## 五話

私はある日、修行が順調にできた御褒美をシギに頼んでみた。

「褒美？何が良いんだ？」

「え、えつとだな……。寝る前にお休みのキスをして欲しいんだ」

「そんなことでいいのか？」

「あ、ああ。まずはそこら辺から始めようかと」

それは私だって大人のキスを試してみたいさ。

だが物事にはやはり順序というものがあるだろう？

とつかいきなりは恥ずかしすぎる。

そこでまずは寝る前に軽くほっぺにキスから始めたい。

そこで耐性をつけてから本命だ！

夜になってついに待ちに待った瞬間が訪れた。

シギが前屈みになり顔を近づけてくる。

普段から見ているとはいえ、流石に目の前に来ると緊張する。

シギの唇が私の唇に触れる。

ツ！？

な、何が起きているんだ！？

私の頭の中は大混乱だ。

シギが顔を離す。

「お休み。エヴァ」

シギは微笑みながら就寝の挨拶をする。

「……ツは！ちょっと待て！」

「なんだ？どうかしたか？」

「どうかしたかじゃない！なんで口なんだ！？」

「ん？違ったか？」

「普通はほっぺに軽くするものだろうが！それをいきなり口とは」

「そうなのか？勘違いしていたらしい。悪かったな。今度からは気をつける」

「ま、待て！気にすることはない！少し驚いただけだ。明日からも今日と同じで良い。というかお願いします！」

「?……まあ、お前がそうして欲しいのなら俺は構わんが」

そうして私とシギの新しい習慣が始まった。

どんなことでも一つだけ願いを叶えて貰えたとしたら何を望むだろうか？

この前読んだ本にそういう話があった。

その本の主人公である少女は敵対する国の王子と結ばれることを願った。

普段の私ならくだらんと行ってしまいただったと思うが、何故かそのときは自分なら何を願うか考えていた。

さざんさん考えた末、結局一番最初に思い浮かんだことが本当の願いだと気がついた。

『シギといつまでも一緒に生きたい』

我ながらちんぷな願いだと思う。

いつまでもって永遠にってことなのか？

吸血鬼と人間では寿命が違いすぎるだろ？

などといったことは考えない。

正に夢見る少女のようだ。

いかな。あんな子供だましの恋愛小説など読むからはこんな考えが浮かんでくるのだ。

しかし私はシギなら何を望むのか知りたくなり思い切って聞いてみた。

「ふーん。どんなことでも叶うね。……何で急にそんなこと知りたくなっただんだ？」

「い、いいだろう別に！」

「……まあいいが。そうだな。特にないな」

「な、ないだと?!」

「ああ。願いごとは自分の力で叶えるから意味があると思う。一人でできないことなら誰かに協力してもらおうのもありだな。兎に角、そんな訳の分からんものの力ばかりん」

ある意味こいつらしいといえはらしいが。

私が聞きたかった答えと違うので正直がっかりしてしまった。

気持ちの一方的な押し付けはいけないことだと分かってはいるのだがな。



「それに俺は今、凄く幸せだからな。願い事なんかないさ」

「幸せ？」

「ああ。お前とこうして一緒に生きている日々が俺にとっての幸福だ」

まったく、こいつはいつも不意打ちばかりだ。

だが、そうだな。

何かに願うことなんかなかったんだ。

私とシギ。二人で今の生活を守ればそれで良いんだ。

だが私達の幸福の時に終わりが迫っていた。

## 六話

Side: エヴァ

私達は数日滞在していた村を出て今度は近くの大きな街に移動している途中だった。

「それにしてもお前の服も見事に黒一色だな」

「お前の黒好きが移ったんだろ。……変か？」

「良く似合っているよ。お前の白い肌と黒が良い感じで映えている」

そう言っって私の頭を撫でてくる。

昔から黒は好きな色だったがここまでではなかった。

好きな人の好みの色を好きになるのは普通のことだと思っ。

「しかしあれだ、今度は違う色の服も買っってみろよ」

「その時はお前の意見も聞かせろよ。何を着ても似合っしか言わな  
いんじやつまらん」

「しかたがないだろ。エヴァは何を着ても似合っんだからな」

屈託のない笑顔でシギは言っ。

買い物を楽しみになり早く次の街に着かないかと心が躍る。

しかしそんな気分も目の前に現れた五人の招かざる客によって台無しにされた。

私も五年の修行でそれなりに強くなったので良く分かる。

この五人は強い。

中央にいる赤髪の男と横の金髪の男は更に別格だ。

赤髪の男は何処となく顔立ちがシギに似ている。

「久しぶりだな、マギ。元氣そうだなによりだ。嫁さんと息子は元気か？」

「ああ。貴様も相変わらずのようだな」

どうやらこの二人は知り合いのようだ。

ひょっとして兄弟か？

しかし二人共、久しぶりの兄弟の再開にしては妙に殺氣立っている。

「それで一体どんな用なんだ？あんたは世界の平和を守るのに忙しくて、俺なんかに会いに来る時間なんてないはずだろ？」

「ふん。愚弟の始末をつけにきた」

やはり兄弟だったか。

しかし私のシギを愚弟とは言ってくれるじゃないか。

それに始末だと？

「ふーん。始末ねえ……」

「そつだ。兄としての情けとして放っておいたが、最早見過ごせん」

「……何で急に？」

「そのの化け物だ。よりにもよって真祖の吸血鬼なんぞに誑かされるとはな。我弟ながらなさけない」

誑かすとはなんだ！むしろ私の方がこいつにやられたわ！

「エヴァが真祖の吸血鬼だってことは事実だがそれがどうした？こいつは別に暴れまわっているわけではないぞ」

「今はな。だがこの先もそつだとは限らん。いや、確実にこの世に災いをもたらすものだ」

「相変わらず勝手だな。正義とつけければ何でも許されると思ってる」

「貴様が何と言おうとそれが事実だ。人々は化け物を恐れる。その恐怖の対象は排除しなければならん。闇に染まった貴様も排除する」

随分好き勝手言ってくれるな。

本当にシギの兄なのか？考え方がまるで逆ではないか。

今の私なら一人ぐらいなら相手に出来るはずだ。

「エヴァ。お前は下がっている」

「ま、まで！私だって戦える！」

「分かっている。だから自分の身は自分で守れ。俺が奴らに専念できるようにな」

シギの顔は険しかった。

これほどまで目の前の敵に集中しているのは初めて見た。

流石のシギでも相当厳しい敵なのだろう。

「安心しろ。俺は負けない。お前ともっと一緒にいたいからな」

私は頷き後方に下がった。

「最後の別れはすんだようだな」

「ああ、すまん。さあ、始めようか」

## 七話

Side:エヴァ

場の空気が一気に重苦しいものになった。

「やっと、私の唯一の汚点であったお前を葬り去ることができる。化け物と仲良く殺してやろう。」

正義の裁きを受ける！」

突然だった。

マギの言葉が終わると同時にシギが一瞬にして左端の男との距離を詰めると、右腕で相手の胸を貫いていた。

男の体はシギの黒炎で灰になった。

「き、貴様……！」

「お前ら温いんだよ。始めるって言っただろうが。殺し合いはとっくに始まっているんだよ。」

シギは右腕を男達の方に向ける。

「しまった！障壁を張れ！」

マギが叫び、男達が障壁を張った。

しかしシギのそれはフェイントだった。

シギはマギの横の金髪の男に黒炎を纏った左腕を叩き付けた。  
凄まじい爆発が起きる。

金髪の男の障壁は破られ男は全身を燃やされ死んだ。

あっという間に二人殺した。

流石はシギだと喜ぼうとしたが、シギの身体も代償は大きかった。

シギの左腕の肘から先がなかった。

「まさか自分の腕を犠牲にするとはな」

「あいつはお前と同等の実力があつたみたいだな。左腕一本が代  
価なら易いもんだ」

男達にさっきまでの余裕がなくなり、焦り始めていた。

そこからは激戦だった。

私にとってシギは最強だった。

シギは自分より強いやなんていくらでもいる。

と言っていたが、私にはシギが負ける姿なんて想像もできない。

シギの強さの秘密はその圧倒的な詠昌力だ。

魔法で身体能力を強化し、近接戦闘に持ち込む。

激しい接近戦を行いながら高速の詠唱により高威力の魔法を至近距離で相手に叩き込む。

三時間以上の激戦のち、立っているのはシギとマギの二人だけになった。

マギは満身創痍で立っているのがやっとの状態だった。

一方のシギは身体には無数の傷があり、片目も潰されていた。

何時も纏っている漆黒の衣はボロボロになり、血で赤黒く変色しきっていた。

「もういいだろう、マギ。俺達は一人で静かに暮らしていきたいだけなんだ」

「ふざけるな、化け物が」

「俺はもう行く。お前も家族がいるんだろうが。帰って家族と暮らせ」

シギはマギに背を向けこちらに歩いて来る。

全身傷だらけ、服もぼろぼろで血を流し、足を引きずる。

しかし私にはその姿がとてまかつこよく見えた。

目が合うとシギは優しくほほ笑んでくれた。



私も笑い返そうとしたその時、シギの口から血が噴き出した。

シギの身体から剣がはえていた。

「ころす！ころしてやる！いまおまえたちをころしておかなければ、せかいが、わざわざいがー！」

マギの眼は完全に狂気に染まっていた。

マギの身体から異常な魔力が集まる。

自爆する気か！

「せかいを、せかいをまもるんだ！」

マギの身体が膨れ上がり、爆発した。

爆発の中、私は見た。

あの時と同じ、私の前に突如現れ私を守ってくれた背を。

## 八話

Side: エヴァ

爆発が収まり、あたりを見わすとそこは焼け野原だった。

自分が生きているのが不思議だった。

その時、自分を守ってくれた姿、シギのことを思い出した。

シギは私の目の前で倒れていた。

身体を焼きつくされ、辛うじて人間としての原型をとどめていた。

『……エヴァ』

シギの声が頭に直接聞こえた。

念話だ。

『シギ！』

『エヴァ、怪我はないか？』

『ああ、お前が守ってくれたからな』

『そうか。お前が無事で良かった』

『待っている。今すぐ治しやるからな！だから死ぬな！』

『お前だって分かっているだろ。俺はもう駄目だ。感覚が何も無い。身体が完全に壊れたんだ。命が崩れていくのが分かる』

『嫌だ！そんなこと言つな！』

『………思いついたよ』

『…何がだ？』

『願い事だ。もし、今度生まれ変われたら、またお前と一緒にいたいな。例えば記憶がなくても良い。生まれ変わった俺がまたお前のことを好きになって、お前に好きになってもらえたら良いな』

『シギ、シギ。嫌だよ、そんなこと言わないでよ。死んじゃ嫌だよ』

『泣かないでくれ、エヴァ。俺はお前の笑顔が好きだった』

シギの声が段々と小さくなっていく。

『お前と過ごしたこの五年は幸せだったよ。』

元気でな。俺の………愛しい………小さな………お姫………様』

わたしはまたひとりになってしまった

## 一話

麻帆良学園都市に二人の幼き魔法使いが到着した。

ネギ・スプリングフィールド

シギ・スプリングフィールド

二人は双子の兄弟である。二卵生なので顔は良く似た兄弟程度だった。

兄のネギは天才。外見も父であるナギの幼い頃に似ており地元の期待の星だった。

弟のシギは欠陥品。髪は黒く、顔立ちも似ておらず誰からも相手にされていなかった。

「ねえ、シギ。目的の駅に着いたけど迎えの人はまだ来ていないみたいだね」

「らしいな。まあ、周りの女子中学生について行けばそのうち付くだろう」

「そうだね。行こうか」

「わかった」

元気に駆けだすネギに対してだるそうに歩きだすシギであった。

S i d e : 龍宮真名

私は今、不思議な光景を目撃してしまった。

黒髪に黒のロングコート、黒のスーツをきた外国人と思われる少年が前屈みになり鳩を眺めている。

ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリアだ。

初等部の子供が迷い込んだのか？

いや、初等部なら制服を来ているはずだ。黒スーツなのはおかしい。

私はちょっとした好奇心から少年に声をかけてみることにした。

「少年。こんなところで何をしているんだい？」

「鳩を見ている」

それは見たら分かるのだけどね……。

「イギリスでも日本でも鳩は鳩なんだな」

少年は当り前のことに感心したように呟く。

「鳩を見るためにここに来たのかい？」

「いや、ちゃんと他に目的はあるさ」

「それは何だい？」

「……なんだっけ？」

私に聞かれても分からないんだが。

少年は立ち上がると辺りを見まわし、頭を傾け、腕を組み考え出す。  
本当に忘れたようだ。

「ちなみにここは麻帆良学園都市だ。女子校エリアで近くには中等部と高等部があるよ」

「まほら……がっこう……。おお！麻帆良学園の中等部で教師をやるんだった」

そうだった、そうだった。と少年は笑っている。

なんで子供が中等部で教師なんかやるんだ？

どうせ遊びか何かなんだろう。

「そうかい。中等部はあっちだよ」

「親切にありがとう、綺麗なお姉さん」

笑顔で手を振りながら少年は駆けだしていった。

面白い子だったな。

それにしても綺麗なお姉さんか。

子供とはいえイギリス紳士ってところかな。

私も学校に向かうとするか。

## 一話

Side:真名

つい数分前に別れた少年が今度は自販機の前で立ち止まっていた。

どうやら気になる飲み物でもあつたらしく凝視していた。

まったく、何をやっているのだから。

今度は腕時計を見て時間を確認し、頭をかいて歩きはじめた。

予定の時間に間に合いそうにないから諦めたようだ。

歩きはじめたその方角は学校とは反対方向なのだが……。

しかたがないのでまた声をかけてやるか。

「そっちは中等部の方向とは違うよ」

「あ、さっきの綺麗なお姉さん。また会ったな」

「会ったな、じゃない。中等部に用があるんじゃないのかい？」

「んー？勿論あるさ。だからこうして中等部目指して歩いているんじゃないか」

少年は私の質問が面白かったのか笑いながら答える。



「大丈夫だよ。これでも今まで目的地に辿りつけなかったことはないからな」

「ちなみに最長でどれくらいかかったんだい？」

「ん」。山で遭難した時は五日ほどかかったかな」

笑いながら言うことじゃないと思うのだが。

どうやら筋金入りの方向音痴みたいだな。

しかたがないか。

「私も中等部に行くから付いて来ると良いよ」

「…そうかい？ならお言葉に甘えさせてもらおうかな」

私は先に歩きだし後ろを振り返ると少年はまた別の何かに興味を示し始めていた。

はー、まったく。

私は少年の手を取り歩きはじめた。

歩きはじめると少年は急に静かになった。

気になり横をみると少年は私と繋いでいる手をじっとみていた。

「どうかしたかい？」

「…誰かと手をつないで歩くのって初めてなんだ」

私の眼をみながら呟くように言う少年の眼は先程とは違い戸惑いがあつた。

今までに一度もない……か。何か事情があるようだね。

深く聞くことは避けたほうが良さそうだ。

「嫌かい？」

「嫌じゃない。ただ……」

「ひよつとして恥ずかしいのかい？」

「恥ずかしいに決まっているだろ。あんたみたいな美人と手なんか繋いでいるんだから」

「ふふ。美人か。私なんか別にそれほど美人でもないとは思つのだがね」

「あんたが美人じゃなかったら、この世に美人なんてほとんどいないじゃないか」

少年は不思議そうな顔で言う。

流石の私も相手が子供とはいえ、そこまでストレートに言われると照れるのだが。

「そういえば山で遭難したって言うていたけど、救助されるまで大

変だつたら」

「救助？自分で辿り着いたって言っただろ」

「しかし子供が帰ってこなかったんだ。捜索願いが出てたはずなんじゃないのかい？」

「ははっ。俺がいないからって捜索隊なんて出るわけないだろ。

俺がいなくなつたのに気がついたのは双子の兄と幼馴染の女の子の二人だけだよ。

兄さん達は大人に相談したらしいけど、そのうち帰ってくるだろうってことで終わりだったらしい」

顔は笑っているが眼にはなんの感情も感じられなかった。

悲しいと思えないほど当り前のことなのだろう。

「そう言えば名前を聞いていなかったね。私は龍宮真名だ」

「真名が良い名前だな。俺はシギ・スプリングフィールド」

<おまけ>

「ところで、真名。案内してもらっているところなんだが、学校は大丈夫なのか？」

「この調子なら問題ないよ」

「そうか。高等部は中等部の近くになるのか」

「ん？ああ、隣だね。……一つ確認しておくが、私は中学生だよ」

「!？」

「……そこまで驚かないで欲しいな」

「すみませんでした!！」

「泣きながら土下座までしなくてもいいんだが……」

Side：神楽坂明日菜

私は今、全力で走っている。

横をともに走っているのは親友でありルームメイトでもある近衛木乃香だ。

木乃香は学園長の孫娘である。

その木乃香が今朝来る新任教師の出迎えを学園長に頼まれ、私も付き合う事にした。

本来なら今日はいつもとより早く出なければいけないのだが、支度に手間取り遅れてしまったのだった。

学園長の友人ならそいつもじじいに決まっているじゃない。

はぁー、まったく。

自分から付き合うと言ったが、なんで私がじじいの出迎えなんか。

木乃香と占いネタで馬鹿をやっていると当然、ガキが声をかけてきた。

「あの一……あなた失恋の相が出ていますよ」

……………！？

なんですってー!!?このガキ、よりにもよって失恋ですって!!!

恋に敏感な年頃の女の子になんてこと言うのよ!

しかもかなりドギツイ失恋の相とまでいつか!

これだから私はガキが大っ嫌いなのよ!

木乃香がガキにこのあたりのことを説明する。

「ほな、うちら用事あるから一人で帰ってなー」

「じゃあね、ボク!!」

とつとつこのガキとはおさらばよ。

「いやー良いんだよ、明日菜君」

私達の担任の高畑先生の声が聞こえた。

「お久しぶりでーす。ネギ君」

「久しぶりー、タカミチー」

な!?!高畑先生がこのガキと知りあい!?!?

「麻帆良学園へようこそ。良い所でしょう?」『ネギ先生』

……はい?今聞き捨てならない単語が出てきたような。

このガキはネギ・スプリングフィールドと名乗る。

そして私達の学校で英語の教師をやることになったと言いだめた。

「高畑先生。うちがおじいちゃんに頼まれた新任の教師ってこの子のことですか？」

「ああ、そつだよ」

「せやけど、うちは二人って聞いてたんですけど」

ああ、そついえばそつだったわね。

「ああ、シギ君か。彼なら当然来ないんじゃないかな」

高畑先生がそう言うのとネギとかいうガキも頷いている。

高畑先生の説明によると、もう一人の名前はシギ・スプリングフィールド。このガキの双子の弟。

他人と接することを極端に避け、一人でいることを好む。

極度の方向音痴で一本道でも必ず迷う。

しかし時間はかかるが必ず目的地には到着するので心配する必要はないとのことだ。

二人はシギとかいうガキのことは本当に大丈夫だと思っているようだ。

でも、流石に初めて来る場所で迷うっていうのは怖くないだろうか？  
探しに行つてあげた方が良くかと考えていると、またもやとんでもないことが発覚する。

このガキが今日から高畑先生に変わって、私達のクラスの担任になるですって!!

私がガキに詰め寄ると、ガキが突然くしゃみをした。

その瞬間、突風でも吹いたような衝撃が起き、私の制服が消し飛んだ。

私は手で前を隠しへたりこむ。

何なのよ一体。

私が叫び声を上げようとした瞬間、肩に何かがかかった。

黒のロングコートだった。

サイズからして子供用かな。

「兄が大変失礼をしました。制服はこちらで弁償しますのでお許しください」

そう言つて頭を下げる黒髪のがキ。

「兄つて、あんたがひよつとして弟？」



「はい。ネギの弟のシギ・スプリングフィールドです」

双子って言う割にはそれほど似ていないわね。

「あまり似ていないのは二卵性だからですよ」

私の疑問がわかったようで直ぐに答えてくれた。

「やあ、シギ君。君にしては随分早い到着だったね。てつきりこ」  
に来るのは明日になると思っていたよ」

「あんたが俺の何を知っているのか聞いてみたいが、まあいい。早く付いてのは親切に案内してくれた人がいたからね」

「やあ、神楽坂。朝から災難だったな」

シギの後ろに立っていたのは同じクラスの龍宮さんだった。

## 四話

Side:真名

校舎に辿り着くとクラスメイトの神楽坂明日菜が下着姿で座り込んでいた。

露出にでも目覚めたか？

シギは自分の着ていたコートを神楽坂にかけてやった。

私達の担任である高畑先生とは知り合いのようだが、仲が良いと言った感じではないようだね。

そばにいる眼鏡をかけた少年が双子の兄のようだ。

高畑先生は皆の学園長のところまで案内するようだ。

せつかなので私も同席させてもらおう事にした。

移動中高畑先生は眼鏡の少年と楽しそうに話している。

シギはそんな二人の後方を一人で歩いていた。

高畑先生はシギがすぐいなくなることは知っているはずなのに、まったく気にする素振りはない。

私は違和感を感じていた。

面倒見がよく、生徒からの信頼も厚い彼らしくないと。

「ねえ、あんたって方向音痴なんだって？」

神楽坂が気を利かせてシギに話を振る。

「良く勘違いされるが俺は方向音痴なんかじゃない」

お前が方向音痴じゃないなら、誰が方向音痴になるんだ。

「俺は理解する、学ぶことが好きなんだ。だから気になることは確認したくなる。」

そういつたことをしているうちに何をしようとしていたのか、目的などを忘れるんだ。

そこでまず時間が過ぎる。

やっとのこと思い出すと今度は現在位置が分からなくなる。

現在位置が分からないんだから、目的にたどりつくのも一苦労って訳さ」

……お前とは方向音痴が何なのかと言う事から話し合う必要があるな。

神楽坂も苦笑いしていた。

「どれだけ時間がかかっても、目的地には必ず辿り着くって聞いたけどそうなの？」

「当たり前だろ。生きる目的とかはないが流石に野たれ死ぬのは嫌だからね」

野たれ死ぬ……か。

誰かが助けしてくれるという考えは全くないようだ。

当り前のように言うシギに流石の神楽坂も言葉が出ないようだ。

学園長室に着くと、高畑先生は仕事があるとのことであっていった。

学園長と少年達が軽い挨拶を終えると神楽坂が学園長に直訴する。

まあ、流石に子供が教師をやることなど信じられないだろうな。

子供が嫌いだと言う神楽坂なら尚更だろう。

おまけに思いを寄せている高畑先生に変わって担任になるといっしな。

学園長は神楽坂をなだめると、ネギとの会話を再開した。

そう『ネギ』とのだ。

多少シギに話しかけることもあるが殆どネギとばかり話している。

まるでシギがこの場にいないような感じすらする。

シギも私と話していた時は打って変わり、黙り込んでいる。

話は順調に進み、ネギが私達の担任、シギが副担任になるようだ。

次は二人の住む場所の話になった。

どうやら二人は神楽坂と近衛の部屋に一緒に住む予定のようだ。

当然、神楽坂は大反対だ。

私もあの部屋に四人と言うのはいささか窮屈のように思えるがな。

「学園長。僕は一人で大丈夫ですよ。流石に二人揃っては御迷惑だと思われますし」

「ふむ。すまんがそうしてもらえるかの」

シギの提案に学園長は少し考える素振りを見せたがあっさり了承した。

流石に子供を一人で住まわせるのは心配なようで神楽坂が焦る。

「学園長。宜しければシギは私達の部屋で面倒見ますよ」

「……ふむ。君がそう言うのであればかわんが」

「なら、決定と言う事で」

学園長はシギの提案の時と違い、本当に悩んでいたが押し切った。

私の提案に一番驚いていたのがシギだった。

目を見開き、私を見詰めてくる。

「そう言う訳だからよろしく頼むよ、シギ先生」

「相部屋なんだろう？もう一人の方の了承は取らなくていいのか？」

「それは大丈夫だ。刹那なら分かってくれるさ」

シギは戸惑っているようだ。

一人で住むと言ったときは雲泥の差だ。

最初の流れは彼には当り前のことなのだろう。

人の好意に触れることがなったようだ。

こうして私とシギの不思議な関係が始まった。

## 五話

Side:エヴァ

ついに待ちに待った日が来た。

今日はあの忌々しいナギの息子共がやってくる日だ。

十五年前、私は偶然ナギと出会った。

初めて見た時は驚いたな。

私からシギを奪い去ったあのにつくきマギに瓜二つだったのだからな。

当時、奴には息子がいたらしいからおそらく奴の子孫だと思われる。

ナギがマギとは別人だという事は分かっていたが、どうしてもあの顔を見るとあの時のことを思い出してしまった。

ナギは世界を救った英雄だった。

あのマギと同じ『立派な魔法使い』。

八つ当たりだということは分かっていたが、思わずちょっかいを出していた。

初めは軽い気持ちだったのだが、軽くあしらわれているうちにむきになっていった。

そんなことをくり返していたら、こんなくだらん学校に縛りつけられるとはな。

……何が『光に生きてみる』だ。

私からその光を奪った奴の同類のくせに。

だがこんなくだらない生活とはもうおさらばだ。

二人の息子達の情報はあまり手に入らなかった。

分かっているのは、二卵性の双子の兄弟。

兄のネギ・スプリングフィールド。

才能に恵まれた天才。周りの期待も大きい。

弟のシギ・スプリングフィールド。

兄に才能の全てを持って行かれた出洩らし。欠陥品。兄とは対照的に評価だった。

兄の方は首席で卒業しているので、天才ともてはやされるのもわかる。

だが弟の方もぎりぎりとはいえ、二年飛び級して卒業している。その割には随分な言われようだな。

私のシギと同じ名だというのに情けない。



いや、シギなら低俗な輩に付きまとわれるのを嫌い、わざと力を隠していたかもしれぬな。

このシギがそんなことを考えているからは知らんが、会えば分かるだろう。

小娘共のくだらん毘をくらいながら小僧が一人入ってきた。

ナギに似ているな。赤髪に眼鏡。

奴が兄のネギか。

小僧が自己紹介をし、小娘達にもみくちやにされていく。

……もう一人はどうした？

弟の方はこのクラスの副担任になると学園長クワンからは聞いていたが、つこうに現れん。

廊下に待機しているのか？

そんな気配はないのだが。

女教師が弟の名を呼び、中に入るように言うが入ってこない。

不思議に思い、女教師が廊下を見に行くと弟がいないと騒ぎ始めた。

くくつ。いきなりサボるか。

中々面白そうな奴じゃないか。

## 六話

S i d e : 桜咲刹那

学園長からの依頼をしていたらすっかり遅れてしまった。

一限目はもう間に合いそうにないな。なんとか二限目には間に合わせたい。

校舎に向かって走っていると前方に少年がいた。

少年は肌以外全て黒で塗り固められていた。

……不審者か？

私は一応警戒しつつ少年に声をかけた。

「何をしているんだ？」

「空を見ている。何百年経とうが、何処に行こうが空は同じなんだ  
など思ってるね」

少年は空を見ながら当り前のことしみじみと言った。

「雲は白いなあ。あれが全部黒だったらいいのに」

黒が好きな色のようだがそこまでか！？

私は嫌だぞ。青空に真っ黒な雲なんて。

「……流石に気持ち悪いか」

言った本人があっさり否定するのか。

なんなんだこの少年は。

少年が私の方を向いた。

その眼を見た時、私は一瞬戸惑った。

私はその眼を知っている。

周りから拒絶され、認められず、孤独を過ごし、生きる目的もない。

生きていくことに疲れた眼だ。

幼い頃、お嬢様と出会う前の私と同じ眼。

「……。ああ、悪い。空なんて見てたもんだからつい、な」

少年が言っている意味が良く分からない。

「お姉さん、悲しそうな顔しているよ。俺の眼見て、なんかつらいことでも思い出したんだろ？」

相手の心も見抜くか。

「君はなんでこんなところにいるんだ？」

「ふむ。実に奇妙なことが起きてね。俺もさっぱり訳が分からないんだ。

俺は学園長から2-Aの副担任をやるようにいわれ、双子の兄と共に女教師に案内され、教室に向かった。

一人ずつ紹介するから廊下で待っているように言われ、待機していた。

そうしたら外の花壇に見たことがない花があったので気になり、探究心を抑えられず、気がつくまで花壇の前にいた。

通りかかった用務員の男性に花のことを聞くと、詳しく教えてもらえ、とても満足したんだ。

そしてその時気がついた。現在位置がわからない。つまり教室に戻る道も分らない。

取りあえず歩いていたら、空が気になり、今に至る」

腕を組み、世の中不思議なことだらけだなとため息を吐きながら少年は言う。

私は瞬時に理解した。この少年は変わっている。

突っ込むところが多すぎて、何処から突っ込めばいいのか分からない。

この少年をどうしたらいいか悩んでいると携帯に着信があった。

真名からだった。

『やー刹那。少し遅いが、なにかあったのか？』

「いや、そっちは問題なく片付いた。だがその後面倒なことにかかわってしまった」

『ほう。どんなことだ？』

「何と言うか……変わった少年がいてな」

『……それはもしかして全身真っ黒な子か？』

「あ、ああ。何だ知り合いか？」

『そうだ。刹那、その子を捕まえる。訳は後で話す。とにかく確保しろ。必ず身体の何処かを掴んでおけ』

事情が掴めないが取りあえず、少年を確保しとくか。

……。

『どうした、刹那？ちゃんと捕まえたか？』

「さっきまで傍にいたんだが、突然消えた」

何時の間に消えたんだ！？

## 七話

Side:真名

放課後になってもシギの居所は不明のままだった。

ネギ先生や高畑先生は大丈夫だと言っているが本当に大丈夫なのだろうか？

朝話した感じでは大丈夫のような気もするが、なぜかほっておけない。

刹那も同じ気持ちらしく、二人で探すことにした。

あの子の行動は本当に予測がつかない。

一応部屋に戻り、着替えて多少の道具も用意しといたほうが良いと判断した。

女子寮に急いで戻ると、女子寮の入り口付近でシギを見つけた。

建物と周囲を見ているようだ。

今朝とは少し雰囲気が違う。

真剣な顔で何かを測っているようでもある。

一体何をやっているんだ？

横にいる刹那も首を傾げる。

しばらく様子をみているとシギがこちらに気がついたようだ。

「やあ、真名。そっちのお姉さんも今朝ぶり」

何事もなかったようにこちらに挨拶してくる。

まったく。こっちは心配してやっていたというのに。

まあ、こいつからすれば何時ものことなのだろうが。

見失うと厄介なので早急に確保しておくか。

私はシギの右手と掴む。

「まったく、何処行っていたんだい？初日からさぼるのは問題だと思っよ」

「大丈夫さ。タカミチは気にしていなかった。学園長も同じだろうよ。ネギさえいれば問題ないんだから」

ネギさえ……か。

「そういう言い方は良くないと思うよ。君がいなくて心配する人もいるはずだよ。現に私は心配だったよ。刹那も神楽坂も心配していたしね」

シギはきょとんとしていた。



自分のことを心配するということが理解できないでいるかのようだ。十年近くそういう生活を過ごしてきたとしたら、簡単には考え方は変わらないかもしれない。

私はシギを部屋まで案内することにした。

ちなみに刹那には左手を握らせる。

これで逃げられることもないだろう。

正確には逃げているわけではないだろうが、最早同じことだろう。

「なあ、真名。これは流石に恥ずかしいんだが」

「年上のお姉さんに両手を握られて恥ずかしいのかい？」

「朝も言っただけど当たり前だろ」

「そうかい。まあ、もう少しの辛抱だ。むしろ喜んでおくと良い」

「ふむ。これが正に両手に花って奴か。それにしたって花が両方ともレベルが高すぎるな」

何か思いだしたようでシギが刹那の方を向く。

「そういえばまだそっちのお姉さんには自己紹介していなかったね。俺の名前はシギ・スプリングフィールド。」

「一応副担任」

「私は桜咲刹那だ。これからよろしくな」

シギと刹那が挨拶を交わす。

「刹那みたいな女の子を大和撫子って言うんだよな？」

「なっ！わ、私なんか」

「そうかな？刹那にぴったりだと思っけど」

刹那はシギの褒め殺しに赤面する。

シギのそれは計算がまったくない、純粹なものだということは分かるので余計に威力が高い。

このまま成長したら、女性関係では余計なトラブルに巻き込まれる可能性が高いだろうな。

## 八話

Side:真名

管理室にシギの荷物が届いていると聞き、荷物を引き取りに向かう。

シギの荷物は小さな鞆一つだった。

いくらなんでも少ないと思うのだが、シギは十分だと言う。

部屋に付くとまずは、軽く部屋の案内をする。

一日中さまよっていて汗もかいているだろうから、シギを風呂に入れることにした。

部屋の案内をしている間に風呂は焚いていた。

一人で大丈夫だと言うので任せだが大丈夫だろうか？

「ぎゃー、冷たい！なんだこれ!？」

あつと言う間にシギの叫び声が聞こえる。

はあー、まったく。

私は刹那に夕飯の支度を任せ、一緒に入ることにした。

シギはシャワーの使い方が分からず、悩んでいた。

なんでシャワーの使い方も分からないんだ。

私は一から使い方を教えてやった。

先程からシギの顔が赤いのだがさっきの水で風邪でも引いたか？

「顔が赤いが大丈夫か？」

「……べ、別に」

シギは赤い顔で私の顔を見てくる。

先程から私の顔から目線が動かないのだが……。

……ああ、恥ずかしいのか。

私としては子供に見られてもどうという事ではないだが。しかもこれだけうぶな反応をされては尚更だな。

明後日の方をみると気付かれると思い、私の顔しか見ることができないのだろう。

こうしてもらちが明かないので、シギの頭を洗ってやることした。

当然のごとく、誰かに頭を洗ってもらうことなど初めてだと言う。

眼を閉じてすっかり大人しくなり、借りてきた猫状態だ。

シギと自分の身体も洗い、湯船に入る。

湯船に浸かることも初めてらしい。

取りあえず、小さな子供の定番の、肩まで浸かって百数えるを教え  
てやった。

ちなみに今の私達の位置は向かい合っている。

当然シギは私の顔しかみていない。

最初、シギは私に背を向けていたのだが、弄ってみたい衝動にから  
れ、後ろから抱きしめてみたら

「ぎゃー！何するんだよ！？バカーー！！」

まるで私が襲ったみたいじゃないか。

一から順に数えていたシギが八十を超えたあたりで急に止まった。

日本語での数字が分からないのかと、シギの顔を見ると先程よりさ  
らに赤くなっていた。

疑問に思っていると、シギが湯船に沈んでいった。

私は慌ててシギを抱きかかえた。

眼を回しぐったりしていた。

完全にのぼせていた。

まったく、世話がかかる子だ。

## 九話

Side: 刹那

シギに夕食のリクエストを聞いてみると、食べられたら何でもいいと答えられた。

なんでも良いと言うのが一番困るとは、食事を作る者にとっては共通する問題だろう。

好きなものは何かあるのかと聞くと無いと言う。

ならば嫌いものはと聞くと同じく無いという。

試しに食事は好きかと聞いてみたところ、

喰って身体に栄養が補給されれば同じだと言われた。

シギの食生活がどういったものだったのか心配になった。

二年前までは姉代わりの女性が作りに来てくれたものを食べていたらしいのだが、それ以降は自分で自炊していたらしい。

どうやら二年前になにかあったらしく、それ以降シギは一人暮らしを始めたらしい。

何があったかは本人が濁っていたので聞くことはしなかった。

取りあえず、せっかく日本にきた初日なので和食でどうかと聞いてみると、笑顔で頷いた。

やはり和食は初めてとのこと、楽しみにしているようだ。

そこまで期待されるとプレッシャーがかかるの。

私の料理の腕前はあくまで普通なのだ。

突如、決まったことで買い物に行く時間もなかったが、昨日買出しをしていたのでなんとかかなりそうだった。

調理をしていると一度シギの叫び声が聞こえた。

何をやっているのだから。

風呂からあがるとシギは私服に着替えた。

予想はしていたが上下共に黒だった。

上は多少柄があるとはいえ八割以上黒なのだ。

米が炊けるまでまだ時間があるので、私も風呂に行くことにした。

風呂からあがってみるとシギはテレビに夢中だった。



真名はそんなシギをやや後ろから眺めている。

真名がシギから聞いた話によると、テレビは碌に見たことがないらしい。

私は少し意外だった。

学ぶことが好きなのだからそれなりに見ていたと思っていた。

知識を得るのなら書物の方が正確なものが学べるらしく、本をメインに読んでいたとのことだった。

食事は決して豪華とは言えないが、女子中学生がつくる一般的な家庭料理としては十分なレベルだと思う。

シギは箸を使えなかったが教えてあげると、あっという間に使いこなした。

日本人の同じ年の子供でも、ちゃんと扱えない子はいるのに、たった二、三分で使いこなすとは驚いた。

シギは私の料理が気に入ったらしく、箸が進んでいる。

こんなに美味しいものは初めて食べたね。と本気で言ってくるので恥ずかしい。

人と食事を共にして楽しいと思えたのは初めてだとも言っていた。

本当にシギは笑えないことを何でもないことのように言ってくるので、対処に困る。

これまでの生活も気になるが、私達と一緒に過ごす時間が楽しいと言ってくれることは嬉しく、なぜか安心出来た。

私のシギに対する思いが同情から来るものかはわからない。

過去の自分と重なりほっておけないだけかもしれない。

だが私の中でシギ・スプリングフィールドという少年は無関係の子供ではなくなっていた。

## 十話

Side: 刹那

夜の十時を過ぎたころからシギが大人しくなってきた。

どうやら睡魔が襲ってきたようだ。

子供らしくないところもあるが、こういったところは子供だな。

さて、問題はシギの寝る場所だな。

選択肢としては私が真名のベッド、もしくはソファアの三択だ。

私はシギと一緒に寝るのに、特に抵抗はない。

子供だという事もあるが、話していくうちになにか引き込まれる何かがシギにはあった。

真名もおそらく同じ気持ちだと思う。

問題はシギが素直に受けるかどうかである。

こいつは人の親切に慣れていないせいかな遠慮するところがある。

食事の時もご飯のお代わりを進めても遠慮していた。

真名と二人で高畑先生やネギ先生からシギの話は聞いていた。

しかし二人から聞いていた話とは随分違う気がする。

極度の方向音痴という事はあつてはいた。

しかし『他人と接することを極端に避け、一人であることを好む』。

本当にそうなのか？

少なくとも私にはそんな風には見えない。

他者と距離を取ろうとするところは確かにあるが、こちらがちゃんと向き合えば答えてくれる。

私や真名と話している時は実に楽しそうだ。

私は思い切つて聞いてみることにした。

「なあ、シギ。なんで他の人と距離を取ってきたんだ？」

私の質問にシギは意外な質問されたようで、少し驚いていた。

誰も理由を聞いたことがなかったのか？

「……………精神的に辛いものがあったからかな」

シギはつまらなそうに言う。

「辛いとはどういったことなんだい？」

真名が問う。

「なんていうか。今までの奴らは『ネギを見守る会』って感じの奴らだったからかな」

「ネギだけなのかい？」

「そうだよ、真名。あいつらはネギが大事でしょうがないんだよ」

シギはあくびをしながら答えた。

ネギ先生だけが大事か。

何故だ？

彼が飛び抜けた天才だからか？

彼と比べれば確かに見劣りするかもしれないが、シギとて十分、天才と言えるだろう。

それ以外のなにかもつと大事なことが関係しているのか？

「どうしてネギだけなんだ？」

私はよせばいいのに思わずそう訊いてしまった。

「……あいつはナギが…父親が選んだ息子だからだ」

シギは今までとは違い、かすかな悲しみを表し、呟く。



## 十一話

Side: 真名

『父親が選んだ息子』

はたしてそれはどういった意味なのだろうか。

私には分からなかった。

なぜ父親が息子を選ぶ必要があるのだ？なんのために？

シギの顔からは悲しみの色が消えないでいた。

右手で左胸をさすっている。

私も刹那もこれ以上訊くことはできなかった。

シギは少しの間顔を伏せた。

次に顔を上げた時には何時もの表情に戻っていた。

「やはりもう眠いな。今日は久しぶりにはしゃいだから疲れたみたいだ。悪いけど先に寝かせて貰うね」

シギはそついうと壁の隅、角になっているところに座る。

次に小さな棒をズボンのポケットから取り出した。

あれは西洋魔法使いが使う初心者用の杖か。

片膝を立て、そこに組んだ腕と頭をのせ、前に屈むような体勢になった。

予想外の行動に一瞬、訳が分からなかった。

だがすぐにそれが寝込みを襲撃された時のための備えだということが分かった。

シギが座った部屋の隅は玄関から続くドアから一番離れた場所だ。

すぐ近くには窓がある。

窓から敵が来た場合でも対処できる距離はある。

シギがとった行動は理解できたが、理由が分からない。

たかが九歳の子供がなぜこんな行動をとる？

流石にこれは問わねばならないだろう。

刹那のほうをみると真剣な顔で頷いた。

「シギ。何をやっているんだい？」

「何って、寝るところだよ」

「そんなところで寝なくても私か刹那のベッドと一緒に寝ればいい。遠慮はいらないよ」



「真名や刹那みたいな綺麗なお姉さんと一緒だと、緊張して眠れないさ。まあ、ネギは逆にそうじゃないと眠れないだろうけどね」

後半は本当だと思うが、前半は嘘だな。

数時間しか一緒にいないが職務上人の仕草には敏感なんでね。こいつのくせは多少把握した。

シギは基本的に人と話すときは相手の眼を見て話す。

だが嘘や誤魔化す時は決して相手の眼を見ることはない。

本人が意図としてやっているのか、無視気なのかは分からないが、恐らく後者だろう。

緊張の話のところは横を見、ネギの話のときはこちらを見ていた。

「それに二年ほど前からずっとこうやって寝ていたからな。ベッドになんて落ち着かなくて眠れないさ」

……二年もそんな体勢で寝ていたのか。

そういえば一人暮らしを始めたのも二年前と言っていたが何か関係があるのか？

## 十二話

Side:真名

私はシギに理由を聞くことにした。

「お前がとつた行動の意味を私も刹那も理解はできるが、理由が分からない。訳を教えてくださいませんか？納得出来たらもう何も言わない。だが言わない、納得できないときは無理やりにも一緒に寝て貰うよ」

「強引だね。……話すのはかまわないが、くだらん話だよ。いや、なかなか面白いはなしでもあるか」

「どんな話だろうとかまわさない。きかせてくれ」

シギはため息を吐くと、杖を前に出した。

「一応確認しておくけど、二人ともこれが何か知っているよね」

「ああ、西洋魔法使いが使う初心者用の杖だろ」

「そ。真名と刹那がこっち側の世界の住人っていうのは何となく分かっていたけどね。ちなみに明日菜ともう一人のお姉さんは一般人だな」

「なぜわかったんだ？」

刹那が問う。

「俺を相部屋にしたからな」

よく意味が分からないな。刹那も首をかしげる。

「最初、じいさんがネギと一緒に明日菜達の部屋にと言ったのは形だけだ。はなから俺を一人で暮らさせるつもりだったはずだ。真名の提案は本当に予想外だったはずだぜ」

それは学園長の態度で分かっていた。

問題はなぜシギを一人にしたいかだ。

「二人とも、俺の父親のナギ・スプリングフィールドって知っているか？」

「ああ。かつて世界を救った英雄だろ」

「そ、俺達の父親は英雄様だ。母親のほうはまったく知らないけどな」

シギは眠そうな顔で話し続けた。

シギ達兄弟のことは一応、機密事項となっていたが割といい加減なものだったらしい。

二人の周りの人間はだいたいは知っていたらしい。

ありきたりな話だが、似たようなものがあると、どちらが優れているかを比べてしまうのが人間だ。

シギ達も例外ではなかった。

最初は顔が似ているという点でネギは周りから好かれていた。

その時はそれほど差は露骨ではなかったらしい。

いや、正確に言うと自分では気づいていなかったとシギは自嘲した。

六年前、あの事件で全てを思い知らされた。

周りの人間はネギが大事で、ネギさえいれば良い。自分のことなどどうでも良いことを。

そして実の父親さえ、自分のことなど眼中になかったことを。

六年前の事件の詳細をシギは一切しなかった。

シギの顔は表面上では笑っていたが、私には泣いている子供の顔にしか見えなかった。

私はシギを抱きしめた。

シギはじっと動かなかった。

私の胸の中で微かにすすり泣く声が聞こえる。

この子は一体どれ程の悲しみを抱えて生きてきたんだ。

六年前に何があったなんて私にはとても聞けなかった。

S i d e : 刹那

少しの間、シギは泣いていたが顔を上げた時にはなんとか回復したようだ。

しかし辛そうな感じは消え切れていなかった。

私達はシギの心の傷をえぐっているだけではないのか？

そういう思いが無いわけではないが、私は知りたかった。

シギの辛さを。

六年前の事件以来、シギは周りから距離を取り始めたようだ。

ネギの傍にいと嫌でも自分が必要のない存在など思い知らされる  
と。

周りの人間もシギには関わろうとするものはいなかった。

兄のネギともほとんど接してはこなかった。

もっともこちらは自分のことで精一杯で、シギを気にする余裕が無  
かったらしい。

兄弟仲は悪いという以前に、互いに干渉しなかったのでそれ以前の

はなしだと言う。

そんな生活が四年間続き、今から二年前、例の事件が起きたらしい。

シギは横になって眠れなくなった事件が。

## 十三話

Side : - - - - -

当時、シギとネギの兄弟は一応同じ家に住んでいた。

特に関わることもなく、たまに姉代わりの女性が来たときに食事を一緒にとる程度だった。

もともと女性はネギのことしか眼に入っておらず、シギには居心地が良いとは言えなかった。

その晩も女性が止まりにき、ネギは女性と眠っていた。

シギはそれに関して、寂しいともなんとも感じていなかった。

それが普通なのだ。

何時ものように寝ていたシギだが、突然身体に四年前と同じ衝動が襲ってきた。

それは死の恐怖。

身体が発する本能に従い、シギは起き、横に飛んだ。

その刹那、自分が今まで寝たいたベッドが爆発した。

魔法が撃ち込まれたようだ。

現状を理解する暇などない。

自分は心も身体も何も準備ができていないのだ。

この暗く、狭い室内もまずい。

シギは枕元に置いていた自分の杖を掴み、窓から飛び出した。

厳密に考えた結果の行動ではなかった。

四年前の恐怖、いや、遠い昔、戦い抜いてきた魂に刻まれた本能が彼を動かしたのだ。

家は街のはずれにあり、すぐ傍は森だった。

森に入り、そばに誰もいないことを確認し、初めて考えを巡らす。

嫌な感じは一つしかしなかった。恐らく相手は一人だ。

かろうじて眼の端で捕えた姿は茶色のロープで覆われ、顔は見えない。  
った。

爆発から考えて、実力は並みの術者程度か。

初手をかわされたあと、追撃は来なかった。

こっちが避けるのは想定外で、とっさに行動できなかつたようだ。

おそらく実戦はほとんど経験したことはないだろう。



わずかにある記憶を、感じたことを総動員して考察する。

判断材料が少なすぎて、確かなことは一つもない。

五分程すると人が近づいてくる気配がした。

さっきの奴だ。

行動に移った時には、思考は止まっていた。

考える時間は終わった。

背後に回るり、無詠昌の魔法の矢で相手の四肢を潰す。

動けなくなった相手から、杖を奪い、顔を確認する。

シギは驚いた。

相手はよく家を訪れ、ネギと父について語り合っていた男だった。

珍しくシギのことを気にかける気さくな男だった。

シギにとって心を許せるほどではなかったが、周りに比べれば親しかった。

シギが驚いていると、男は不気味な笑い声を上げ始めた。

「なんで俺がお前を殺そうとしたのか教えてやるよ。

英雄の子はな、二人もいらなんだよ。

容姿も似ていて、才能の豊かな天才のネギさえいればいいんだ。

周りの連中の態度で、お前だって良く分かっているだろうが。」

男は狂気に包まれ、狂ったように喋り続ける。

「くく、実の父親に、ナギ様に見捨てられた哀れなガキが。

四年前の事件が全てを物語っている。

誰もお前なんか必要としていないんだよ！」

必死に胸の奥深くに蓋締め、閉じ込めていたものを引きずり出され、土足で踏みにじられた。　　そんな気持だった。

今まで抑えてきた悲しみが怒りに変わり、シギは男を黒い炎で一瞬にして灰にした。

シギが生まれて初めて人を殺した瞬間だった。

一時間程たち、家に戻ると十数人の大人たちが集まっていた。

ネギは女性に抱きしめられ眠っていた。

周りの大人たちがそれを暖かい眼で見守る。

誰もシギには話しかけない。シギも話しかけない。

今あったことを話そうとは思わなかった。

下手をしたらますます自分の身の危険が増すかもしれないからだ。

悪くなることはあっても、良くなることは決してない。

程なくして、お互いの安全のためという理由で、ネギは他の家に住むことになった。

## 十四話

Side: 刹那

目覚ましの音で目が覚めた。

昨日はあまり眠れなかったな。

シギが話してくれた過去は、私の想像を超えていた。

私も周りからうとまれていたが、命を狙われることなどなかった。

英雄の息子……か。

同じ息子でもこうも違うとは。

シギは話し終わると直ぐに眠ってしまった。

シギにとって過去のことを話すのは精神的にかなりきついようだ。

当然か。まだ九歳の子供なのだから。

シギをそのままにしておくことなどできず、とりあえず二段ベッドの下の真名のベッドに真名と一緒に寝ることにした。

私は気持ちを切り替えるために背伸びをした後、下に降りていった。

真名達を起こそうとすると真名はすでに起きていた。

シギを見詰める頬笑みはとても温かく感じられた。

「やあ、刹那。おはよう」

「おはよう、真名。どうかしたのか？」

「いや、寝顔は本当に可愛いな、と思ってな」

私はシギの顔を覗き込む。

シギは真名の腕を枕代わりにし、気持ちよさそうに寝ていた。

後、数センチで真名の胸に顔がうづくまる微妙な距離。

いっそのこと抱きついてしまえば良いものを。

シギはもっと子供らしく人に甘えることを覚えるべきだな。

そんなことを考えていると、あることに気がついた。

まったく、こいつは。

「どうかしたのか？刹那」

私の変化に真名が気がつく。

私は真名の腹を指さした。

真名が自分の腹を見ると、微笑む。

シギの右手が真名の服を握っていた。

恐らく無意識の行動なのだろうな。

シギを起こすのは真名に任せて私は朝食の準備をするか。

昨日の夕飯は和食だったから、朝食は洋食にしてやるか。

## 十五話

Side: 真名

すっかり熟睡している。

無理もないだろう。

今までのような姿勢で眠っていたのだ。

満身に眠れた日など無かったはずだ。

本当はもう少し寝さしておいてあげたいところだが、もうそろそろ起こしたほうが良いかもしれないな。

私は眠っているシギの身体をゆすった。

シギがゆっくり目を開ける。

身体を起こすと眠たそうな顔であたりを見まわす。

状況が理解できないでいるのか、首をかしげている。

私が説明しようとするとしギはまた横になろうとし始めた。

「はいはい。もう起きる時間だよ、シギ」

「んー」

シギはまるでだだをこねる子供のような声を出す。

まだ寝ぼけているみたいだな。

私はベッドからおりる。

そして眠そうに半分目をとじ、ふらふらしているシギを洗面台まで手を引き、連れていった。

洗面台の前に立たせ、水を出すと、シギは顔を洗いだした。

「ほら、タオルだ」

「ありがとう」

シギは顔を拭き、顔を上げるとすっきりと眼が覚めたようだ。

私が昨日のことを話すとシギは、恥ずかしそうに頭をかく。

それから少し顔を赤くし、ありがとうと言った。

このありがとうはどれに対する礼なのかな。

心配したこと？話を聞いたこと？一緒に寝たこと？起こしたこと？

恐らく全部かな。

正面切って礼を言うには照れくさいのだろう。

刹那が作ってくれた朝食を食べ、学校に行くしたくを始める。



さて、昨日のようになるのはまずいので先に言っておくか。

「今日はちゃんと学校に行くんだよ」

「昨日はちゃんといっただろう?」

「確かに学校にいったが、授業にはでていないだろう。まったく、それじゃ意味ないじゃないか」

「俺はちゃんと授業に出るつもりだったさ。しかし気がつくとき知らない場所について、教室までたどり着けなかっただけさ」

……駄目だなこれは。

取りあえず学校までは三人で一緒にいくことにした。

シギも了承したが手をつないでいくことは拒否した。

流石に大勢がいるなかでは恥ずかしすぎると。

多少、不安ではあるが刹那と二人で注意しておけば大丈夫か。

鞆をもち、家を出ようとしたその時、私の携帯に着信があった。

学園長からだった。

< 没ネタ >

「シギ、ちゃんとティッシュとハンカチは持ったか？」

「ん？ああ、ちゃんと持ったよ」

「ハンカチが黒いのは予想通りだが、ティッシュまで黒か。良く見つけたな」

「自家製だ」

## 十六話

Side:真名

こんな早くに何の用だ？急ぎの依頼か？

私は携帯に出た。

『龍宮です』

『わしじゃ。朝早くからすまんのう、龍宮君』

『いえ、大丈夫です。仕事の依頼ですか？』

『いやいや。実は今回は君ではなく、シギ君に用があるんじゃない』

『シギにですか？』

『そうじゃ。今、傍におるかの？』

『ええ、いますよ。少々お待ちください』

私は携帯をシギに渡す。

シギはため息を吐きながら受け取った。

シギはつまらなそうに話し始める。

最も話すと言うより、ただあいうちをうっているだけなのだが。

話が終わったらしく、シギが私に携帯を返す。

「なんのようだったんだ？」

「なんでも俺に会わせたい奴がいるから、今日は授業は良いからそっちに行けとさ」

学校そっちのけで人に会うか。不自然だな。

シギは昨日授業に出ていない。それなのに今日も出る必要が無いとは。

ひょっとしたら授業に出させる気はないのか？

昨日の今日で行き成りと言うのはおかしい話だ。

それほど急いでいるのなら、何故昨日会わせなかった。

向こうの予定があわなかったのか？

確かにその線もあるかもしれないが……。

「誰か心当たりはあるのか？」

「あるわけないだろ、刹那」

シギは刹那の質問に肩をすくめる。

「まあ、それにしても思っていたより随分早かったな」

「どづいづことだ？」

「会う奴の特定はできないが、目的なら検討はつく」

「目的？」

「ああ。なんで当初の予定では俺は一人になる予定だったか？  
答えは簡単だ。何が起きてても隠すのが簡単だからだ」

「何が起きてても、というのは襲われ、殺される。ということか？」

「そうだ。真名達と同室が認められたのもそこにある。こちら側の人間だから事情を説明できるし、いざとなれば簡単に圧力をかけられるからな」

なるほど。確かに納得できる話だ。

この学園の結界により、一般人にもあまり魔法関係ことについて、疑問を起こしにくくする効果がある。

しかし人一人、いきなり消えたとなるといらぬ噂、不安を生むことになってしまう。

魔法使い側からの圧力となると、私も刹那も何もできないしな。

よほど気が短い相手なのか。それとも学園長は私と刹那がこれ以上シギと関わりを深めるの防ぐために焦っているのか。



## 十七話

Side: 刹那

いくらなんでもめちゃくちゃな話だな。

どうしてそこまでしてシギを殺そうとするんだ？

気がつくともシギが私のことを見ていた。

「何でそこまでするのか分からないって顔だな。

昨日は話す前に寝ちまったが、実はもう一つ俺には命を狙われる理由がある」

「もうひとつだと？」

「そうだ。なかなか愉快でくだらん話だ。最初聞いたときは正直困ったもんさ」

シギはもう一つの理由を話し始めた。

魔法世界に存在する『MM元老院』のなかに予知能力をもつものがあるらしい。

かなりの高齢らしく、今までに多くの未来を当てているそうだ。

もっとも予言と言っても詩のようなもので表され、本人すら解読も完璧にはできず、起きた後照らし合わせ、そこで完全に当たっていることが分かる程度のものらしい。

その予言者が一年半前ぐらいに新たな予言をだした。

ナギ・スプリングフィールドの息子であるシギ・スプリングフィールドはいつか世界に災いをもたらすと。

穏やかではない話だ。

元老院達はすぐさまシギの暗殺を計画した。

たった一人の命で世界の平穏が続くならどうとこととはないと。

ふざけた話だ。人の命を何だと思っているんだ。

MM元老院はこの学園の上部組織だ。

やつらにとって、ここは都合のいい場所と言う訳か。

「シギ、お前は何処でそのことを知ったんだ？」

「去年、知りあいに教えてもらったんだよ。

ちなみにその時、暗殺者も来てね。

あのときはまずかったな。

流石にお偉いさんが送ってきた暗殺者だった」

「勝てたのか？」

「俺はぼろぼろにやられたさ。そいつを殺してくれたのはその知り



合いの方だ。

『こいつを殺すのは俺だ』って感じだね」

色々な奴から狙われているのか。

シギの眼は濁ってはいなかった。

むしろ驚くほど純粹なのだ。

どうしたらこのような境遇の中、これほど心を保っていられるのだろうか。

私はシギに聞いてみた。

シギから帰ってきた返事は予想外だった。

『前世の記憶があることってあると思うか？』

## 十八

Side: 刹那

前世の記憶か……。

テレビなどで前世の記憶があるという人を何度か見たことがあるが、私には本当のことだとは思えなかった。

しかしシギはこの状況でそんな嘘をつくだろうか？

「お前は前世の記憶があるのか？」

「ああ、そうだ。はっきりと覚えているわけではないが、印象が強いことなどは割と覚えている」

シギが言うには最初は覚えていなかったらしい。

ごくごく普通の子供だったと。

しかし六年前の事件で死にかけた時、突如前世の記憶が頭の中を駆け巡ったように思いだしたと。

小難しい理屈などいらぬ。

人によっては唯の妄想や頭が可笑しくなったと思うかもしれないが、シギにはそれがはっきりと過去の自分が体験したことだと分かったらしい。

前世のシギは一人の少女と共に旅をしていたらしい。

その少女はとある理由により、不老不死だそうだ。

寿命で死ぬことはありえない。

誰かに殺されていなければ、今もまだこの世界のどこかで生きているはずだと。

自分が死んでからどれ程の月日が流れているかは分からない。

しかし少女が生きていることを信じて疑っていなかった。

またその少女に会いたい。

例え出逢えたとしても受け入れられないかもしれない。

それでも構わない。

少女に一目だけでも会いたい。

その思いが自分を支えてきたと。

それは広大な砂漠でたった一つの小さな宝石を探すようなものだった。

これほどまでシギに思われている少女に私は僅かに嫉妬を感じた。

## 十九話

Side:真名

精神は肉体に影響される。という話を聞いたことはある。

シギの場合もまさにそれだったようだ。

過去の記憶があるとはいえ、赤ん坊からやり直している。

過去の精神年齢を維持したまま、加算されることはないのも道理か。

だが、通常の子供と違うのも確かだ。

実に曖昧な奇妙なものだとシギは自嘲していた。

シギが私達の眼を見詰めてくる。

その眼は今までとは違うものだった。

穏やかで優しく、戦い抜いてきた戦士の眼。

もう一つのシギの顔を見た気がした。

シギはゆっくりと頭を下げる。

「真名、刹那。ありがとう。君達のおかげでたった一日とはいえ、俺は唯の子供でいられた。

ずっと一人で抱えてきたことも話せた。

「なんだか胸につかえていたものが取れ、すっきりした気分だ」

「別にかしこまって礼を言われることなんてしていないよ。私も刹那もやりたいようにやっただけさ」

私の言葉に刹那も頷く。

「これからどうするつもりなんだい？」

「取りあえず俺を御指名の奴に会ってくる。本気で俺を殺そうとしてきたら、返り討ちにするなり、逃げるなりするさ」

「できるのか？」

「並みの使い手ならなんとかなるな。だがタカミチあたりが出てくるようなら流石にまずいな」

まあ、こっちも潔く殺される気はないがね」

高畑先生がシギを殺しに来ることなどあるのか？

……ないとはいえないか。

あの人も立派な魔法使いの一員だ。上からの命令ならやりかねない。

学園での彼は良い先生だ。実際本人も良い人だろう。

しかし戦士の時の彼は違う。敵には一切の容赦はない。

過去の大战の敵の残党をことごとく殺して回っている。

敵に戦意があるうとなかるうと。

「今回の件を乗り越えられたら旅にでも出るよ。昔のようだね。さてと。少し長話しすぎたかな。そろそろ行かないと遅刻するよ」

まったくこんな時に何を言っているんだ。

シギの口が高速で動く。右手にはいつのまにか杖を持っていた。

呪文詠昌か！

気がついたときにはもう遅かった。

身体が動かない。刹那も同じようだ。

なんて高速の詠昌なんだ。

すでに並みの魔法使いなど凌駕している。

「じゃあな。君達と過ごした一日は最高に楽しかった。これで俺の生きる支えが一つ増えたよ」

馬鹿なことを言つな。

あんなありふれた日常が支えだと。そんなものこれからいくらでも過ごさせてやる。

「真名、刹那。……さようなら」

シギはドアから外に出ていった。

ドアが閉まると私達を縛りつけていた魔法が解けた。

私達は急いで外に飛び出したがシギの姿は何処にも無かった。

私は一体どうすればいいんだ……。

## 一話

Side: 学園長

シギ・スプリングフィールド。

まったくやっかいな存在じゃ。

先程、龍宮君と桜咲君がシギをどうするつもりか聞いただしてきた。

その表情はとても真剣で本気で心配しているようだった。

たった一晩一緒にいただけであの二人をひきこむとは。

実戦経験もあり、利口な彼女達がおかしな術にかかるとは考えづらい。

彼には人を引き付ける何かがあるというのか。

やはり早急に手を打っておいて正解だった。

彼らのいた魔法学校の校長とは古い友人だった。

以前より英雄の子であるネギ、シギ兩名についての相談を聞いていた。

兄のネギの方は全ての科目において常に満点に近い点数をとっていた。



しかし弟のシギは兄とは対照的に常に合格点ぎりぎりの点数しか取れなかった。

兄は天才、弟はできそこない、欠陥品といわれた。

シギの方も普通に考えれば十分に凄い。

しかし比べる相手が悪すぎたのだ。

六年間の事件で二人が住んでいた村が悪魔たちに襲撃された。

その時、行方不明だったナギがネギを助け、自分が愛用していた杖をネギに渡した。

全てはネギの証言だったが杖は確かにナギのものだった。

この事件によりネギはナギが選んだ後継者と認知された。

行方不明だった父親が最愛の息子の危機に駆けつけて、救い出した。その後息子に自分の思いを託した。

と言う感じに美談化され、ネギに対する周りの期待も大きくなった。

その時、シギがどうしていたかを知る者はいない。

英雄の息子を快く思わない者達も当然いた。

しかし周りからの注目高いネギに手を出すことはできなくなった。

その矛先は全てシギに向かったのだった。

周りのものにとってシギの存在価値などその程度のものだった。

校長をはじめ、教師達も黙認していた。

ネギに被害が出ないことが優先されたからだ。

しかしある時か不穏な噂が出始めた。

シギに過剰に手を出したものは消される、と。

実際に行方不明になったものが数人おった。

そのほとんどが最後にシギに会いに行つて消えたものだった。

調査されたがシギが何かやったという証拠は発見されず、そのままとなった。

その時の調査でシギと話した校長はシギの中に闇を見たと言つ。

彼は自分達『立派な魔法使い』とは対象に位置する存在だと。

その時彼は一つの不安が頭をよぎった。

シギは本当にできそこないなのか？彼の成績は本人が意図してやっているものではないのか？

一人前の魔法使いと認められれば、ある程度の行動は自由になる。

そのための最短ルートを彼は確実に歩んでいる。

天才の兄の影にうまく隠れながら。

不安は恐怖に変わった。

ネギと同等の実力を持っているとしたら、将来は父親と同等の力を得るかも知れない。

彼の長年の直感が警告した。

彼は決して立派な魔法使いになることはない。

今なら自分達の手でなんとかできる。

しかしこれはあくまで自分の直感にすぎない。

彼はまだなにもしていないのだ。

場所も悪かった。本国に近すぎた。

そこでこの学園に白羽の矢がたった。

ネギを預かることは既に決定した。ここは彼を預かる場所として打ってつけだったからだ。

一つ問題があるとすればエヴァンジェリンが暴走する可能性だ。

だが奴はネギの呪いと学園の結界によって満足に戦えない。

彼女がネギに手を出してくるのは明白だが、力が抑えられている今なら、彼にとつても良い経験になるだろう。

いざとなればわしかタカミチ君が出れば良い。

だがもつとも確実に彼女を動かす方法がある。

彼女が一番欲しいのは自分を縛っている呪いの術者、ナギの血縁者の血液だ。

命までとるとは思えんが可能性はある。わずかでも命の危険があるのなら避けるべきだ。

そこで必要になるのがシギだ。

シギを差し出す代わりにエヴァンジェリンをこちらで動かす。

最愛の兄を助けるために自らを犠牲にしたと言う美談に仕立て上げることもできる。

## 一話

Side: エヴァ

昨夜、学園長くわんちやうから突然呼び出しがあった。

おそらくあの兄弟に手を出すな。

といったことだろうと思っていたが、まさかあのようなことを言い始めるとはな。

奴が出してきた話は、

『弟のシギは好きにしてくれて構わない。』

そのかわり兄のネギの実戦経験の相手をしてほしい』  
だった。

正直、驚くのを乗り越えてあきれた。

そんなに兄の方は大事か？それとも弟の方には生きていられると都合の悪いことでもあるのか？もしくはその両方か。

何んしてもいかにもあいづらしい手口だな。

立派な魔法使いのな。

自分達の手は汚さず、汚い仕事は他にやらせる。

そのくせ大義名分が立つものは、正義の名の元に容赦なく実行する。

じじいの持ちだしてきた話、それ自体は捨てたものではない。

私が欲しいのはネギの血縁者の大量の血だからな。

はつきりってどちらでも構わない。

奴らが手出しをしてこないのなら楽なものだ。

じじいやタカミチが妨害に出てくるとやっかいだからな。

だが、このまま相手の思い通りに話が進むのは面白くない。

ガキの相手などいちいちやっていられるか。

勿論、約束など反故にしてとつと去ってしまうものもありだが、約束は守らなければならないだろう。

『約束を守らないのは死ぬことより恥ずべき行為だ』とシギはよく言っていたしな。

じじいの出してきた条件は少し変えさせた。

『ネギの方には手を出さない。その変わりシギの方は生きるも殺すも、煮るなり焼くなり私の自由にする。一切の干渉は受け付けない。ネギの相手は一度だけしてやる。その後は知らない。』

ネギの件が済んだ後、学園を去る時は干渉しない』

それが私が出した条件だ。

じじいは少し渋ったが了承した。

これでやっとこの苦痛から解放される。

茶々丸が従者になってからは多少ましになったとはいえ、退屈なものな退屈だ。

小僧との待ち合わせの時間が迫ってきていた。

私ははやる気持ちを抑えて待ち合わせの場所に向かう。

周辺にはあらかじめ遠くから除かれないように認識障害の結界を張っている。

しかし今日は朝から妙に胸が騒ぐ。

森を進んでいくと開けた場所に出た。

待ち合わせの場所だ。

そこには一人のガキが立っていた。

こいつがシギ・スプリングフィールドか。

私の愛したシギと同姓同名のガキ。

後ろ姿なので顔はまだ分からない。

黒髪に黒のロングコート。

そいつは暗闇の中、まるでスポットライトのように月の光に照らされていた。

その姿を見た瞬間、胸が跳ね上がる。

ガキが私に気がつきこちらを向く。

ガキと私の眼が合う。

ガキは信じられないものを見たような顔をし、涙を流した。

眼を見開き、まばたきすらしない眼から、涙がとめどなく溢れ出している。

そのガキは私知っているシギをそのまま幼くした感じだった。

茶々丸が心配そうに声をかけてきた。

その時、私は自分も涙を流していることに気がついた。

私は吸い寄せられるようにガキの元へ歩いて行く。

眼の間に辿り着いた。手を伸ばせば届く距離。

「……シギ、なのか？」



「ああ、そつだよ。今も昔もシギだ。シギ・スプリングフィールドだ」

私には目の前にいる子供が、あのシギの生まれ変わりだと確信していた。

何故かは分からない。

理屈じゃないんだ。

私の中の何かが叫んでいるんだ。

「泣かないでくれ、エヴァ。俺はお前の笑顔が好きだった」

シギの手が頬に触れ涙を拭ってくれる。

シギは優しい声である時と同じ台詞を言ってくれる。

私はシギの胸に飛び込んだ。

あの時とは違い、私とあまり変わらない身体。

だがその身体から伝わってくる温もりはあの時と同じだった。

私は泣き続けた。

### 三話

Side: エヴァ

泣き続ける私の頭をシギは優しく撫でてくれる。

昔のような大きな手ではないが、手から伝わってくる温もりは同じだった。

「エヴァ。そろそろ顔をあげて笑顔を見せてくれ。俺の大好きだったお前の笑顔を」

私が落着いてきた時、シギが声をかけてくる。

私は涙を拭ってシギに笑いかける。

シギは笑ってくれた。

私はシギの眼の奥にわずかな悲しみをみた。

「どうかしたのか、シギ？悲しそうにみえるが」

「お前は何も変わっていないな。あの時の可愛いお姫様のままだ。だが俺はもうお前の知っているシギではないんだ」

「確かに姿はすっかり子供になっているが」

「違う、容姿だけじゃないんだ。俺はすっかり弱くなった。身体も心も。今の俺はただの弱いガキだ」

シギは泣きそうな顔で呟く。

「何があったんだ、話してくれ。大丈夫。私はちゃんと受け止めるよ」

シギはぽつぽつと涙りはじめる。

生まれて変わってからの九年間、シギは孤独と戦っていた。

戦いの中でシギは自分に対する自信をなくしてしまった。

無理もない話だ。

精神は肉体に影響される。

過去の記憶があるとはいえ、今は唯の子供なのだ。

いや、いつそ記憶などなかったほうが良かったのかもしれない。

大人だった頃の記憶がなければ、ただの子供として素直に寂しいと思えたはずだ。

誰よりも強かった。守りたいものは誰が相手だろうと必ず守っていた。

それが今では自分の身すらまともに守れない。

強くなりたいと願えば願うほど、今の自分の脆弱さを思い知らされた。

私はシギの頭を胸に抱きしめた。

「なあ、シギ。お前が死ぬ間に願ったことを覚えているか？  
私ははつきり覚えているよ。」

『もし、今度生まれ変われたら、またお前と一緒にいたいな。例え記憶がなくても良い。生まれ変わった俺がまたお前のことを好きになって、お前に好きになってももらえたら良いな』

大丈夫だ、シギ。今のお前はあの時は違い、弱い。

それはしょうがないじゃないか。

今のお前は唯の九歳の子供なんだ。

私が弱かったとき、お前が守ってくれた。強くしてくれた。

だから今度は私がお前を守ってやる。強くしてやる。

シギはシギだよ。

私は今のシギを好きになりたい。だからシギも今の私を好きになってくれたら嬉しい」

シギが私の胸の中で泣きはじめる。

今度は私が先程して貰ったようにシギの頭を撫でてあげた。

## 四話

Side: 真名

学園長から問答無用で追い出され、私達は独自に動くことにした。

シギは『今晚会う』と言っていたので時間は夜だろう。

学校が終わると私達は家に帰り装備を整え、日が沈むころシギを探しに出かけた。

魔眼を使い、あたりを見回して搜索していると、認識障害の結界を見つけた。

シギが中にいる可能性は高いと思い、私達は中に入って行った。

しばらく進むと開けた場所にシギを見つけた。

シギは私達と同じクラスの絡繰茶々丸の膝の上に座り、隣にいるエヴァンジェリンソンと楽しそうにしゃべっていた。

私と刹那はその光景を理解できずに困惑していた。

何をやっているんだ君は……。

「やあ、真名、刹那。こんなところでどうしたんだ？夜中に女の子二人で出歩くのは危ないよ」

私達に気がついたシギが私達の眼の前に来て、声をかけてくる。

「何しているじゃないだろ。こっちは君を心配して探していたんだよ」

「……………そうだったんだ。……………ありがとう」

シギは一瞬驚いたようだが、すぐに優しく微笑むながら礼を言う。

それを正面から受けた私は顔が少し熱くなった。

なんて表情かおをするんだ。

シギは今朝とは何かが違っていた。

何がと聞かれればうまく答えることはできない。

しかし何故かこれがシギの本来の姿なのだろうと思えた。

先程から突き刺さる視線を感じる。

エヴァンジェリンだった。

突然の来訪者である私達を鋭い目つきで見てる。

私達はまさにお邪魔と言う訳なのだろう。

「ひょっとして、学園長が言っていたのはエヴァンジェリンのことなのか？」

「ああ、そうだ。じじいには感謝しないとな。俺が会いたくてしょ

うがなかった奴に会わせてくれたんだからな」

私達はシギから説明を聞いた。

運命というやつなのかな。

まさかシギが言っていた少女がエヴァンジェリンだったとは。

学園長も飛んだ誤算だっただろう。

## 五話

Side: エヴァ

私とシギが談笑していると龍宮真名と桜咲刹那が現れた。

二人はシギの身を案じ、探していたと言う。

まったく、こっちは語りつくせないほどのことを語りたと言つのに邪魔をするな。

「それで君はこれからどうするんだ？ 思い人と再開できたのは良いが、彼女は『悪い魔法使い』の代名詞とされる存在だぞ。ますます身の危険が増したのではないのかい？」

「その心配は無用だ。 龍宮真名」

「理由を説明してもらえるかな？」

「いいだろう」

私は説明をしてやることにした。

じじとの契約のことを話してやった。

強制証文で契約したことだ。破られることはまずない。

下っ端共が暴走して止められなかった。などとくだらん方法を取ってきて問題ない。



私の別荘でシギを鍛えあげればすぐにそこらの連中では相手にならない実力になるはずだ。

タカミチがすぐに出てくると流石にやつかいだが深刻に考えることもあるまい。

ナギにかけられた呪いはシギのおかげで直ぐに解除できる。

私の力を抑えている結界の方も一時的とはいえ解除できる方法は見つけてある。

タカミチ一人ぐらい余裕でやれる。

さてと、あとは小僧の方を適当に遊んでやれば晴れて自由の身だ。

この学園から出てしまえば、私を縛るものは完全になくなる。

チャチャゼロも自由に動けるようになるし、四人で気ままな旅ができる。

私はシギに何処に行きたいか聞いてみた。

私は四人一緒なら何処でもいい。

しかしシギから帰ってきた言葉は思いもよらないことだった。

『あと少しでくだらん試験も終わり、一人前の魔法使いと認定される。』

ここまでやったんだ。どうせなら最後までやっておきたい。  
お前と茶々丸もあと一年と少しで卒業なのだからちゃんと卒業して  
からだ』

そういえばこいつは一度やり始めると、よほどのことが無い限り最  
後までやりとおす奴だったからな。

そこは変わっていないようだ。

そう言えば私は何年もくり返していたが、卒業式に出たことは一度  
もなかったな。

修学旅行も呪いのせいで一度も行くことはできなかった。

別に行きたいなどと思ったことはない！

そうだ、これは茶々丸の為だ。

あいつにとっては初めての経験だ。色々な経験をさせてやるべきだ。

## 六話

S i d e : エヴァ

シギの要望によりシギは魔法使いの課題を終えるまで教師をやり、それが終われば修行に専念する。

私と茶々丸は来年の卒業まで学園に通う事になった。

次は龍宮真名と桜咲刹那の二人をどうするかだな。

「シギのことはもう心配いらんぞ。二人とも元の生活に戻るんだな」

「それはもうシギとは関わるなということかい？」

「当然だ。先程貴様が言ったように、これまで以上にシギの立場は危つくなる。お前達に対する反応まで変わってくるぞ」

「意外だな。あなたが私達のことを心配してくれるとは」

「馬鹿ものが。誰が貴様等の心配なんぞするか。ただ貴様らに何かあればシギが自分を責め、悲しむ。それは避けたい」

「なるほど。よほどシギが大切なようだね」

「当たり前だ。私にとってシギが全てだ。勿論、茶々丸のことも大切だぞ」

「ありがとうございます。マスター」

「うむ」

シギがニヤニヤしながらこっちを見る。

「だいたい、貴様らとシギが過ごした時間などわずかなものだろうが。態々、危険な思いをする必要もあるまい」

「人が誰かを好きになるのに時間は関係ないと思うよ。もちろん、シギの為に死ぬ覚悟があるかと聞かれれば、今はまだないかもしれないがね」

ふん。ガキのくせに言うじゃないか。

「くくっ、シギに惚れたか？」

「さあ、どうだろうね。そこまではつきり言えないが、魅かれていくことは確かだね。」

この気持ちが恋愛なのかどうか確かめるためにも、シギの傍にいたいかな」

度胸もなかなかあるようだな。

いくら力を抑えられているとはいえ、こちら側の人間で私にこうも堂々と意見できるガキはそうはいまい。

## 七話

Side: 刹那

先程から真名とエヴァンジェリンさんの討論が激しくなる一方だ。

これはなんというか、恋する乙女同士の戦いというより、嫁と姑の争いに思えてきた。

もしくは恋人と浮気相手か。

私は真名のように自信を持ってシギのことを思っているのか？

確かにシギのことは気になる。放っておけない存在だ。

今日一日、シギのことで頭がいっぱいだっただ。

これは恋愛に繋がるものなのか？

それとも姉が弟の身を案じるようなものなか正直分らない。

しかし私にはお嬢様を守る使命がある。

シギの傍に居ることはお嬢様の傍を離れる必要がある。

シギとお嬢様。どちらかを選ばなくてはならない。

私にはお嬢様が全てだ。お嬢様の傍を離れることなどあるはずがない。

それなのに私は何を迷っているのだ。

気がつくと傍にシギがいた。

シギは眠そうにあくびをしている。

「なあ、刹那。あの二人はさっきから何やっているんだ？いい加減眠くなってきたんだけど」

な、何を言っているんだこいつは。

私は思わずこめかみを押さえる。

いやいや落ち着け。

いくら前世の記憶があると言っても今は唯の子供なのだ。

あの二人が何を白熱しているのかわからなくても無理はないだろう。

「……何か悩みでもあるのか？お前は俺の弱音を聞いてくれたし、今度は俺が聞いてやる番だろ」

シギは真直ぐに私を見詰めてくる。

こいつは本当に卑怯だな。

先程、子供だと思ったそばなのに、こいつに話せば何とかしてくれる、助けてくれると思ってしまう。

私はシギに話してみることにした。

「ふーん。木乃香の護衛ね。魔法のことは何で話さないんだ？」

「お嬢様のお父上の方針だ。私もお嬢様にはこんな血みどろな世界に関わって欲しくない」

「気持ちは分かるが、まず無理だろう」

「ッ！何故だ！？」

「木乃香の父親は俺の親父と共に戦った英雄だ。

その関係で命を狙われることもある。

それに本人が秘める魔力が桁違いだ。

奴自身にも狙われる要因はある」

「確かにそうだが、私が」

「お前が一生守ってやる、か？」

本当に分かっているのか？誰かを守るといふことは唯暴れることな  
んかより数倍難しいぞ。しかも護衛対象に気付かれないようにする  
なら尚更だ」

シギの言っていることは正論だった。

私にはシギに言い返す言葉が見つからない。

「まあ、今言ったことはくだらん話だ。極端な話、お前が誰よりも  
強くなれば可能でもあるしな。

だがな、木乃香はお前に守られるだけの人生なんか望んでいると思

うか？

少なくとも俺はエヴァに守られるだけの人生なんてお断りだ」

「お嬢様の意思……か」

「そうだ。あいつには戦う力がある。それもとびきり強大な力だ。それを鍛えれば相当なものになるはずだ。

まあ、あいつが攻撃に向いているかは分らんが。

取りあえず、魔力だけは一級品だ。

互いに助け合って生きていく。

それが俺が目指している生き方だ」

確かにお嬢様を守りたいというのは私の一歩的な押し付けなのかもしれない。

「刹那。お前、何を怖がっているんだ？」



## 八話

Side: 刹那

怖がる？私が。

「お前はさ。木乃香のことを話している時、わずかだが、怖がっているんだ。それが何に対してかまでは知らないが」

怖がっているか。

シギは凄いな。どうして分かるんだろうな。

そうだ私は怖いんだ。

お嬢様がこちらの世界を知り、傍にいて、私が化け物どもの仲間だと知られることに。

お嬢様に拒絶されるのが怖い。

怖いから自分からお嬢様を避け、逃げていた。

私は救いを求め、シギに全てを話した。

「くだらんことで悩んでいるな。生まれた種族がどうした？種族、人種、性別。そんなこと気にすること自体馬鹿げている」

くだらないだと。

確かにお前はそうなのだろう。

真祖の吸血鬼を傍に置いていたほどだ。

烏族とのハーフなんてどうでもないだろうさ。

しかし普通の人間はそうじゃないんだ。人間は自分と違うものは拒むのだ。

「まあ、落着けよ。俺は自論を変えるつもりはないぞ。例えお前がなんだったとしてもお前はお前だ。桜咲刹那だ。それ以上でもそれ以下でもない。

木乃香のことは良く知らないが、第一印象だとあいつもそんなことは気にしないと思うぞ。むしろお前の羽が綺麗だって褒めてくれるだろうさ」

「……しかし」

「あと俺がお前に行ってやれることは、木乃香を信じてやれ。そして少いで良いから勇気を出せ。

俺は自分のことを情けない奴だと思っていたよ。エヴァに会えても受け入れてもらえないんじゃないかって怯えていた。だが勇気をだして全てを話したよ。

エヴァは俺を受け入れてくれた。一緒に生きようと言ってくれた。お前も木乃香を信じる。俺が言えるのはそれだけだ」

シギは大きく背伸びをしたあと、まあ眠そうな顔になりふらふらし始めた。

お嬢様を信じる……か。

確かにシギの言う通りだ。

私が信じなくてどうする。

逃げないで向き合わなくてはいけなかったんだ。

……ただもう少し心の準備をする時間が欲しいな。

## 九話

Side:刹那

いよいよ眠気の限界が来たのかシキが本気でふらついている。

このまま倒れかけないのでシキの元に向かう。

「大丈夫か？」

「……だめ」

シキが私に身体を預けてくる。

倒れてくるシキを私は受け止めた。

目の前にシギの頭がある。サラサラな髪だな。

気がつくとは私はシギの頭を撫でていた。

……気持ちいいな。癖になりそうだ。

私がシギの髪の毛の感触を楽しんでいると、背筋が凍りつくような殺気を感じた。

「良い度胸だな。桜咲刹那」

「刹那、抜け駆けとは感心しないな」

私の背後に殺気を滲ませて睨みつける二人がいた。

「お、落ち着け、真名！エヴァンジェリンさんも落ち着いてください！」

「私は冷静だよ、刹那」

「さて、どうしてくれようか」

ま、まずい。怒りの矛先が何故か私にきた。

シギは騒がしいのを嫌い、ふらふらと私の傍から離れていった。

ちよつと、まてー！

この状況で私を置いて行くな！

S i d e : 茶々丸

シギ・スプリングフィールド。

彼の最初の認識はマスターをこの学園に縛りつける呪いを変えた男の息子。

私達の敵とも言える人間だった。

しかし実際に会ってみると、マスターの大切な人の生まれ変わりだという。

私の知る限り、マスターにとって大切な人は彼が初めてだった。

マスターにとっての大切な人は私にとっても大切な人。

なんて呼べばいいのだろうか？『シギ様』か？

シギ様と話をしている時のマスターはとても楽しそうだった。

私には感情が無い。

しかし楽しそうなマスターを見ていると妙な感じだった。

もしかしてこれが嬉しいという感情なのだろうか。

しかしもう一つ、わずかに別なものもあった。

私はマスターの身の回りのお世話をする為の存在だ。

常にマスターの傍にっていた。

だが私という時、マスターがあのように楽しそうに笑ったことはない。

ひょっとしたらこれが嫉妬というものなのだろうか？

シギ様は私の膝にうつ伏せになり、寝てしまった。

このままだと風邪をひいてしまう。

マスターに指示を仰ぐと思ったが、龍宮さんと桜咲さんと楽しそうに騒いでいた。

とりあえず私はシギ様を自分達の家運びベッドに寝かせることにした。

起こさないように慎重に抱えて運んだ。

自分のベッドに運び、その場を離れようとしたのだが、シギ様は私の袖を掴んでいた。

どうしたらいいのか迷っているとマスター達が駆けこんでいた。

「茶々丸！シギはどうした!？」

「お休みになっています。マスター。騒ぐとシギ様が起きてしまいます。お静かに」

「あ、ああ。そうだな」

「マスター。シギ様が私の袖を掴んでいるのですが、どうしたらいいでしょうか？」

「やれやれ。寝ると近くのを掴む、抱きつく癖は死んでも変わっていないか。

まあ、どうでもいいものは対象外だからな。茶々丸がシギに認められたと言う意味では良かったかもな。

取りあえず、今日はお前もそのまま寝てしまえ」

マスター達は部屋から出ていった。

シギ様は一瞬にして私達の中心になった。



## 一話

Side：明日菜

二日続けて学校に来なかったシギがようやく今日から授業に参加するらしい。

ネギのガキは魔法使いだ。

どこのフィクションだ！って言いたいところだけど、実際に魔法をみちゃったんだから信じない訳にはいかないわよね。

それにしても、魔法使いだってことがばれることがまずいのはわかるけど、いきなり人の記憶を消すってどういう神経しているのよ。

他の大事な思い出とか、忘れたくないものまで消えちゃったらどう責任とってくれるのよ。

おまけに消されたのは記憶じゃなくて、スカートと下着を消すなんて！

しかもそれを高畑先生に見られるなんて！

……けどまあ、見知らぬ男に見られるよりは、ましだったわね。

もしそうなら……はあ。

それにしても弟なんだからシギも魔法使いかって聞いたらあっさり認めただけ、良いのかしら？

『立派な魔法使い』か。

世のため、人のために陰ながら世界の平和を守る仕事ねえ。

いかにも世間知らずのお子様があこがれる仕事ね。

私も世間を知っている訳じゃないけどさ。

立派な仕事だとは思うけどやっぱり無償でやっているのかしら？

だとしたらお給料とかはどうするのかしら？

寄付金が税金みたいなものから貰えるのかしら？

確かに立派な仕事だとは思うけど、一番尊敬される仕事とはね。

バイトして学費を稼いでいる私としては魅力は薄いわね。

向こうの人達は偽善者が多いのかしら？

……偽善者？

偽善者ってこういう使い方であっていただけ？

ちなみにシギが何を目指しているのかネギは知らないらしい。

兄弟なのにあまり喋る機会はなかったらしい。

ね。ここに来る前は、別々に住んでいたって言うし、なんか複雑みたい

## 一話

Side：朝倉和美

ついに天才少年、ネギ君の弟君が今日、教室にやってくるとの情報を手に入れたわ。

初日からまさかのさぼり。

二日目は学園長直々のお使い。

ジャーナリストとしての私の勘が何かあると叫んでいるわ！

シギ・スプリングフィールド。

早く来て、私のその姿をみせなさい。

ホームルームの時間になり、ネギ先生が教室に入ってきた。

軽い挨拶のあと、廊下にいるシギ先生を呼んだ。

ついにきた！と思ったのだがなかなか入ってこない。

これはひょっとして初日と同じ展開なのか！？

ちよっと、先生！何で何の対策もしていないのよ！

ネギ先生が慌てて廊下を開けて外を覗き込む。

ネギ先生が扉を開けると同時に後ろのドアが開き、黒髪、黒スーツの少年が中に入ってきた。

黒髪の少年はすたすたと教室の前に歩いて行き、廊下を見ているネギ先生の後ろに音もなく立った。

「何やっているんだ、ネギ？」

あんたこそ何やっているのよ！

「うわっ！シギ、いつのまに教室の中に入ったの？」

「何言っているんだ。お前と一緒に入ってきただろうが」

嘘つけー！

「……そういえば、そうだった……かな」

お前も信じるな！！

なんなのよ、この子は。

黒髪の子はシギ・スプリングフィールドと名乗り、私達の副担任になると言った。担当は英語でネギ先生の補佐だそうだ。

やっぱりこの子がシギ先生なのね。

ネギ先生とは外見もそうだけど、性格は全然違うみたいね。

「さてと。こういったときの定番らしいからな。質問を受けつけようか。ただし、時間が無いので三つまでだ。可能な限り答えてあげよう」

ちっ！三つか少なすぎるわ。

「シギ先生！なんで三つまでなんですか？せめてもう少し増やしてくださいよ！」

「朝倉和美か。流石に行動力が良いな。ジャーナリストの血がたぎるか？」

「え！？なんで私のこと、知っているんですか？」

「何でって、さっき顔写真付きのクラス名簿渡されたからな。そこに所属している部活も書いてあったし」

職員室からこの教室に来るまでの間にクラス全員の顔を名前。おまけに部活まで覚えてたって言うの？

流石は天才と言う訳か。

「ところで、和美。なんで三つかというのが最初の質問で良いのか？」

ええ！？ちょ、ちょっと待ってよ。

ただでさえ少ないのに貴重な一個目をそんな質問で使いたくないわよ。

「まあ、今回は特別にノーカウントで答えてやる。なぜ三つかと  
いうと」

いじつ？

「……………特に意味はない」

……………は？

「何をほづけている」

「いやいやいや！意味ないんですか？」

「無いって言っただろっが」

わざわざもったいぶってそれはないだろー！

結局、授業の時間が来てしまっって何一つまともな質問ができなかつた。

ふふっ。だけど私はこんなことでは諦めないわよ。

いかにも真面目な優等生君のネギ先生じゃ、面白いことはないと思  
っていたけど、シギ先生は訳が分からないから面白い記事が書けそ  
うね。

### 三話

Side: 明日菜

一限目の授業は英語のため、ネギとシギがそのまま授業を開始した。二人の授業なのだからそのまま、シギへの質問を続けては、という意見も出たがシギが却下した。

当然騒ぎだす子達もいたが、シギが睨み、授業は勉強する時間だと言つと、皆黙ってしまった。

シギの奴、なんだか最初会った時と雰囲気が違う気がするのよね。

なんて言えば良いのか分からないけど、自然になったていうか、こつちのが本来のあいつなのかなって感じ。

後で龍宮さんか桜咲さんに聞いてみようかな。

授業中、シギは教室の後ろに立ち、教科書を見ている。

補佐っていつでも特にすることはないのかな？

授業は進み、教科書の本文を誰かに訳させようと、ネギが選り始めた。

絶対に私を当てるんじゃないわよ！

あさっての方に視線をむけ、ネギと視線が合わないようにする。



しかし私の必死のアピールもむなしくネギが私を当てた。

何で私に当ててるのよ！

私の叫びに対するネギの答えは訳が分からなかった。

私とネギが揉めていると、委員長の雪広あやかが代わりに答えてあげると言ってきた。

そこは流石に私のプライドが許さない。

仕方が無く、私は自分で訳すことにした。

……当然分かる訳が無かった。

なんとかやろうとは思ったのだが、自分でも訳が分からない文章になっっていることは分かる。

「アスナさん、英語ダメなんですねえ」

「なっ…！？」

「明日菜は英語だけじゃなくて、数学も駄目ですけど」

「国語も……」

「理科、社会もネ」

「要するに馬鹿なんですよ。良いのは保健体育ぐらいで」

クラス中から笑いが起きる。

確かに私は成績悪いわよ。

だからってなんでこんな恥ずかしい思いをしなくちゃいけないのよ！

私の怒りの矛先はネギに向かい、掴みかかろうとした。

「黙れ」

シギの声だった。

小さい声だったが、はっきりとクラスの全員に聞こえた。

低く、冷たい声。

クラスが一気に静まり返った。

「明日菜は分からない英文を訳そうと努力した。人の努力を馬鹿にするような屑を俺は許さん。」

例え、出した答えが外れていたとしても、分からないと放りださな  
いで努力したしたところは評価してやるところだ。

ここは学校だろうが。物事を学ぶ場のはずだ。  
分からないことがあって当然だ。

まあ、明日菜の成績が悪いのは事実みたいだがな。

俺が思うにお前はやっていないだけだろう。

特別な事情があるのか知らないが、もう少しやってみる。

一人で出来ないのなら、友達に頼め。俺でよかったら暇なときに手  
伝ってやるしな。

長々とすまなかつたな、ネギ。授業を再開してくれ」

それからシギは何事もなかったように、教科書に目をやった。

## 四話

Side: 明日菜

休みに時間にネギが慌ただしく、教室に駆けこんできた。

朝の授業お詫びにとあるものを持ってきた。

そう、惚れ薬だ。

冗談で言ったことなのに本当に持ってくるとは。

とはいえ、間違えてパンツを消すような奴の怪しげな薬なんて飲めるもんですか。

私はその薬をネギの口に押し込んだ。

ネギは薬を飲みほしたが、私には何も起きなかった。

やっぱりしょうもないものだったみたいね。

ネギはおかしいなと首をひねる。

こんなことで私の機嫌が直ると思ったらお間違えよ。

木乃香がまるで吸い寄せられるように、ネギに近づくと、当然ネギに抱き付いた。

それから次々にクラスの女性がネギにひしめいた。

き、効いている!?

もしかして本物だったの!?

ネギが教室から逃げだした。

廊下から私に助けを求める情けない叫び声が聞こえる。

しょうがないから助けてやるか。

ネギを探しているとシギを見つけた。

シギは黒い猫を見詰めていた。

何やっているのよ、あいつは。

「黒猫……やはり、黒は最高の色だな」

……本当に黒が好きなのね。

「お、明日菜か。ところで明日菜。お前の髪につけている飾り、黒いのに変えてみないか? 黒こそ至高の色だぞ」

「はいはい。あなたの黒好きは分かったけど、今はそれどころじゃないのよ」

私は先程の事件をシギに説明した。

シギは私の話をつまらなそうに聞いていた。

「なんであいつはお前に惚れ薬なんてやったんだ？ 思いつきり、こちらの世界のアイテムじゃないか」

「それは、私があんた達のことを魔法使いだって知っているからで……」

「あの天才君はたった二日ではれたのか？ おまけに俺のことまでしゃべりやがったな」

実は初日ではれているのだが黙っておいてあげよう。

「まあ良い。とつとつ、ネギを確保した方が良さそうだな」

駆けだそうとしたシギが急に止まると、私の傍に来て頭を下げると言う。

私は言われたとおりに前屈みになった。

シギの手が私の頬に添えられ、覗き込むようにシギが顔を近づけてくる。

近い、近い、近い！

「……やはりお前は惚れ薬の効果がでていないな」

顔を離れたシギが呟く。

その後、二人でネギを確保し、効果が切れるまで隔離した。



## 四話（後書き）

麻帆良の日常編ですが、原作に合ったイベントやオリジナルイベントをやっています。

私が話を書けたものからやっていくので、時系列がめちゃくちゃになってしまいます。

この章に関してはそこら辺は気にしないで頂けるとありがたいです。

この章で明日菜をヒロイン（予定）に追加しました。



## 五話

Side：明日菜

昼休みに高等部の女生徒と場所の取りあいでもめた。

その場に駆けつけたネギが一生懸命争いを止めようとしたが、まったく役に立たなかった。

その後、現れた高畑先生が見事に争いを止めた。

それにもないクラスの女子からの評価は低下した。

まあ、子供で可愛いから人気。という評価は先生としての評価とはいえないわよね。

ネギも頑張っているとは思うけど、成果はでていない。

皆、子供だからしょうがないって言う。

しかし仮とはいえ教師をやっていくうえで、子供だからという言い訳が通用するものだろうか？

新任なのだからしょうがない、ならまだ分かる。

誰だって最初からうまくいくとは限らない。

ちなみにシギは『唯の喧嘩だろ』と言って駆けつけてはこなかった。

次の授業は体育だった。

屋上でバレーなので屋上に移動する。

屋上にいってみると例の高等部の女生徒がいた。

自習だからここでバレーをやると言ってきた。

なんでわざわざこっちでやるのよ！絶対わざとでしょ！

よく見るとネギがあいつ等に捕まっていた。

体育の先生が来れなくなったので代わりにきたと言う。

それにしても何、あっさり捕まっているのよ。

頼りないわね。

シギのことを探してみると端の方で、座ってつまらなそうにこちらを見ていた。

止める気は全くないみたいね。

言い争いが高まり、まさに火ぶたが切って落とされそうになった時、ネギがくしゃみをした。

突風が巻き起こり、場の流れを止めた。

その後、ネギの発案により、ドッジボールで決着を付けることにな

った。

年齢、体格の差によるハンデとして、十一対二十二のハンデをけられた。

向こうは自分達は勝ったら、ネギとシギを譲ってもらおうと言いだめた。

その条件に一部の奴が絶対に負けられないと燃えていた。

気がつくともシギが私の傍に来ていた。

「本当にあのハンデで良いのか？」

「え？だって人数が多いほうが有利じゃない」

「ふーん。まあ、お前等が良いのなら別に構わん」

そう言つと、シギは離れていった。

## 六話

Side：明日菜

試合が開始され、私はシギの質問の意味を理解した。

ドッジボールで数が多いことは全然有利じゃない！

なんであの時に教えてくれなかったのよ！

しかも相手は関東大会優勝チームと名乗りを上げる。

……高校生にもなつてドッジボール部ねえ。

ドッジボールと言うだけあって、かなり強い。

あっという間にハンド分を追い付かれた。

完全に勢いはあっちだ。このままじゃまずい。

私が何とかしないと。

しかし相手は太陽を背にバレーのアタックのようにボールを打ってきた。

太陽の光のせいで相手とボールが見えず、捕ることも避けることも出来なかった。

ボールに当たり、手を地面につけた時、手首をくじいてしまった。

跳ね返ったボールを相手は同じように打ってきた。

手首の痛みのせいで反応が遅れた。

私はボールの衝撃にそなえる。

しかしボールが私に届くことはなかった。

私の目の前で小さな手がボールを止めていた。

シギだった。

「動けない女の子の顔を狙うのは少しやり過ぎだな」

シギは少し怒っているようで声が冷たかった。

シギの威圧に相手はたじろいだ。

その時、妙な風が吹き始めた。

もしかやと思い、ネギの方を見ると何かやるうとしていた。

あの馬鹿、また魔法を使おうとしている。

なんでもかんでも直ぐに魔法を使うのはどうなのよ。

あいつ隠す気があるの？

相手が卑怯なことをしたからと言ってこっちまでやれば相手と同じ

になっってしまう。

止めようとする、ネギの頭にボールが直撃した。

投げたのはシギだった。

「くだらんことはするな。それ以前にお前はもう少し考えてから行動しろ」

「痛いよ、シギ」

「ふん。明日菜、手首の方は大丈夫か？」

気が付いていたんだ。

「これくらい大丈夫」

「そうか。だがまあ、無理はするなよ」

そう言うと、シギはまた端の方に戻って行った。

その後は、シギの言葉に反省したのか、ネギがクラスの皆を鼓舞し、指揮を上げる。

こちらの有利になる時だけ、ルールブックを適応し、めちゃくちやになったがなんとか私達が勝利することができた。

## 七話

Side：明日菜

うーん。だけど本当にこれでよかったのかな。

結局、ずるして勝ったようなものなので、何だか後味が悪い。

「まだ、ロスタイムよっ！」

そう言うと、相手が本屋ちゃん目掛けてボールを打つ。

ルールブックを使ったからか？

本屋ちゃんの前にネギが飛び出し、ボールを受け止めた。

良くやったネギ！

ネギの手のひらでボールが凄い回転を始めた。

あの馬鹿また魔法を！せっかく褒めてやったのに！

ネギが魔法をかけたボールを相手に向かって撃つ。

そのボールを受け止めたのはなんとシギだった。

ボールが地面に落ちる。

ボールには血が付いていた。

シギの手をみると、ボールを受け止めた右手が血だらけになっていた。

シギは何も言わずに傍から離れた。

エヴァンジェリンさん、絡繰さん、龍宮さん、桜咲さんがシギの後を追った。

今回の騒動を後にシギに説明してもらおうと唯の茶番だったことが判明した。

まず第一に、コート使用がかぶった件。

こちらは正式な授業のカリキュラムとして以前からコートしようが登録されていたため、当日に自習のレクリエーションで後から変更されることはない。

『今回はこつちが先よ』などと言っていたが完全に向こうの出まかせだった訳だ。

次にネギとシギの移動。

二人の人事は学園長が直接行っているの、ただの学生達の勝負ごとでどうにかできるものじゃないらしい。

仮に負けていたとしても移動が起きることはなかったと言う訳だ。

なんで最初から止めてくれなかったかと聞くと、



「俺はネギの補佐が仕事だからな。あいつがやるって決めたからな。競技は予定のバレーだったしな。」

高等部との友好を深めるってことにしておけば問題ないだろう」

もってもらしい理由だが、私はただめんどくさかったと思っている。

シギの手の傷は大したことはなかった。

皮膚が多少破れただけで魔法を使えばすぐに治ったそうさ。

その日は周りを誤魔化すために包帯をまいてはいた。

ちなみにネギの弾は本来なら相手の女生徒にあつたても、こうはならなかったらしい。

彼女と近くにいた数名の衣服が消し飛んでいたとのことだ。

肉体的には問題なくても服を消され、下着姿にされるのは精神的にはきつい。

もっともシギが怒っていたことは一般人にすぐに魔法を使うネギの行為に対してらしい。

本当なら怪我などしないで相殺できたらしいが、怪我をすることによってネギに自分のしたことに反省してほしかったと。

ネギのことを考えてあげているんだと言うと、シギはこう答えた。

「はっ、あいつが馬鹿やらかすと責任が全部俺に来るからだ」

本当か嘘かは分からないが、少なくとも照れ隠しではなさそうだった。

本屋ちゃんにボールが来た時、何故助けなつたと聞くと

「気に入らなかつたからだ。

自分に都合のいい時だけ、ルールやらなんやらと騒ぎ、自分達はルール度外視。

なら相手が何をしても文句は言えんだろうが。

殺し合いならなんでもありだが、遊びはルールがあるから面白いんだろ」

若干、怒気を含ませていた。

しかし殺し合いって、また随分と物騒な例えね。

ちなみに試合を開始する直前に高畑先生が、終了まじかに源先生がやってきていたらしい。

先生達からは何も言われなかつたので容認されたみたいだ。

……高畑先生が何も言わなかつたのは、もしかしたら問題が起きた時、シギに責任を押し付けるためだったのではないかと何故か私は思った。

## 八話

Side: 刹那

放課後の教室に私とシギ、神楽坂さんの三人が残っていた。

神楽坂さんがシギに勉強を教えて欲しいと頼んだので、勉強をしているところだ。

何故私まで参加しているかと言うと、シギに捕まったからだ。

「お前も成績良くないからついでに教えてやる」と。

確かに剣術の稽古やお嬢様の護衛などで、勉強する時間があまりとれず、成績は芳しくない。

しかし私にはお嬢様を守る使命がある。

勉強などしている暇があったら、剣術の修行に時間を費やしたい。

私はもっと強くならねばならないのだから。

シギにそのことを言うと脛を蹴られた。

ツ！い、痛い！

私は涙目でしゃがみこんで脛をさする。

気がつくとも目の前にシギの顔があった。

吐息がかかる距離。

シギの眼は真剣だった。

「この馬鹿が。お前は一生の全てを木乃香の護衛に費やす気か？  
前にも言ったが、そんなことを木乃香が望んでいると思っているの  
か？

俺が思うに、自分のせいでお前の一生を滅茶苦茶にしたと、自分を  
責めると思うぞ」

確かにシギの言う通りだろう。

私は何を考えていたんだ。

結局、私の唯の自己満足だったではないか。

まったく、こいつには叶わないな。

更にシギは私に言う。

「将を射んとすればまずは馬を射よ、って言うだろ。明日菜は木乃  
香の親友だからな。木乃香を思うお前の気持ちも分かってくれるだ  
ろう。」

明日菜は面倒見が良さそうだからな。お前の悩みにも相談に乗って  
くれるはずだ。

それに俺が言うのもなんだが、お前交友関係少ないからな。  
気を許せる友達を増やすんだな」

確かに交友関係をお前に言われたくはないな。まあ、事実だが……。

お前も十分に面倒見はいいよ。

あのエヴァンジェリンさんがお前を信頼する気持ちがよく分かる。

私もすっかりお前に頼りきりだな。

## 九話

de：木乃香

今日はおじいちゃんの頼みでお見合い写真をとることになっていた。

おじいちゃんの趣味にも困ったものだ。

孫娘のお見合いのセッティングが趣味なのだから。

おじいちゃんが選ぶ人は、医者や弁護士など世の中ではエリートと呼ばれる人ばかりだった。

年齢は若い人を選んでいるようだが、中学二年の私とでは倍近く離れている。

私はまだ中学二年生だというのに。

結婚相手どころか恋人も出来たことが無いのに早すぎる。

いつもは大好きなおじいちゃんの頼みなので聞いてあげているのだが、今回は気分が乗らずその場から逃げだした。

逃走しているとシギ君を見つけた。

「こんにちわ、シギ君。こんなところでどないしたん？」

「ああ、木乃香か。さっきまで新田先生と教師について話していたんだ」

あの新田先生とシギ君が話を？

しかも話題が教師についてとは。

シギ君の評価では新田先生は素晴らしい先生らしい。

『今時あれほど生徒のことを思う先生も珍しい。

厳しさの中に生徒を思う愛が感じられる。

厳しく接することにより、あえて嫌われ役を買い、生徒を導く。

あの御仁こそ、正に熱血頑固爺教師だ！』

なにやらシギ君と新田先生は教師についての考え方が同じようだ。

私も厳しい先生⇨嫌な先生

優しい先生⇨良い先生

とは、思っていないが、九歳のシギ君がそこまで考えているとは驚きである。

驚いたと言えば、先程シギ君は直ぐに私だと気がついたことだ。

髪を結い、化粧をし、着物を来ている私を一瞬で見分けられた人はほとんどいなかった。

私はシギ君に理由を聞いてみた。

「外見が多少変わったからと言ってそれがどうした」

シギ君ならすれば私の質問の意味の方が分からないと言ったかんじ

だ。

「木乃香、随分とめかしこんでいるな。良く似合っていると思うぞ。綺麗だ。」

お前も刹那と同じで大和撫子だな」

「ありがとうな、シギ君」

シギ君の真直ぐな褒め言葉に、思わず恥ずかしくなった。

「それで、今からデートか？」

私はシギ君のおじちゃんのお見合いの趣味と私の不満を話した。

自分より年下の子にこんなことを話してもしょうがないのは分かっている。

しかし私はシギ君に相談していた。

明確な答えが欲しい訳ではない。

話したいと思うのだ。

「取りあえず、もうじじの道楽に付き合うことはないな。」

ああいうじじいは相手してやると調子に乗るからな。

一回きっちり理由を言った後で断って、それからは付き合う事はない」

シギ君は私が思っていた以上の答えをくれた。



シギ君は変わった子だけど悪い子ではないと思う。

そういえば、おじいちゃんはお見合いの相手にネギ君はどうかと聞いてきたことが何度かあるが、シギ君については一度もない。

私がシギにそのことを言うと可笑しそうに笑い始めた。

シギ君は自分がお見合い相手には選ばれることなど、決まてないから安心しろと言う。

シギ君は私が持っていた相手のお見合い写真を手に取る。

次の瞬間、写真達は黒い炎に包まれ、瞬時に灰となった。

私はその光景に目を丸くする。

「す、凄いな、シギ君は。シギ君は手品師やったんか？」

「おしいな、木乃香。俺は手品師じゃない。

魔法使いだ

」

## 十話

Side：木乃香

魔法使い？

シギ君の口から出ていた思わぬ単語に呆ける。

目の前の少年は手品師ではなく魔法使いだと言った。

本来なら子供らしい微笑ましい言葉なのだが、なぜかそのようには感じられなかった。

真直ぐにこちらを見詰める眼差しが真剣だったからだろうか。

「ま、魔法使いか。シギ君はおもしろいこと言うなあ」

ようやく私は言葉を振り絞ることができた。

「くく、まあ、いきなり言われても信じられないだろうな」

そんな私にシギ君は笑いながら言った。

シギ君は私に『この世にあり得ないなんてことはありえない。どれほど信じられないことであろうとも起こること、存在していることはある』と言った。

それはつまりシギ君は本当に魔法使いだと言う事なのか？

「そんなことは自分の眼で見て、それからよく考えるんだな」

シギ君は私の問いに笑いながら答えた。

問題だけ出して、答えは教えてくれない。

なにやら宿題を出された気分だ。

「魔法なんてものは別に特別なものじゃないさ。

例えば言葉だ。

人を喜ばせることも出来れば、逆に傷つけることも出来る。

ある意味魔法みたいなものだろ？」

シギ君はなかなかロマンティックなことを言う子だった。

シギ君は急によそよそしくなり、頭を掻き、明後日の方を見ながら喋りはじめる。

「つまりだ。何が言いたいかと言うとだな。お前が昔仲良くしていた友達で今は疎遠になってしまった奴も、本当はお前と昔みたいに仲良くしたいと思っていたり、いなかっただりしてだな……」

それってひょっとしてせつちゃんのこと？

そういえばシギ君はせつちゃんのところと一緒に住んでいたのだった。

もしかして私のことで何か聞いているのか？

「あいつは真面目すぎるからな。いらんことまで考えて、悩んでし

まう。まあ、そこがあいつの良い所でもあるのだが。  
兎に角、あいつはちゃんと答えを出すはずだからもう少しまってや  
って欲しい」

シギ君の顔は若干、赤くなっていた。

自分には似合わないことをやっていると思っっているのかもしれない。  
自分達のことを心配してくれるシギ君の気持ちは嬉しかった。

「ありがとうな、シギ君」

「俺は自分がしたいようにやっているだけだ。礼を言われることじ  
ゃないさ」

「そついうことなら、うちもお礼が言いたくていっているだけだよ」

「ふっ、そつかい」

シギ君はため息交じりに笑うと、こちらを見ず、軽く手を振り、歩  
いて行った。

せつちゃんとの関係は正直、なかば諦めていた。

でもせつちゃんも私と同じ気持ちだった。

せつちゃんが何を悩んでいるのか私には分からない。

昔みたいに仲良くできるよつになったら、シギ君には何かお礼しないよ。

どうせ断られるだろうから、無理やり押し付けようかな。

私は何時までも待っているからね、せつちゃん。

## 十話（後書き）

ヒロイン（シギパーティー）に木乃香を追加！

ネギパーティーからの程度引き抜いて良いものかいまだに悩んでいます。

正直、シギ側の話を考えるだけで精一杯。

ネギ？どうせ本作品ではろくな扱いには……。

シギパーティーに加えて欲しいキャラがいればどんどん言ってください。

勿論、上がったキャラを必ず加えるわけではありませんが、参考にしたいです。

最近の仕事が忙しく、牛歩更新なので受付期間はいくらかでも。

とりあえず私の中の候補としては、さよ、和美、楓、千雨、高音

## 一話

Side：明日菜

木乃香は図書館探検部の皆と出かけていて、帰りは遅い。

ネギは高畑先生と数人の先生達と話があるらしい。

仕方無く、私は一人で超包子に行くことにした。

このお店は私のクラスメイトがオーナーを務め、働いている人もクラスメイトがいるので気軽に来れる。

なにより味が絶品である。

同い年の子がこれほどの料理を作れるとは信じられないほどだ。

ちなみに自分の腕は気にしないことにしている。

席に座り、メニューから食べたいものを選んでみると店員が水を持って来てくれた。

礼を言い、オーダーを頼もうとした時、店員の声が処にいないはずの奴の声に似ていた気がした。

水を飲みながら、顔を確認するとそこにはシギがいた。

思わず、私は口に含んでいた水を拭きだした。

シギはお盆でうまいこと防いでいた。

「危ないし、行儀が悪いぞ、明日菜」

お盆に付いた水を拭きながらシギが言う。

なんでシギがここの制服を着ているのよ!?

シギの説明によると、ここの料理を食べたところ、あまりの美味さに感銘を受けたらしい。

そこでなんとか自分に料理を教えて欲しいと頼んだところ、店の手伝いをするのが条件になったらしい。

知りたいことは何でもとことんやる、こいつらしいと言えはらしか。

……ところでかんめいつてなに？

S i d e : 真名

シギと刹那と共に超包子に食べにきたのだが、まさかシギがあんな行動に出るとは予想すらできなかった。

確かにここの料理はどれも美味いがな。

「何っているんだ、真名。お前達の料理と此処の料理を比べる訳な



いだろ。

ここのは学生がやっているとはいえ、金を取っているんだぞ。大勢の『客』と特定の『個人』に向けてでは込める愛情も違う。どちらが美味いかなんて比べられる訳ない。

お前達が作ってくれる料理も俺にとっては最高に美味しいし、嬉しいものだ」

私が言うとシギは真面目な顔で言ってきた。

相変わらず恥ずかしい台詞を平然と言ってくるな。

刹那が顔を赤くして照れているのはなかなか面白かったがね。

シギが手伝い始めて直ぐに神楽坂がやってきた。

シギがいることに驚いて騒いでいる。

相変わらず賑やかな奴だな。

まあ、そういうのも嫌いではないかな。

食後のコーヒーを飲んで、ゆっくりシギの働きぶりをみていると、携帯が鳴った。

学園長からだった。

どうやら学園に多くの侵入者がやって来たらしい。

鬼などを多数召喚し、苦戦しているとのことだ。

刹那共に応援に向かってほしいとのことだ。

私はシギに事情を説明し、仕事に向かう事にした。

一話（後書き）

章タイトルがネタばれで申し訳ないです。

『白い牙』っていうと某忍者漫画の奴を連想する人が多いんですけどね？

本作品の『白い牙』は某忍者の奴とは無関係です。

私の中で『白い牙』と言えば『あれ』しかない！という感じですよ。

## 一話

Side: エヴァ

じじいに呼び出され、今はじじいと暮を打っている。

日が暮れて間もない頃、結界により学園に十数人の侵入が来たことを察知した。

数分後、学園長室に置かれている電話が鳴った。

どうやら学園にそれなりに大掛かりな襲撃があったらしい。

私も出たほうが良いかと思ったのだが、今日はタカミチもいるので行く必要はないとじじいに言われた。

正直、面倒臭いので自分から行かせてくださいなんて言つつもりはない。

確かにタカミチがいれば問題ないだろう。

しかし相手も鬼などを召喚して数が多いらしい。

そこで手の空いている魔法先生、生徒をできるだけ動員し対処するようだ。

当然、真名と刹那の二人にも依頼がいった。

二人はシギと一緒にいたはずだ。

となると、今シギは一人と言う事か。

私達を引き離して、シギを襲うつもりか？

私はじじいの仕草を探ってみたがどこも不自然なところはなかった。

近衛近右衛門は長年生き、数多の修羅場を潜り抜けてきた達人。

しかしそれは人間での話だ。

六百年以上生き、数え切れないほどの修羅場を潜り抜けてきた、私からみればそこらのガキと大差ない。

この私がいっつに出し抜かれることなどあるはずがない。

……ありえないことはありえない、だったな。

念のため、茶々丸だけでもシギの元に向かわせるべきか？

S i d e : 明日菜

私は夜のバイトを終え、自分の部屋に戻る途中だった。

辺りは暗く、わずかな街灯と月の光が頼りだった。

それにしても今夜は人が少ないような気がする。

そんなことを思っていると前方に人がいた。

恐らく外人の女性のようだ。光を反射する綺麗なショートカットの銀髪が印象的だった。

女性は私に近づいてくると自分の顔を私の顔に近づけてきた。

動作自体はゆっくりとしたものだったが、予想だにしない出来事に驚く。

「あなた、シギ・スプリングフィールドって子を知っているかしら？」

女性は私に聞いてきた。

またしても予想だにしないことに驚く。

いきなりシギの名前が出てくるなんて。

シギの向こうの知り合いかしら？

しかし、こういつ時って素直に認めて良いものだろうか？

ドラマとかだと教えちゃまずいことが多くなかったような気が……。

「し、知りません」

「あら、そうなの。あなたから彼の匂いがしたからってっきり知り合いかと思ったわ」

に、においつて。

「まあ、あんまり強くないから、たまたまそばにいただけだったよ  
うね。」

悪かったわね、お嬢さん。

それと今夜は危ないから、早いとこ家に戻った方が良いわよ」

そう言っつて女性は去って行った。

……なんなのよ一体。

## 二話（後書き）

私の中の『白い牙』は相当マイナーです。

小説のタイトルで一応アニメ化されていたみたいです。  
最近知ってびっくりしました。



### 三話

Side：明日菜

私は先程から妙な胸騒ぎを感じていた。

理由は分からない。

ただ何か良くないことが起きる気がするのだ。

部屋で一人でじっとしているからそんなことを感じるかもしれない。

私は外を歩くことにした。

歩いていると先程会った女性の言葉を思い出した。

今夜は危険だと言っていたがどうということなのだろうか？

私はふと、ある方向に意識が向いた。

この先は何もなく、ただの平原があるだけのはずなのだが、どうしても気になり向かう事にした。

しばらく進むと、なにやら大きな音がした。

何かが爆発した音のようだ。

私は恐怖を感じつつも先を急いだ。

二つの人影を見つけた。

二人は争っているようだった。

しかし唯の喧嘩ではない。

二人とも普通では考えられないほどの速さで動き、炎や雷などだして戦っていた。

私は目の前の光景が信じられなかった。

ひょっとして魔法なのだろうか？ならばこれが魔法使い同士の実戦か。

やや、落ち着きを取り戻し、戦っているものに注目すると一人はシギだった。

シギは頭から血を流し、着ている服もあちこち破れ、怪我をしているようだった。

シギの表情にはいつもの余裕はなく、必死だった。

肩で息をし、みるからに辛そうだった。

なんで？なんであいつがあんな目にあっているのよ？

相手の男は見たこともない奴だった。

二人の実力の差は素人の私でも分かるほどだった。

シギは必死で、相手の攻撃をなんとか防ぐことで精一杯だった。

私がどうしたいのか困惑していると声を掛けられた。

「明日菜君、こんなところで何やっているんだい？」

高畑先生だった。

Side：高畑

今回は三つの偶然が生み出した好機だった。

- ・ 学園長がエヴァを碁に誘ったこと。
- ・ 関西の過激派が大掛かりな襲撃してきたこと。
- ・ 元老院からの刺客が来たこと。

この二つの偶然により、エヴァ、絡繰、龍宮、桜咲の四人をシギの傍から離すことができた。

学園長は襲撃のことも、シギへの刺客のことも知らない。

そのおかげでエヴァがどけだけ学園長を探ろうとしても無駄である。

最近大人しかった、関西の連中による大掛かりな襲撃。

手の空いているものは可能な限り動員することで、彼女を呼ぶことも不自然ではなかった。

元老院が送ってきた刺客も腕は悪くない。

しかしシギのことを子供だからと言って、舐めている様子だ。

すぐには殺さず、いたぶっている。

実力差は明らかだったがいささか不安でもある。

小規模の認識障害と人払いの結界は施している。

あまり大掛かりなものを展開すると気付かれる恐れがあるからだ。

最も、皆迎撃で忙しくて気が付く可能性は低いが。

しかし、招かざる客は来てしまった。

神楽坂明日菜だった。

## 四話

Side : - - - -

シギと男の実力の差は明らかだった。

男は元老院直属の飼犬だった。

表には決して公表できない汚れた仕事を専門に扱うもの。

男は今回の仕事に歓喜した。

人をいたぶり、命乞いをする弱者を殺すのは楽しめるが、いつもい  
つもくだらん相手ばかりだった。

しかし今回は違う。

あの大戦の英雄の息子を殺せるのだ。

本来ならナギの後継者と言われている兄を殺したかったが、弟で我  
慢する。

自分の前に一度、暗殺が失敗したらしいがそれはそいつが間抜けだ  
っただろう。

確かに年齢からすれば驚くべき力をもってはいるがまだまだ自分の  
相手ではない。

手加減しているこちらの攻撃を防ぐので精一杯だ。

男はすぐに自分の勝利を確信した。

男の頭の中にあるのはいかにして、英雄の子供をむごたらしく殺すかだけだった。

男のこの慢心がいつまでも上に上がれない欠点であった。

注意深く観察していればシギの変化に気が付いていただろう。

圧倒的な実力差をもつ相手に引きずられるように、格段と動きが良くなっていることに。

真の実力者に同じ手は二度と通用しないとは良くある話だ。

それはシギも例外ではなかった。

一度見れば大方の分析は済み、対処法を編み出す。

そしてよほど高度な技術を必要とするもの以外は覚えてしまう。

シギの戦闘センスは抜群だった。

一撃で殺されてしまう程の差では流石にどうしようもないが、目の前の男との力の差、相手をいたぶる性格は打ってつけた。

しかし実力差は明白である。

戦闘が続けば続くほど、シギは強くなっていたが、攻撃を防ぎきれずに傷ついていった。

度重なる攻撃により、シギの身体はボロボロだった。体力も魔力ももう限界に近い。

身体はふらつき、立っているのがやっとの状態に見えた。

男はシギの状態をみて、本格的に殺し方を考え始めた。

男は完全に目の前のシギから注意をそらしてしまった。

それがこの男の最大の過ちだった。

男の一瞬の隙をシギは見逃さなかった。

残りの魔力、体力、気力、全てを注ぎ込み初めて攻撃に転じた。

魔力により無理やり身体能力をあげ、男の懐に潜り込む。

身体が悲鳴を上げる。当然だ。身体はとっくに限界を超えているのだ。

常にイメージするのはかつての自分。誰が相手であろうと守るべきものを守っていた強き自分。

男の脇腹に拳を叩きこむ。

拳の威力自体は大したことはなかったが、男は突然のシギの動きに驚き距離を取ろうとする。

距離をとろうと飛び退く相手に、シギは間髪いれずに魔法の矢を撃

っ。

無詠昌と疲労により、撃てた矢は僅かに五本だけだった。

しかし混乱している男は対処が遅れた。

魔法の矢によって作りだしたわずかな時間に、シギは詠昌を完了させていた。

直径一メートル程の黒い火球が男に襲いかかる。

男は目の前に障壁を張って防ごうとしたが、火球は障壁に当たると燃え上がり男を包んだ。

魔力で肉体を強化していたので深刻なダメージは受けなかった。

しかし憤怒が男の全身にこみあげてくる。

自分がこんな小僧に傷を付けられるなど男には許せなかったのだ。

遊びは終わりだ。

小僧の最後のわるあがきは防いだ。

一瞬で殺してやろうと男はシギを睨みつけた。

しかしそこにはシギの姿はなかった。

男は目の前の現実困惑した。



次の瞬間、男はかつてない痛みを感じた。

背後から身体を中心に貫かれていた。

黒炎を纏ったシギの右腕が男の身体を貫いていた。

男がわるあがきと思っていた攻撃は、全てこの一撃の為の仕込みだったのだ。

男の身体は内側から燃やされ、灰となった。

体力も魔力、気力すら使い果たしたシギはその場に倒れた。

## 五話

Side：明日菜

相手の男を殺した直後、シギが倒れた。

私はシギの元に走った。

シギの身体は傷だらけで血まみれ、呼吸は弱々しく虫の息だった。

高畑先生が言うにはシギには殺人の容疑が掛っているらしい。

シギが戦っていた男は魔法使い側の警察のようなものらしく、詳しい事情を聴くため、本国に連れていくためにきた。

しかしシギが激しい抵抗をしたため戦闘になってしまったと。

話を聞くだけなのに激しい抵抗をするのは、やましいことをしたからだと高畑先生は言う。

だが、いくら何でもやりすぎだ。

先程の攻防ではシギは本当に殺されると思った。

高畑先生は相手の男を殺したことによってシギの罪は確定したと言った。

確かに結果としてシギは相手の男を殺してしまった。

しかしどう考えても立派な正当防衛ではないのか？

私は魔法使い側のことは全然知らない。

でもこんなの絶対可笑しいわよ。

私は必死にシギに声をかける。

私の必死の呼び掛けに、シギの顔がゆっくりと動いた。

「何やってるんだ、明日菜。……ここは…危険だぞ」

弱々しい声でシギが言う。

なんであんたはこんな時まで人の心配なんかしているのよ。

私は涙が溢れてきた。

なんでこいつが。自分が死にそうになっているのに、他人を気遣うような優しいこいつがこんな目に会っているのよ！

「どきたまえ、明日菜君」

高畑先生が近づいてくる。

「彼はすでにれっきとした人殺しだ。彼の力は強力であり、危険だ」

高畑先生の眼のは、声はとても冷たかった。

高畑先生に気がつき、シギが立ち上がろうとする。

何やっているのよ！動いちゃ駄目よ！本当に死んじゃうわよ！

「早く……この場から……離れる。……怪我するぞ」

「何言っているのよ！あんななんか死にかけているじゃない！」

「死ねえよ。……やっと、生きるのが楽しいと……思えるようになってたんだ。こんなところで……死んでたまるかよ。」

俺は……もう二度とあいつに……あんな涙は流させない」

そう言うシギの眼はとても力強かった。

「残念だがそれは不可能だ。君はここで死ぬ。」

左腕に『魔力』……右腕に『気』……」

高畑先生の両腕が光、目の前で会わせると凄まじい風圧が起きた。

まずい。高畑先生は本気でシギを殺すつもりだ。

私はとっさにシギの前に立っていた。

どこにそんな力が残っていたのか、シギは私の腕を掴み、凄いつからで横に投げ飛ばす。

高畑先生の腕が動く。

「だめ……！！！」

私が叫んだ瞬間、銀色の閃光が高畑先生の身体を吹き飛ばした。

私の思考は目の前で起きた出来事についていけなかった。

「ふー。危機一髪といったところかしら」

高畑先生が立っていた場所に女性が立っていた。

その女性は私が先程会った、銀髪の女性だった。

## 六話

Side：明日菜

砂埃が立つ中、高畑先生がゆっくりと立ち上がった。

高畑先生は銀髪の女性に視線を向けた。

「なぜ君がこんなところにいる？」

「つまらない質問ね。自分の主まの元に帰ってきただけのことよ」

主？それってシギのことを言っているの？

高畑先生は女性の答えに驚いていた。

「主だと？シギ君が君の主だと言うのか？」

「そうよ。シギ様が私の愛しい主様よ」

女性が断定したことに高畑先生は顔をしかめた。

「それにしても、私の主に随分と舐めたまねしてくれたわね。覚悟はできるんでしょうね？」

「彼をそんな風にしたのは僕じゃないよ」

「でしょうね。もう一人、別の男の匂いが残っているからそいつがやったんでしょうね。最も、肉が焼かれた匂いもするからシギ様に

殺されたようだけど」

警戒している高畑先生に対し、女性は笑みを浮かべ、余裕が感じられた。

「だけどさあ。あんたさつき確実にシギ様のこと殺そうとしていたわよね？あんな攻撃くらったら、瀕死のシギ様なんてひとたまりもないわ」

「彼を殺すのは上層部の決定だ」

「くくつ、上層部の決定？随分と面白いこと言うじゃない」

高畑先生の言葉に女性は心底面白そうに笑う。

「あんたがシギ様を狙うのはそんなことじゃないでしょ」

「何が言いたい？」

「あなたの理由は『立派な魔法使い』の使命なんかじゃない。ただの私怨ね。

だれか大切な人がシギ様に殺されたか不幸な目にでも会ったってところかしら」

「君に何が分かる」

「分かるわよ。だってシギ様を殺そうとしていたあなたの眼、あなたに父さんを殺されたあの時の私の眼と同じだもの」

……え。

あの人は今、なんて言った？

高畑先生にお父さんを殺された？

女性の顔からは笑みが消え、二人の雰囲気が変わった。

「それでどうする？今すぐ私に父の仇を討たせてくれるのかしら？  
言っておくけど、あんたが私にさして勝てるなんて思わないことね。  
二年前、あんた達が私と父を追いつめられたのは圧倒的な人数の差。  
数の暴力とは良く言ったものよね。戦いは数って何処かの偉い人も  
言っていたしね」

女性の眼は鋭く、まるで獲物に襲いかかろうとしている肉食獣のようだ。

私は寒気すら感じる空気に、息がつまりそうだった。

「今日のところは大人しくひいておくよ。あの『白い牙』相手に無策で正面から戦うのは厳しい。それに先程の一撃も軽くはないしね」

高畑先生は女性、私、シギと見渡し、その場を去って行った。



## 七話

Side：明日菜

高畑先生が去つたのを確認すると女性がシギの方に歩きはじめた。

女性はシギの元にたどりつくと、膝をつきシギの顔を覗き込むようにして話しかけた。

「緊急事態ゆえ、失礼します」

女性がそう言うとシギと女性を中心に地面が光りはじめた。

それはまるでアニメで見た魔法陣のようだ。

女性はシギの顔に自分の顔を近づけ、唇を合わせた。

その瞬間魔法陣の光がさらに強く輝いた。

「仮契約により私と繋がりました。これで私の治癒力がシギ様にも影響します」

女性の言っていることはいまいち分からないが、なんとなくシギの顔色が良くなってきた気がする。

「お久しぶりです、シギ様。ただ今戻りました」

「……なんでここにいる」

「あなたに命を救われました。大恩あるあなたに私は生涯仕えようと誓いました」

「あれは俺が勝手にやったことだ、気にする必要はないと言ったはずだ」

「ふふ、そうですね。この話は後でゆっくり話しましょう。深刻な怪我はありませんので、傷は直ぐに塞がるでしょう。しかし血を流しすぎました。今は安静にしておくことです」

女性が優しく囁きながらシギの顔を撫でると、シギはゆっくりと目を閉じ、眠った。

女性は優しくシギを抱きかかえ、こちらに声をかけてきた。

「そこのお嬢さん。あなたシギ様のお友達よね？シギ様が落着いて休めるところ知っているかしら？」

いきなりそんなことを言われてもぱっとは思いつかない。

一時間ほど前の私なら高畑先生に相談していただろうが、あの光景をみた後では先生のことを信じられなくなった。

おそらく学園長も危ないかもしれない。

途方に暮れた私だったが、この間の居残り勉強で桜咲さんと携帯の電話番号を交換していたことを思い出した。

詳しいことは知らないが、確か桜咲さんも魔法のことを知っていたはずだ。

私は桜咲さんに連絡した。

## 七話（後書き）

今回はいつにもまして短くてすみませんでした。

言い訳になってしまいますが、時間が取れなくて……。

## 八話

Side :

イギリスのとある山脈があった。

そこは自然があふれ、動植物が穏やかに暮らしていた。

その土地には地元の間人から守護者とされる大神の一族が住んでいた。フォーウルフ

彼らは古来より、その地に現れる魔の物達と戦ってきた。

人々は彼らに感謝し、崇めた。

しかし時が進み、しだいに人間達は彼らのことを忘れていった。

人々は自分達の都合で、木を切り倒し、山を削り自然を破壊していった。

彼らにとって人間もまた自分達が守るべき大いなる自然の一部だった。

人間を襲う事は出来ない。彼はなんども彼らに忠告した。

しかし人間達は聞く耳をもたなかった。

自然はあっという間に破壊されていった。

動物達は生きる場所を、食糧を奪われ、どんどん数を減らしていった。

さらに人間達は毛皮などを目的とした乱獲まで行った。

そして数が減れば今度は保護すると言い始める。

彼らの友である狼もまた例外ではなかった。

獲物である兎や鹿は数を減らし、見つけることも困難だった。

そこで彼らが選んだ苦肉の策が人間の家畜を襲う事だった。

彼らとて人間の恐ろしさは分かっていた。

しかし黙って飢えて死ぬわけにもいかない。

彼らも生きるために必死だった。

しかし人間は狼たちを許さなかった。

森にすむ保護動物を襲い、更には自分達のものにまで牙を向いてきた。

狼は害獣とされ、殺されていった。

そして狼もまた数が激変すれば、絶滅の危機だと叫び、急に保護しようとする。

人間の傲慢な基準で野生の動物達は管理された。

守護者たる大神たちの我慢が限界に来ていた。

辛うじて保たれていた不安定な状況も終わりを迎える。

狼達の数が減り、希少種になれば価値があがり、密猟の対象にされた。

あの日、とある狼の群れが密漁者達に虐殺されたのだ。

そしてその場には大神の一族の青年が傍にいた。

青年は目の前で友が無残に虐殺された光景に、抑えていたものが爆発した。

怒りにとらわれた青年は密漁者を殺し、近くの村を襲撃した。

建物を破壊し、数多の村人を殺し、彼は無数の銃弾により息絶えた。

この事件をきっかけに、大神達は動きだした。

山を、森を破壊しようとする機械を破壊し、作業をしていた人間達も殺していった。

そして騒ぎを聞き付けた魔法使い達も動きだした。

## 八話（後書き）

大神⇨狼男をイメージしてもらえれば良いかも？  
ただし神族。

小太郎の狗族とは似て非なるもの。  
あれは魔族よりだと思っているので。

細かい設定などは考えていません。  
人によってはオリキャラや技などの細かい設定を考えている人もいます。私はそういったことを考えるのに抵抗（？）があります。  
なんとなくで行きたいと思います。



## 九話

Side:

魔法使い達は大神達との和睦の交渉にやってきた。

自分達も無駄な血は流したくないと。

彼らの提案は、これ以上大神達の土地への開発をやめる。そして大神達は以前のように静かに暮らして欲しい。だった。

当然、大神達にはこのようなふざけた条件は飲めなかった。

自分達が守ってきた自然は半分以上壊され、今も破壊されつつあった。

すでに人間達にもここでの生活がある、などといった一方的な都合などだったことではない。

魔法使いと大神の交渉は決裂した。

いや、交渉などとは言えまい。

魔法使い達の一歩的な条件のみで、大神達の意見など聞く気が無かったのだから。

魔法使い側は大神を危険分子と判断し、討伐隊を送りこんでいた。

しかしこの討伐隊は大神の圧倒的な力の前に全滅した。

それ以来、長い戦いが始まった。

幾度となく討伐隊は送り込まれ、自称正義の味方なども襲ってきた。

その度に大神達は敵を葬り去っていたが、犠牲も出ていた。

圧倒的な力をもつ彼らだったが、数は少なかった。

人間達とその者達に召喚された鬼など、物量で押されることもあった。

おまけに人間達との争いに乗じて、魔物たちも彼らを襲い始めた。

まさに四面楚歌だった。

そのような血みどろの争いの中、常に最前線で戦っていた二人がいた。

大神達の族長にして最強の戦士の男。

大神の毛色は黒だが、一部の神格の高いものは銀色だった。

彼もまた銀色だった。

魔法使い達からは『銀狼王』として恐れられた。

そして彼の傍に常に一人の女性が付いていた。

その者は男の実の娘であり、父に次ぐ実力の持ち主だった。

彼女もまた銀色だった。

銀狼王の片腕として戦う彼女は『白い牙』と呼ばれた。

連敗を続け、魔法使い達は大神達の主軸である二人に懸賞金をかけた。

銀狼王 400万ドル

白い牙 200万ドル

高額な懸賞金がかかり、懸賞金目当てや、強者との戦いを望むものなど、襲ってくる数は増える一方だった。

そしてついに大神達の長い抵抗も終わりを迎えた。

かつてない大掛かりな討伐隊が生まれ、長年の戦いで披露していた大神達は、圧倒的な暴力の前に敗北した。

『銀狼王』が討たれたのだ。

「自分が死ぬことがあれば、それは自分達の敗北だ。土地を捨て、生き延びることだけを考えよ」

それが銀狼王の最後の命令だったという。

銀狼王を討った男の名はタカミチ・T・高畑

九話（後書き）

次回は白い牙とシギの出会いかな？

## 十話

Side: 白い牙(レイナ・トレイタ)

父の死という敗戦から十数日が経過した。

魔法使い達の追撃は緩むことなく、蛇のようなしつこさで行われた。

一緒に逃れた三人の同胞はすでにやられてしまった。

満足に眠ることも、食事をすることもできない。

僅かな睡眠と食事では体力の低下を防ぐことで精一杯で回復など見込めなかった。

私の中を埋め尽くすのは自分への不甲斐なさや憎しみだけだった。

父を、同胞を守れなかった自分の弱さ。

父の仇、同士の仇の眼鏡の男は自分を始末するため、あちらからやってくるというのに、ただ逃げる事しかできなかった。

最早、体力も気力も限界だった。

私は遂に倒れた。

こんなところで終わるのか。

父の仇も同胞の仇も取れず、こんなところで。

足音がした。

音からして体重は軽いようだ。子供かもしれない。

私はとつさに人型から狼に姿を変えた。

やってきたのは小さな男の子だった。

頭の前から足の先まで黒の変わった子供だった。

見た目もそうだが、それ以上に少年の態度に驚かされた。

普通、自分より体の大きい狼がいれば驚き、恐怖し、逃げるはずだ。

例えそれが弱々しく倒れていたとしても。

しかし少年は真直ぐこちらを見詰め、近づいてきた。

とつと逃げ去ることを期待していたので驚いた。

私はうなり、白い牙を見せ、威嚇し、近づけさせないようにしたが、少年は全く止まらなかった。

「大人しくしている」

少年が言った。

その声は落ち着いて、戸惑っていた私の心を落ち着かせた。

少年は私に治癒呪文をかけてくれた。

完全に直りはしなかったが、大分楽になった気がする。

すると突然、少年は私のことを肩に背負った。

私の方が体長が長いので、当然足を引きずる形ではあった。

またしても予想外の出来事に慌てた。

「大人しくしている」

少年のそのたった一言で私はまたしても落ち着いた。

何故だか分からないが、私はこの少年に身を任せても良いような気がした。

しばらくすると、小さな小屋があった。

どうやらここは少年が住んでいる家らしい。

ここで私と少年の奇妙な生活が始まった。



## 十話（後書き）

次回で回想終了です。

原作でタカミチ達は敵の残党を虱潰しに殺したようですが、無抵抗の奴も殺したんですね？

なかには勢力と縁を切ったものもいただろうし。

## 十一話

Side:レイナ

少年は私に特になにもしなかった。

食事を持ってくるとき、外へ出かける時などに頭を軽く撫でる程度だった。

頭をなでられ、すこし囁きかけてくる時間がいつしか楽しみになっていた。

傷も疲労も治りかけてきたある日、私はあの男の臭いを感じた。

父の、同胞の仇。

呼び鈴がなり、少年が対応した。

「やあ、シギ君、こんにちは」

「久しぶりだな、タカミチ。なんの用だ？」

「実は最近、こちら辺に凶暴で一際大きな狼がでたという噂を聞いたんだけどね、見ていないかい？」

「ふむ。……知らんな。ただの狼や野犬などはみたがそのような奴は知らん」

「……………そうか。邪魔をしたね。それでは失礼するよ」

仇の遠ざかるのを確認すると、少年は何事もなかったように椅子に座り、読書を再開した。

「どうしても本当のことを言わなかったの？」

私は初めて少年の前で言葉を喋った。

どうしても聞きたかった。

少年は本をとじ、真直ぐにこちらを見詰める。

少年は相変わらず落着いていた。

「嘘は言っていないさ。凶暴な狼など知らん。俺が知っているのは普通の奴より身体がでかく、銀色の毛をもつただの狼だ」

私は少年に自分のことやこれまでのいきさつを説明した。

私が賞金を掛けられたお尋ね者だと知った彼がどうするか興味が出たのだ。

しかし少年の態度は一切変わらなかった。

「他人が付けた評価など興味はない。俺がこの目で見て判断する」

その日は今までは話さなかった分を取り戻すかのように、少年と語りあった。

私はこの少年がたまたまなく好きになった。

復讐に囚われていた私の心を解き放ってくれた。

そして父の言葉を思い出した。

「どんなに無様だろうと、なんとしてでも生き残れ。俺の意志を受けずいてくれるものがある限り、真の敗北は訪れない」

そうだ。私は父や同胞たちのためにも生きなくてはならないのだ。

私達大神は基本的には土地を守護するため、外に出ることはない。

しかし外に出ていくものも少なくはなかった。

自らの眼で自分が仕えるにふさわしい主を選び付き従うために。

生涯をかけ仕える主を見つけだすことは私達にとって最高の喜びだった。

私はこの少年、シギ・スプリングフィールドこそが私の主だと思った。

しかし少年は私の申し出を受けてくれなかった。

私を助けたのは自分が勝手にやったことだ。気にする必要はない。

父や同胞達の死を弔い、墓でも造ってきてやれと。

彼の言う通りだ。

父達の死を弔ってあげることが出来るのは自分だけだ。

私はシギ様に必ず帰ってくると誓い、弔いの旅に出た。

## 十一話（後書き）

これにて回想は終わりです。

そろそろエヴァを出してあげないと……。

白い牙とは何年も前に出た小説です。

犬の血を四分の一もつ狼の話です。

子供だった私は夏休みの読書感想文であの本を読んだときは、感動し、涙を流しました。

今も捨てることができなくて、たまに読んでいます。

アニメもあります。

私は本での自分のイメージが壊れるのが嫌なので見ていませんが。

## 十二話

Side:エヴァ

じじいのところから帰る途中で茶々丸に持たせていた携帯に桜咲から連絡が来た。

シギが刺客に襲われ、重傷だという。

私は直ぐに私の家に向かうように言った。

私達が家に着くと桜咲達はすでに到着していた。

見知らぬ女がシギを抱きかかえていた。

女は『白い牙』だという。

確か数年の抗争で立派な魔法使い達に敗れ、大神一族は根絶やしにされたといっても過言ではない。その僅かな生き残りか。

聞きたいことは色々あったが、まずはシギが先決だ。

大神の自己治癒力は凄まじいと聞いたことがある。

仮契約により、こいつの治癒力がシギに流れ込んでいるおかげで、傷自体は問題ないようだ。

とりあえず私のベッドで眠らすことにした。

シギの寝顔は穏やかで、私の心も落ち着いてきた。

ところでさっきまで気がつかなかったが、なぜか神楽坂明日菜までいた。

なんでお前がここにいるんだ？

その辺も踏まえ、白い牙達の説明を聞いた。

これほど腹が立ったのはいつ以来だろうか。

シギを傷つけた本人はシギの手によってすでに殺されている。

瀕死のシギを殺そうとしたタカミチ、貴様を私は許せん。

今すぐにでもなぶり殺してやりたい。

憤怒が全身に込み上げてくる。

「落ち着け、エヴァ」

シギの言葉は怒りに我を忘れそうになった私を引きもどした。

「今こうして無様な姿をさらしているのは俺の責任だ。自分がどう  
いう存在か忘れていた。」

真名や刹那が正面から向き合ってくれて、エヴァとも再会できた。  
俺は何処か浮かれていたのかもしれない。

これは全て俺の甘さが原因だ」



「そんなことはない。お前のせいな訳ないじゃないか」

シギにはあまり卑屈なことを言っただけで欲しくなかった、言わせたくなかった。

シギはじつと天井を見詰めていた。

おそらく不甲斐ない自分を恥じているのだろう。

こいつは何時もそうだった。

何かあると全て自分のせいにする。

「……エヴァ」

「なんだ？」

「予定変更だ。傷が完治しだい修行に入る。まずは力を付けなければならぬ。二度とこんな醜態はさらさないように」

私は頷いて答えた。

修行には私の別荘を使う事にする。

あそこなら外から察知されることもない。

こちらの一時間が別荘になら一日にできし、私も万全の状態で見守ることができる。

……そういえばシギに渡したいものがあった。

私は自分が付けていたネックレスの先端についていた指輪をシギに渡した。

この指輪はかつてシギが私に贈ってくれた指輪を摸して作ったものだ。

この指輪は魔法発動体だ。接近戦を好むシギの愛用品だった。

シギが生前使っていたものはあの爆発で消滅してしまった。

シギが私にくれた初めてのプレゼント。

その指輪は今もなお私の指にはまっている。

いつか左手の薬指にはめる指輪をシギから貰いたいものだ。

## 十二話（後書き）

毎日毎日上司に怒られ、身体ともに入ろ入ろ。…仕事できない自分が悪いんですけどね。

久しぶりのエヴァ登場。乙女なエヴァもありですよ？

## 十三話

Side：明日菜

「明日菜、さっきは庇ってくれてありがとうな。嬉しかった」

「い、いいわよお礼なんて」

シギの表情は穏やかで引き込まれそうになるものがあつた。

今の顔といい、時々こいつが自分より年上のような気がする。

「さて、明日菜。お前はもう俺と関わるな。さらに言うなら魔法関係とも関わらない方が良く」

「な、何よいきなり！」

「明日菜、俺のあり様を見る。そしてお前がほんの一時間ほど前にみた光景を思い出せ。

ネギがお前にどう説明したのかは知らん。

あいつの言っていることを全て真に受けるな。

あいつは所詮、実戦を、殺し合いをしたことも、見たこともない甘ったれた唯の餓鬼だ」

先程までの表情とは打って変わり、有無を言わせない迫力があつた。

「どうせあいつのことだ。魔法は人々救う素晴らしいもの、とか言つたかもしれん。

しかし現実は物語のように甘くない。常に死がつきまといっている。

勿論、魔法関係者の全ての人間が命の危険に晒される訳ではない。しかし危険は確実に増すぞ」

シギの言っていることも分かる。

シギが戦っているところを、高畑先生と対峙したことを思い出すと今でも足が震える。

でも、だからって関わるなって。

「いいか、明日菜。今ならまだ引き戻せる。理由は知らんがお前はじじいやタカミチにとって何やら特別な存在らしい」

「私が特別？」

「そつだ。近衛近右衛門、あのじじいは典型的な守りの考えだ。自分の大事なものは手の届くところに置く。」

孫娘の木乃香を傍に置き、担任に最も信頼するタカミチを付けていた。

本来、タカミチは魔法関係で忙しくここを離れることも多かつたはずだ。いくらエスカレーター式の学校とはいえ、普通なら担任などさせん。

ネギの部屋も木乃香の所にしたしな。そんなじじいが何の関係もない奴を木乃香の相部屋にするとは思えん」

確かに言われてみればそのような気もしてきた。

高畑先生は多忙らしく、よく学校から出てもいた。

しかし私にいったい何があるのか、私には分からない。

……でもシギのことも放ってはおけない。

S i d e : エヴァ

シギの言葉に少しの沈黙の後、それでもなおシギと関わることをやめたくないと言ってきた。

シギは再三確認したが神楽坂の覚悟は確かだった。

魔法が危ないものは分かった。しかしそれなら自分に魔法のことを詳しく教えて欲しい。

本当に危なくなったら必ず逃げるし、誰のせいにもしない。

神楽坂はシギにそう言った。

折れたのはシギの方だった。

お前がしっかりと考え、自分の意志で決めたことなら止めることはできない、と。

神楽坂の教育係は私になった。

私は当然ガキの子守などやってられるかと断ったが、シギは自分のことで精一杯でとてもじゃないが無理だ。

龍宮や桜咲もまだまだ人に教えてやる程の経験はない。

神楽坂明日菜に必要なのは厳しい現実を容赦なく教えられる私しかない。

シギにそこまで言われてしまうと私には断る気もなくなってしまった。

しかも何故かこいつの一般学力の面倒までみるはめになってしまった。

修行の間、シギは一日中別荘に籠る。

しかし私と茶々丸は学校に普通に通って欲しいとシギに言われた。

龍宮達は一日に一時間だけ別荘に来ることになった。

## 十三話（後書き）

次からいよいよ修行編に！……とはいかない。  
次章は三年になったところから始める予定です。



## 一話

Side:長谷川千雨

「「さん年え組　ネ〜ギせんせ〜！」」

クラスの阿呆どもが大声で騒ぐ。

二年最後の期末試験で私達のクラス、二年A組は学年トップを取ることができた。

その功績により、この子供先生は正式に私達のクラスの担任になった。

しかし私は声を大にして言ってやりたい。

あいつ何もやってないじゃん！！

学年トップを取れたのは、私達の成績で子供先生の命運が決まるのかいう、訳の分からん理由によってクラス全体がやる気になっていたことも大きい。

だが一番の要因は他にある。

馬鹿レンジャー筆頭の、あの、神楽坂が何が起きたのか急に真面目に勉強し始め、期末試験で平均点80後半を叩きだした。

しかしかも桜咲や龍宮まで上位に食い込んできていた。

……まあ、こいつ等の変化も驚くべきことだが一番の変化はエヴァンジェリンだ。

さぼりの常習犯だったあいつが毎日ちゃんと授業を受けていた。

しかも期末試験はオール満点で学年トップを取りやがった。

この連中は最近仲が良いみたいで良く一緒にいるところをみる。

あいつ等に何が起きたんだ？

S i d e : 和美

二年の三学期に突如現れた謎の子供先生二人。

一人は今もなお、私達の担任を続けるネギ・スプリングフィールド。

そして問題なのがもう一人の方だ。

ネギ先生の双子の弟のシギ・スプリングフィールド。

初日からサボるは、何かと面白そうな子供だった。

しかし彼はたった数日である事情により、故郷に帰ったと高畑先生から説明があった。

突然あられ、瞬く間にいなくなった謎の少年！

私のジャーナリストとしての魂が疼かないわけが無かった。

しかしいくら調べても僅かな情報も出てこなかった。

これはまさか学園が必死に隠ぺいしようとしているのか？

だとするとあの子供にはとてつもなく重大なことが隠されているのか？

……まさかね。

謎といえば他にもある。

神楽坂明日菜、桜咲刹那、龍宮真名、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、絡繰茶々丸、この五人だ。

急に真面目に授業を受け始め、この前の期末試験であの結果だ。

三学期の途中からやたらと仲良くなり、放課後も一緒に過ごすことも多いようだ。

そして最近、あの五人が綺麗になってきたとも言われている。

恋は女を美しくする。

彼女達に男が出来たのではないかという噂も一部であった。

そんな面白そうなことに私が喰いつかないわけがない。

当然調べたわよ、全力で！

……しかし収穫はなしだった。

本人に聞いても当然答えてくれないし、後をつけても必ずまかれる。

お前達は何者だ！？

と、最近負けが続く私だが今回の情報は確実だ。

なんとこのクラスに今日、転校生がやってくる。

一話（後書き）

次回、なぞの転校生現る！？

## 一話

Side:

担任であるネギに促され、一人の少女が教室に入ってきた。

少女は今日からこのクラスに編入することになった転校生。

少女の名は『赤松<sup>あかまつあや</sup>絢』。

髪は肩にかかる長さの茶髪。

スタイルはとても良く、モデルでもやっつていそつだ。

Side: 赤松絢

何を隠そつ私は転生者だ。

前世では交通事故に巻き込まれ儂い一生を終えてしまった。

死んだ私の前にいきなり自称神様が現れた。

二次小説でありがちな展開ですよ。

転生先はネギま。

私に備わる能力は fate のセイバーだった。

チート能力来た！

これは私にチートオリ主になって暴れまくれということですね、わかります。

私が生まれたのは東京のとある夫婦の子供だった。

両親は立派な魔法使いとして世界で活躍していたらしい。

つまり私は優秀な両親から生まれたサラブレッドだ。

強くなる為の環境は揃っていた。

容姿も良いし、魔力、身体能力共に文句のつけようがなかった。

両親の地獄の特訓を受け、私は瞬く間に力を付けた。

修行場所はなぜか両親がもっていたアイテム内で行った。

原作のエヴァの別荘のような感じのもの。時間の経過は変化はなかったが。

ちなみに約束された勝利の剣と全て遠き理想郷はアーティファクトエクスカリバー アヴァロン であるらしい。（神情報）

仮契約の相手は勿論ネギ君に決めていた。

原作にばんばん介入してやる。

一刻も早く麻帆良に行きたかったのだが、両親の許しが出なかった。しかし私が中三を迎える春休みに、急に両親が仕事で海外に行くことになり、麻帆良に行くことが認められた。

急なことなのに大丈夫なのか心配だったが、両親は麻帆良の学園長と知り合いらく認められたいらしい。

だったらもつと早く行かせて欲しかったのだが、大学まではこつちの世界の進路を歩んで欲しかったらしい。

修行を付けていたのは念のためとのことだ。

両親にやられて憎んでいる相手や、私の秘めている魔力を狙ってくるやからがくるかもしれないと。

原作の木乃香もこついった教育で育ったらまた違っていたのだろうな。

そしてついにこの時がやってきた！原作介入開始だ！

<おまけ>

ところで私の名前どう思う？



赤松 絢

絢 訓：あや 音：ケン

あかまつ けん

赤松 健

もう少し考えようよ！？

### 三話

Side: 絢

晴れてネギ君のクラスに編入で来き、これから原作介入しまくろう  
と思っていたが、どうもおかしなことになっていた。

明日菜を筆頭に刹那、真名、エヴァンジェリン、茶々丸の五人が優  
等生になっていた。

おまけに妙に仲良くなっているし。

原作では仲良くなるのは修学旅行からでしょう。

クラス随一の情報家の和美に聞いても分からないし。

どうなっているのよ？

そして原作と決定的に違うのはネギ君に双子の弟がいたことだ。

私意外にイレギュラーが存在していたなんて、飛んだ計算外よ。

弟君は数日で故郷に帰ったらしいけど実際のところはどつなのだろ  
うか？

魔法関係のこととなると和美達ではわからない。

明日菜達に聞いても『シギ』関係の話題ははぐらかされてしまう。

いつそのこと高畑先生に聞いてみようかな。

しかしやりての先生に妙な目で監視されるのも、動きが取りづらくなるので避けたい。

吸血鬼騒動の時も明日菜の反応はほとんどない。

ネギ君は原作通りに襲われたまき絵から魔法の力を感じとったようだ。

ネギ君の反応は原作通りなんだよね。

もう少し様子を見ておくかな。

S i d e : 明日菜

転校生として赤松絢という少女がやってきた。

エヴァの話によると彼女から魔力を感じられ、魔法関係者のようだ。

彼女がどういう思惑でこのクラスに入ってきたのかは分からない。

ないか思惑があるのか、唯の偶然なのか。

取りあえず積極的な接触は避け、様子を見るらしい。

少し前からエヴァが色々動きだした。

学園長との約束であるネギの実戦経験の相手をするというやつのだめだ。

学園長達が約束を守るとは断言できないが、向こうが守らないからといってこちらまで反故しては相手と同じになってしまう。

とシギが言ったので実行しているところだ。

エヴァにかかっていた登校地獄の呪いはシギのおかげで無事解除することができた。

たが力を抑えている方は科学も用いられているため、エヴァ達だけでは無理らしい。

他に協力者がいるらしいのだが、手間取っているらしい。

ネギ相手の本格的な実戦は学園側が用意した大掛かりな停電の中で行われる。

学園全体が停電している時、エヴァの力を抑えている結界も解かれ、力を出せるそうだ。

学園を守っている結界も同時に解かれてしまうので、刹那さんと真名の二人は学園の防衛の手伝いをするらしい。

高畑先生を初めとする魔法関係者も当然そちらに向かうらしいのだが、なにかやってくるかもしれない。

そのため私達も一応そばで待機する手筈になっている。

エヴァの計画通りにネギが魔法のことに気づいたようで、今夜にも最初の接触が起きるだろう。

何じつとも起きなければいいのだけど。

## 四話

Side :

陽が沈み、闇が世界を包む時間がやってきた。

夜空には見事な満月が君臨していた。

夜道を一人で歩いている宮崎のどかは怯えていた。

彼女が歩いている桜通りにはある噂があった。

満月の夜に吸血鬼が現れ、襲われるという噂だ。

暗闇は恐怖を誘い、見事な満月が拍車をかける。

恐怖が止まることなく溢れるその時、突然風が舞った。

次の瞬間、彼女は自分を見下ろす、黒い人影を見つけた。

人影は自分に襲いかかってきた。

恐怖が頂点に達した時、彼女はとある声を聞いた。

自分が思いを寄せている優しき少年の。

少年は黒い影から自分を守る為に、駆けつけてきてくれた。

少年の登場に安堵した少女は意識を失った。

Side:エヴァ

まいてきた餌に要約ガキが予想通りかかった。

だが今夜は軽い挨拶代わりだ。

満月の夜とはいえ、今の私の魔力はほとんど無いに等しいからな。

この状態では実戦経験の相手はできない。

しかし本当に面倒な条件だ。

『実戦』とはいえ、じじい達の言っている実戦など、ろくに血も流れないあまつたれた戦いだ。

ガキは父親の話を出すと、面白い位にうるたえた。

ガキだからしょうがないと言えば聞こえはいいが、本当の実戦では年齢も性別も関係ない。

これほど分かりやすい弱点など、攻めてくださいと言っているようなものだ。

あいつらもそこから鍛えていかなければ意味ないだろうに。

ふむ。

やはり奴の息子だけあつて秘めている魔力は相当なものだ。センスも悪くない。

良き師に巡りあえば並はずれた実力者になるかもしれないな。

私は絶対にお断りだな。

ガキに追い詰められる振りをし、茶々丸にガキを攻撃させる。

これでガキに『魔法使いの従者』の必要性は理解できただろう。

さて、今日はこの辺で終わりにするか。

私が小僧に一言言って立ち去ろうとした時、何者かが私の顔を足蹴にした。

その人物は赤松絢だった。



## 五話

Side: 刹那

私と真名は今、エヴァンジェリンさん達とは少し距離を取ったところにいる。

エヴァンジェリンさんが吸血鬼として初めてネギ先生に接触するにあたり、学園側が何かしてくるかもしれないからだ。

今のところ学園側が干渉してくる気配はない。

その代わり転校生の赤松絢が乱入してきた。

しかしはたから見ればネギ先生の危機のように見えただろうが、行き成り顔をけり飛ばすとは。

走ってきた勢いも載せてあるのでかなり痛そうだ。

「くくっ、これは傑作だな」

私の隣では真名がお腹を押さえて笑っている。

「気持ちは分からなくもないが笑いすぎだぞ」

「くくっ、だが蹴り飛ばされたときエヴァがなんて言ったかお前も聞いただろう？」

『はぶうっ』だぞ。しかもそのあとは『あぶぶぶー』だ。

やはりあの人にはお笑いのセンスがあるな」

「……本人が聞いたら怒るぞ」

「そうだろうな。だから今のうちに笑っておくさ」

真名はそう言うともた笑いだした。

しかし赤松絢、彼女は何者だ？

あの速さは並みではなかった。

身体能力では私の上をいくだろう。

体術などは今のところ分からないが、警戒しておいた方が良くかもしれない。

エヴァンジェリンさん達はその場から離れていった。

ネギ先生はよほど怖かったようで、赤松さんに抱き付き泣いていた。

やはり唯の子供か。

シギやエヴァンジェリンさんが甘ったれと言う事も分かる。

シギなら自分の無力さを一人で嘆いているだろう。

さて、私達もエヴァンジェリンさんの家に向かうとするか。

私はようやく笑いが収まった様子の真名に声を掛けた。

「しかしあれだな、刹那。赤松がエヴァの顔面を蹴り飛ばしたのは、シギには言わない方が良くかもしれないな」

「確かにな。もしシギが知ったら彼女の命は無いかもしれない」

「あいつは目に目を、だからな。おまけに借りも貸しも二倍返しだ。今のあいつに本気で蹴り飛ばされたら人間の首など軽く折れるぞ」

「彼女の最大の肉体強化がどれ程か知らないが命の保証はできない」

## 六話

Side: 絢

やはりおかしい。

大まかな流れは原作通りに進行している。

しかし明日菜のネギ君に対する反応が薄い。

原作の印象だともっとネギを構っていた感じだ。

この前のエヴァンジェリンとのイベントも、心配いらなるとのどかの後を追わなかった。

しょうがないので思わず飛び出してしまったが、正直まずかったかもしれない。

しばらくは原作を楽しみたかったのだが。

明日菜がネギにあまり関わらないので、このままいくと私が原作の明日菜ポジションに付くことになりそうだ。

やってやれないこともないが、ネギパーティーに明日菜は無くてもならない重要キャラだ。

このままだとまずい気がする。

私が日々考えているとオコジヨのカモがやってきた。

ネギにカモねえ。やっぱり凄いい組み合わせよね。

ネギがカモを背負ってくるか。……鴨が葱だった。

カモに唆されて、ネギ君がのどかと仮契約を結ぼうとするイベントにきた。

原作だと明日菜が止めに来たけど、どうなるのかしら？

私としては後で仮契約を結ぶことになるので、ここで結んでも良いような気がするんだけどね。

しかし今回は明日菜がネギを止めに現れた。

どうやら今回は原作通りに行きそっだ。

と、思ったのもつかの間、明日菜の様子がおかしい。

Side :

「……ネギ。あんた今何しようとしていたのよ？」

明日菜の声は冷たくネギを戸惑わせた。

「今、あんた本屋ちゃんと仮契約結ぼうとしていたわよね？」

明日菜はネギに視線を向けた。

その眼は冷たかった。鋭い視線がネギに突き刺さる。

「あんたが本屋ちゃんのが好きで唯キスしたいっていうのなら私は何も言うつもりはないわ。

でもね、何も知らない本屋ちゃんと仮契約して、勝手に魔法関係に巻き込むことなんて許さないわよ」

「ぼ、僕は……」

「あんた本当に分かっているの？何も知らない唯の子を関わらせてらどうなるのか。」

その場の雰囲気の流れられましたじゃ済まないわよ」

明日菜は宮崎を抱え、その場を去って行った。

## 七話

Side: 絢

さてさて、どうしたもののか。

原作と比べるとネギ君と明日菜の関係がかなり悪くなっている。

このままだと原作のような展開になるのは厳しそうかな。

ネギ君との仮契約を楽しみにしていたんだけど、原作のようなパーティーが組めないんじゃないかなあ。

私が憧れたのは『原作』のネギパーティーの一員になることで、どうしてもネギ君と仮契約を結びたい訳じゃないんだよね。

それに漫画で読んでいた時は可愛い、守ってあげたい!と思っていたところも、現実に見ると情けないというか、頼りないだけだった。

どじっこが萌えられるのは二次元だけってのと同じだよな。

まあ、もう少しだけ様子を見ようかな。

私がそんなことを考えていると、ネギ君とカモがやってきた。

話を聞くとどうやら一緒に茶々丸を倒して欲しいとのことだった。

あー、あれか。

この間助けたのが私だからその流れで私を頼ってきたわけね。

明日菜には頼めないわよね。

しかしどうするかなあ。

このイベント自体は茶々丸の好感度UPだが、クラスメイトを不意打ちつてのには原作の時から抵抗があったのよね。

確かにやるからにはやり返されても文句は言えない。従ってエヴァ側から非難されることではないかもしれない。

しかしそれと感情は別だ。

「ネギ君、本当に分かっているの？相手は君の生徒の絡繰さんなのよ？」

「で、でもこのままじゃ」

ネギ君は私の言葉に戸惑いをみせた。どうやら迷っている様ね。

私のネギに対する印象はさらに悪くなった。

自分自身が明確な覚悟もないまま、他人を巻き込む気であるなんて。

更に私が言おうとすると、カモじや邪魔してきた。

「おっと、お嬢さん。これ以上兄貴を惑わすようなことは言わねえください」



惑わすって……。

「しっかりしてください、兄貴！相手は真祖の吸血鬼の従者だ。極悪人の仲間ですぜ。今ここで兄貴があいつ等を止めないと、また罪もない犠牲者がでることになりますぜ」

極悪人ねえ。

まあ、周りから見ればそうなるか。私の両親も『闇の福音』は恐怖の対象として教えられたし。

原作を知らなかったらそう思っていたでしょうね。

それからネギはカモの説得により、単身で茶々丸を討ちいった。

一応様子だけでも見ておくかな。

Side :

茶々丸の後を付けていたネギが見たのは、人助けをし、野良猫に餌をあげている姿だった。

その光景はネギの心を再び揺るがすが、カモの言葉で心を決めた。

一人では正面からでは勝てないと判断し、ネギは茶々丸の死角から魔法を放った。

魔法の矢が茶々丸に襲いかかった。

猫の喜ぶ姿に気を取られていたため、茶々丸は反応が遅れた。

魔法の矢の威力からして、自分の身体では耐えきれない。

しかし自分の背後には数匹の猫達がいた。

避ける選択肢はない。

残された選択肢は唯一つ。自身の身体を盾にして猫達を守るしかない。

『すみません、マスター。猫のえさをお願いします。』

シギ様。マスターのことをよろしくお願いします。』

茶々丸に魔法の矢が迫る時、一つの影が間に立ち入り、魔法の矢を防いだ。

その人物は……………。

## 七話（後書き）

間が開いて申し訳ありませんでした。

仕事中に左手を切り、全治二週間＋様子見一週間……。  
親指と人差し指の間の動く所だったので、あまり左手は使わないよ  
うにして生活していました。

## 八話

Side :

茶々丸にネギが放った魔法の矢が当たる瞬間、黒い影が突如間に入り魔法をかき消した。

そのものは黒いコートを着た、少し背丈が成長したシギだった。

シギはネギに目もくれずに茶々丸に身体を向けた。

「茶々丸、怪我はないか？」

「はい、問題ありません」

「そうか」

シギは茶々丸の返事に優しく微笑んだ。

「まったく、エヴァにも何かあるかもしれないから注意しろって言われただろうが。もっと警戒しろ。お前、諦めるのも速すぎだ。もつとあがけ」

やや険しい顔でシギは言う。

「申し訳ありません」

自分のことを本当に心配してくれるシギに、茶々丸は本当に申し訳ないと思った。

シギと茶々丸の会話にすっかり蚊帳の外だったネギが話しかけてきた。

「誰ですかあなたは！？どうして僕達の邪魔をするんですか？」

ネギの声に反応し、ようやくネギの方に振り返った。

「随分寂しいことを言うじゃないか、ネギ。多少背恰好が変わったくらいで分からないとはな。まあ、無理もないか。俺達は兄弟とはいえ、互いに相手にあまり興味が無かったからな」

シギの言葉にネギが更に困惑する。

「兄弟って……ひょっとして、シギなの？」

「ああ、そうだ」

「どうして此処にいるの？シギはイギリスに帰ったってタカミチが……。それにその格好」

「相変わらずお前はタカミチの言うことならなんでも信じるんだな。お前の人を疑わないのは美德と感じる奴もいるだろう。」

「だがな、俺から言わせれば世間の敵しさを知らん唯の甘ったれたクソ餓鬼だ」

ネギの質問にだるそうにシギは答えた。

「そんなことより、ネギ。お前は自分が何をしようとしたのか本当に分かっているのか？お前は自分の生徒を殺そうとしたんだぞ」

「だ、だってカモ君が茶々丸さんは悪い魔法使いの従者で、ロボツトだから」

「ふざけるなよ。善か悪か、人間か機械か、そんなことは関係ない。茶々丸は意思を持って生きている。同じ部品、工程でまったく同じものを作ったとしてもそれは『この』茶々丸ではない。『この』茶々丸は一人しかいないんだ」

シギは睨みつけるようにネギに言う。

ネギはシギの威圧にすっかり委縮してしまっている。

無理もないだろう。これまでのネギの周りの周囲の人間の多くは友好的なもので、威圧など受けたことも無いに等しかった。

「ネギ。俺は自分のものが他人にどうこうされるのが絶対に許せん。俺の家族を殺そうとしたんだ、覚悟はできているんだろうな？」

殺意を込めたシギの視線に、ネギは恐怖した。

シギがネギの元に歩こうとした時、一人の男が現れた。

男はこの学園の魔法先生だった。

彼も例によりネギに大きな期待を抱いていた一人だった。

「俺の前に立ちはだかるってことは、俺と殺しあう覚悟はできているんだろうな？」

「そつだ！ネギ君はやらせはしない！」

そう叫ぶと、男は魔法を詠唱し、シギに放つ。

男の元にゆっくり歩んでいたシギは何もせず、魔法の直撃を受けた。

しかし男の魔法程度はシギの障壁に傷一つ付けることはできなかった。

自身の最強の魔法をなんなく防がれ、男は驚愕した。

ゆっくりと、確実に迫ってくるシギに男は錯乱したように魔法を撃ち続けた。

男の必死の攻撃もシギには何の影響も与えなかった。

猛烈な勢いで魔法を放ち続け、男の魔力は直ぐに底をついた。

男は恐怖で身体が震えていた。

気がつくともシギが目の前に来ていた。

男は悲鳴をあげながら必死に逃げようとした。

しかし男の身体をシギの右手が貫き、黒い炎に包まれ灰になった。

## 九話

Side: 絢

私は今、気絶しているネギを抱え全力で走っている。

何よ、何なのよあれは!?

やばい、やばすぎる。

私の『直感』が警告した。逃げろ、あの場から直ぐに逃げろと。

乱入してきた自分との実力差も分からない馬鹿は気にしていられない。

あの男ではあの黒いのに傷一つ付けられないだろう。

馬鹿が恐怖で魔法を乱発している隙にネギを連れ去り逃げ出した。

馬鹿な魔法使いに意識がいつている隙を狙ったのだ。

しかし私の考えは甘かった。

最後に黒いのを振りかえると、真直ぐにこちらを見詰め目線があった。

全てを見透かし、あえて私達を見逃したのだ。

全身黒ずくめ、ネギとの会話から彼が噂のシギ・スプリングフィー



ルドなのだろう。

彼が言っていた魔法とは恐らくエヴァの別荘のことだろう。

ぱっとみ、身長は私と同じくらいだったので年齢も似たようなものだろう。

私に向けられた殺気ではないというのに、私の身体はまだ震えている。

情けない。

私は自分自身が情けなかった。

正直に言うのが怖い。しかしそれ以上に彼に興味がわいた。

何故か私は無性に彼のことを知りたくなった。

Side：茶々丸

赤松さんがネギ先生のことを連れ去ったことは当然シギ様も気が付いていた。

しかしシギ様はそちらを無視し、目の前の男を殺すだけだった。

「茶々丸、ネギを連れていった奴は？」

「私達のクラスに転校してきた赤松絢です」

「ふーん、あれが」

シギ様の反応は面白いおもちゃを見つけた子供のようなものだった。

「追いますか？」

「良いよ別に。どっちにしろエヴァとじじいの件もあるし、ネギをどうこうする気なんて無かったからな」

どうやら少しネギ先生にお灸をすえるつもりだったようだ。

そういえば別荘で修行中のシギ様がなぜここにいたかと聞くと、明日菜さんがネギ先生が馬鹿な真似をやらかすかもしれないと心配していたようだ。

明日菜さんから相談され、気分転換を兼ねて様子を見に来てくれたらしい。

明日菜さんには何かお礼をしなくてははいけませんね。

「シギ様。私はこれから買い物をして帰りますので、お先にお戻りください」

「明日菜への礼か？相変わらず律儀だな。久しぶりに外に出てきたんだ、俺も付き合っよ」

特に断る理由もないので二人で行くことにした。

シギ様が傍にいと落着く。しかし二人でいると逆に落着かない。

これは一体どういふ事なのだろうか？

## 十話

Side：明日菜

シギと茶々丸さんが帰ってきた。

茶々丸さんは私への礼と皆へのお見上げとして、ケーキを買ってきてくれたので皆で食べている。

どうやら本当にネギの奴は馬鹿なことを仕出かしたようだ。

茶々丸さんを殺そうとするなんて。

入れ知恵をしたのは最近現れたあのオコジョだろう。

あんなエロの塊の小動物が助言者って時点で問題だろう。

茶々丸さんが襲われたことに怒り心頭に発したエヴァだったが、シギがなだめてくれたおかげで落ち着いたようだ。

大事な家族を襲われたのだ、怒るのは当然だろう。

今回の件はシギがネギに恐怖を与えたことで終わりのようだ。

しかし気絶するような恐怖を与えて大丈夫だったのだろうか？

学園長との約束でネギとエヴァは戦わなくてはならない。

ネギはエヴァに向かって来られるだろうか？

私の疑問にシギは笑って答えてくれた。

「その心配は無用だ、明日菜」

「なんでよ？ネギがびびって戦えなくなったりするかもしれないじゃない」

「あの程度で戦えなくなるようではこの先思いやられる。仮に心に傷がついたとしても、立派な魔法使い様達には『あれ』がある」

「あれ？」

「そつだ。自分達に都合の悪い記憶は消してしまえ、と」

ああ、なるほど。

私も最初、ネギの魔法のことを知ったとき、あいつ私の記憶を消そうとしていたわね。

九歳の子供が瞬時に行動したことから、魔法使い達の間では常套手段なのだろう。

そういえばシギは赤松さんに会ったらしいけど、どうだったのだろうか？

「ねえ、シギ。あんた赤松さんに会ったのよね？」

「会ったといっても、ちらっと見たただけだな」

「どうだった？」

「気配は美味しく消していたし、判断力も悪くなさそうだ。身体能力もかなり高そうだし、なかなか強そうだ。俺としてはネギなんかより興味がある」

シギは口元に笑みを浮かべながら言う。

可哀想に赤松さん。完全にシギに標的にされたわね。

シギは生前から強いものと戦う事を好んだらしい。

しかしそれは戦闘<sup>バトル</sup>マニアとは違うらしい。

シギは自分の知らないこと、経験したことが無い事を体感するのが好きらしい。

だから本も幅広く読むし、知らないことは直ぐに調べる。

そして一番強い刺激を得られるのが戦闘らしい。

命がけの戦い。全てのものが己のありとあらゆるものを搾りだし戦う。見たこともない技、戦術を見せてくれる。

それがシギの一番の楽しみらしい。

<おまけ>

「エヴァ」

「なんだ、シギ？」

「女の子がスカートで片膝をつくのは肝心しないな。下着が丸見えだぞ」

「っ！……ところでお前は何を見ているんだ？」

「スカートの中の絶景を」

「死ね——！！」

## 十一話

Side :

そして遂にエヴァとネギの決戦の夜がやってきた。

ネギを呼び出す為の使者として、明日菜、刹那、真名の三人が操られる振りをしてネギの前に現れた。

ネギは他の人間に応援を頼まず、装備をかため単身エヴァのもとに向かった。

ネギが持ちだした魔法道具は今まで周りの魔法使い達から贈られたものだ。

いくら天才的な才能があってもまだ子供。力も満足に発揮できないと心配し、贈られたものだ。

魔法道具は決して安くはない。

勿論、ものによってピンからキリまであるが、ネギに贈られたものはどれも優秀なものだった。当然値ははる。

中には一般の魔法使いには容易に手が出せないようなものもある。

しかしネギはそんなことは知らず、ただの便利なものとしか思っていなかった。

ちなみにシギに贈られるものなど無かった。



ネギはそのことを知らないし、シギも他人からあたえられるものに興味はなかった。

ネギが揃えた装備はほとんどが使われることなくエヴァによって吹き飛ばされた。

僅かな魔法道具を使い、なんとかエヴァの攻撃をしのぎ、ネギは逃げ続けた。

ネギが逃げた先は学園都市の端にある橋だった。

「ふ……なるほどな、この橋は学園都市の端だ。私は呪いによって外に出られん。ピンチになれば学園外へ逃げればいい、か……。意外にせこい作戦じゃないか。え？ネギ先生」

エヴァは冷笑しながら言う。

勿論ネギの狙いがそんなことではないとエヴァには分かっていた。

エヴァから逃げることは生徒を見捨てことになる。

英雄主義の子供にそのようなことを考慮していると考えづらい。

なら何が目的でここにおびき寄せたのか？

答えは明白だ。畏だ。

迎撃か捕縛用かどちらかの仕掛けが施してあるはずだ。

エヴァはわざと何も気がつかない振りをして、ネギの作戦をみるつもりなのだ。

ゆっくりと歩いて近づくエヴァをネギは倒れたまま見ていた。

戦闘中につつ伏せになりながら動かない、本来なら死を意味する。

自分を餌に誘っていることなど、あからさま過ぎる。

自分を馬鹿にしているのかと、エヴァは怒りを感じたが堪えた。

どんなに苦しくても、立ち上がって相手にそなえる。それが昔シギから最初に教わったことだった。

こいつはそんな基本も知らないのか。

ネギの周りの魔法使い達の甘さに冷め、怒りも消えていった。

ネギとの距離が五メートルに所で地面が光った。

捕縛用の術が発動しエヴァと茶々丸を拘束した。

捕縛用だったか、とエヴァは思った。

「や、やたーっ！エへへ、ひっかかりましたね。エヴァンジェリンさん」

自分の作戦がうまくいったとネギは有頂天になっていた。エヴァの冷めた視線に気がつかずに。

馬鹿騒ぎしているネギをよそに、エヴァはあたりを見回した。

捕縛の術はそれなりに高度なものだった。術式を書きあげるのに相  
当な時間を費やしたのだろう。

しかしこれで終わりか？

私をこの程度の術で捕え、それで勝てると思っているのか？

動きを止めた瞬間、連続した怒涛の攻撃が用意されているものかと  
思っていたが拍子抜けだったな。

「もう動けませんよ、エヴァンジェリンさん。これで僕の勝ちです！  
さあ、大人しく観念して、悪いことも、もうやめてくださいね！」

万面の笑みでネギは言う。

「…………ふ、あはははは！」

あまりのネギの馬鹿さ加減にエヴァは笑いが込み上げてきた。

「何が可笑しいですか！？御存知のようにこの結界にはまれば簡単  
には抜け出れないんですよっ」

笑うエヴァにネギは戸惑っていた。

自分の敗北が確定したというのに笑えるのかと。

「そうだな、この術なら普通は簡単には抜け出せないな。だがな小  
僧、お前が今対峙しているのが誰なのか本当に分かっているのか？

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。  
闇の福音だぞ。

その私をこの程度の術で抑えきれると？

舐めるな————！！！！！！」

エヴァの魔力が噴き出し、拘束していた術を吹き飛ばした。

## 十一話（後書き）

孤児のネギが多くの魔法道具を所持しているのはなぜか！？エヴァにも安くはないと言わせるほどのものをどこから手に入れた！？  
本作品では贈りりものになりました。  
シギには当然ありません。

原作で捕縛結界にかかったエヴァが驚きすぎのような気が…。そのぐらい予想できる気が…。

## 十二話

Side:

自身の完璧な勝利を確信していたネギは状況を理解できなかった。

茫然と立ち尽くすネギにエヴァは完全に失望していた。

自分をこけにしたあの男の息子がこの程度とは。

いっそのまま殺してしまおうかと、エヴァは考えた。

こいつが死ねばシギの心を曇らせる存在が一つ消える。

立派な魔法使い達がどのような行動に出るのかも気になる。

ネギの仇として自分を殺そうと必死になるのか？

ネギが死んだとたん、シギに対する扱いが豹変するのか？

周りの態度が変わったとしても、シギがその影響を受けることはありえない。

あいつは祭り上げられることなんか絶対に受け付けられないだろう。

シギは他人から干渉されることを嫌う。

「いけない！マスター、戻ってください！」

何かに気がつき、茶々丸が叫ぶ。

茶々丸が叫んだ瞬間、橋を照らす照明がついた。

予定よりも十分以上も早く、停電が復旧したのだ。

電気が通ったことにより、エヴァを縛っていた結界も再び動き出し  
ていた。

想定外のことなど実戦では当たり前だ。

エヴァは直ぐには橋の上に移動しようとしたが、遅かった。

全身にとてつもない苦痛がはしり、魔力を完全に封じ込められた。

魔力が無くなればエヴァは唯の子供だった。

湖に落ちることを止める手立ては無かった。

茶々丸が必死にエヴァの元に向かうが距離があり過ぎた。

湖に落下するエヴァを黒い影が受け止めた。

シギだった。

「くだらない。これが実戦訓練？時間の無駄だったな」

シギの声は感情を感じ取れなかった。

シギは橋の上に降りると、自分の黒いコートをエヴァにかけてやり、

茶々丸に任せた。

エヴァ達から少し距離をとり、シギは上空に向けて黒い火球を放った。

上空で爆発が起きた。

火球が上空に会った何かを破壊したようだ。

次にシギは相変わらず茫然としているネギの元に向かった。

ネギがシギに声を掛ける前に、シギの拳がネギの腹に打たれた。

ネギは気絶し、人形のように崩れ落ちた。

「邪魔だからとつとと、連れて帰れ」

そう言うとシギは、気絶したネギを湖に向けて投げた。

落下するネギを受け止めたものがいた。

高畑だった。

「爺に言っておけ。エヴァはお前との約束を果たした、そっちも守れよ。ってな」

高畑は無言のままその場を去って行った。

高畑が去るのを確認するシギは広範囲の認識障害の結界を張った。



これによって魔法や魔法道具によるのぞき見は不可能になった。

シギはとある柱を見ながら喋りはじめた。

「さて、今度は俺のお楽しみ時間だ。俺を存分に楽しませてくれよ。」

赤松絢

## 十三話

Side: 絢

エヴァ対ネギが気になり気配を消してこっそり観戦していたのだが、やはり原作とは随分展開が違ってきたようだ。

エヴァは自力で捕縛結界を破り、ネギは放心状態。

停電復旧により落下するエヴァを助けたのはシギだった。

ネギを強制退場させ、上空で爆発したのはおそらく超鈴音の偵察機（？）かな。

今夜のイベントも終わったし、部屋に帰って寝ようと思っていたらシギがとんでもないことを言いだした。

「さて、今度は俺のお楽しみの時間だ。俺を存分に楽しませてくれよ。赤松絢」

.....

おーけー。冷静になって考えようじゃないか。

あの黒い奴は今何て言った？

お楽しみの時間？楽しませろ？それで誰を指名していた？赤松絢？

その人も可哀想に。あいつ絶対強いわよ。私だったら戦いたくない

相手ね。

.....

ええええええええええ！？

なんで私なの！？

この間は完全にほっておいてくれたのになぜ急に！？

私が隠れている橋の柱を思いっきり見ているから完全に私の位置はばれているわね。

全力で逃げても逃げ切れずとは思えない。仮に逃げられたとしても同じことの繰り返しになるだろうしな。

私は諦めて大人しく出ていった。

「こんばんは赤松絢。さっそく始めようじゃないか」

「いやいや、ちょっと待ってよ。何で私なの？私より強い奴なんていくらでもいるでしょう」

「強い、弱いなんてことは問題じゃない。俺を楽しませてくれるか、驚かせてくれるかが重要なんだ。お前は俺を楽しませてくれる何かを持っている。俺の勘がそう言っているんだ」

喜んで良いのか判断に困る理由ね。

実のところ私も実戦を経験したい気持ちはある。

私は今まで両親との訓練以外では戦ったことが無かった。

だから自分の実力がどれ程のものなのかいまいち実感できないでいた。

しかしいきなりあれとやりあうのもなあ。

あいつ相当強そうだし、容赦なさそうだしな！。

腕試しで死ぬのなんて嫌よ。

「……………一応聞くけど、拒否権はあるの？」

「勿論あるさ」

……………あれ？あるんだ。

「同意なくしてやるなんて俺の主義に反するからな」

どうやらちゃんと自分が貫き通す主義は持っているらしい。

私が適当な理由を考えて断ろうとするとシギは非常にがっかりしていた。

わ、分かりやす過ぎる。

最初の印象だと、完全なポーカーフェイスというか冷めた奴だと思っ  
ていたけど、思ったのとは違い感情表現が分かりやすいみたいだ。  
そんなに落ち込まれると私が悪いことをしたような気がしてくる。

「やれやれ、相当落ち込んでいるな」

「無理もない。相当楽しみにしていたようだしな」

「でもまあ、断られたんじやしょうが無いわよね」

真名、刹那、明日菜の三人がいつの間にか私の傍に来ていた。

何時の間に来ていたのよ。

特に気配を消していた訳じゃなさそうだし、それだけ私も平常心じ  
や無かったってことか。

しかし私の傍でそういうこと言わないで欲しい。

なんだかいつそう私が悪いことをした気分になっていくじゃない。

目に見えて落ち込んでいるシギに私は思わず声を掛けてしまった。

「えっと、殺し合いとかじゃないのよね？」

「ああ、勿論だ。別にお前と殺し合う理由もないしな。お前と戦っ  
てみたいだけだ」

「だったら少しぐらいなら良いわよ」

「本当か！」

シギは一瞬にして笑顔になった。本当に分かりやすいわね。

私は軽く準備運動し、シギと対峙した。

エヴァの始め！という合図と同時にシギの姿がかすんだ。

一瞬で私の目の前に迫り、拳を叩きこんできた。

私はなんとかそれを受け止めた。

「殺すつもりはないが舐めていると死ぬぞ。集中しろ、本気でこい」

鋭い眼が私を見詰めていた。

知らないうちに腕試しということと私の心は緩んでいたようだ。

シギは私の緩みを見抜き、警告してきたのだろう。

私は集中した。実戦のつもりで目の前の相手を倒すことに。

## 十四話

Side: 絢

私は背負っていた袋から木刀を取り出し構えた。

この木刀は私が麻帆良に行くときに両親がくれたものだ。

素材の木が特殊で私の魔力を吸収し、威力をあげてくれるのだ。

強化魔法と合わせるとかなり強化される。

私の得意な風の魔法と合わせると本気になれば鉄をも切り裂く。

今回は対人戦なのでそこまではしないが。

「さて、まずは小手調べだ」

シギはそう言うつと魔法の矢を十本撃ってきた。

私は矢を全て木刀で叩き落とした。

更にシギは二十、三十と連発してきた。

私は動きまわらず、自身に当たるものだけを叩き落とした。

「眼は良いようだな。しっかりと自分に当たるものだけを叩き落としている。動きも良い。なら、これはどうだ？」

今度は矢の数が一気に増え、百以上の矢が襲ってきた。しかも今までののは拡散していたが、今度のは全て私目掛けて放たれていた。

いくら初級の魔法の矢とはいえ、無詠昌でこれほど精密に狙えるとは恐れ入る。

全ての矢を撃ち落とすことは不可能。

私は一気に、シギ目掛けて飛び出した。

私の身体は魔法耐性が強い。魔法の矢程度では殆どダメージもない。

矢の雨を突き抜け、悠長に断っているシギに木刀を振り下ろした。

シギは私の攻撃を炎の剣で受け止めた。

「ふむ、魔力抵抗は随分高いようだ。身体能力も魔力も高い。才能に恵まれたか。産んでくれた親に感謝するんだな」

才能の件は親っていうより、神なんですけどね。

セイバーの能力を貰ったらしいけど、実際のところ良く分からない。

原作は三ルートを一回ずつクリアしたただだし、アニメは飛ばし飛ばし。最大の問題が何年前の話だよ！！もう碌に覚えていないわよ！

『約束された勝利の剣』と『全て遠き理想郷』はないし、『風王結界』で武器を透明にすることも出来ない。

どうやって透明にするのか教えておきなさいよね！説明書！説明書



を寄りこしなさい！

心の中で愚痴をついているとシギが剣で攻撃してきた。

素早い攻撃を繰り返しながらシギの眼は私を見ている。

シギは剣での戦いもかなりできる。しかし私の方が少し上のようだ。

刃を交える度に徐々に押し去られていった。

接近戦を嫌い、シギは後方へ大きく飛び退いた。

「剣術はかなりの腕だな。接近戦は分が悪そうだ」

そう言いつつ、シギの顔からは余裕が感じられた。

「だがまだだ。まだお前は本気になり切れていない。俺を殺すつもりで来い。でなければ死ぬのはお前になるかもしれないな」

シギは左手を上げると巨大な火球を練りだした。

……え？あれを撃ってくるつもりですか？いくら私でもあんなの食らったら死んじゃうかもしれないよ？

「くくく、どうやって防ぐか見せてみる」

シギは腕を振り下ろし、火球を放つ。

どうやって防ぐかですって？あんなのまともな受けられる訳ないじゃない。避けるのしかないわよ。

追尾してくるかもしれないのでぎりぎりのところで避けるしかない。  
十分ひきつけ、横に飛び退く。

しかしシギにはそんなことはお見通しだったようだ。

私が避ける動作をとった瞬間、火球がいくつもの小さな火球に別れ、私を包み込むようにして襲ってきた。

無数の火球が私の身体を包み込む瞬間、私の中で何かが弾けた。

自身を中心とし、凄まじい風の渦が巻き起こり炎を消し去った。

「今のは良いぞ。俺も驚いた」

シギは笑みを浮かべながら言う。

「……今殺すつもりだった？」

「まさか。お前は見てくれに騙されすぎだ。あんなの見た目が派手なだけで、火力もかなり抑えてあったからお前なら火傷もしなかったさ。」

もっと注意して視ないとこの先危ないぞ」

なるほど。落ち着いて思い出してみれば、あれほどの炎の塊が近づいてきていたのに熱さをあまり感じなかった。

確かにもっと冷静にものを判断しなくてはこの先は命にかかわってくる。

しかし今のはなんだったのだろうか？

あれほどの風など出したことはなかった。

私は魔法が苦手だった。初級の魔法ならなんとか出来るが、ほとんど使わない。

接近戦がメインだ。

私が考え込んでいると、背筋が凍りついた。

シギが目の前に迫り、炎の刃を振りおろしていた。

私はなんとか防いだが、腹を蹴り飛ばされた。

「どうやらお前はむらが多すぎるな。戦いの最中に相手のことを忘れて考え込むなど、殺してくれと言っているようなもんだぞ」

確かにシギの言う通りだ。実戦だったら殺されていただろう。

今は目の前の相手に集中しろ。

シギは私が構え直すの確認すると、再び多量の魔法の矢を放ってきた。

私は先程と同じように矢の雨に突っ込み、距離を詰めようとした。

いや待て、まずい！

私は立ち止まり数本の矢を叩き落とした。

「やるな。どれほどの威力なら防げるか把握し、やばいのをしつかり見極めている」

無数の矢の中に高威力の矢を紛れこませるなんて恐ろしこととしてくれるじゃない。

無数の魔法の矢を無詠唱で撃つと同時に、高威力の矢を同士に撃つなんて器用な芸当ができるなんて、一体どれほどの実力を秘めているのよ。

……一度くらいこちらから仕掛けるか。

私は足に魔力を溜め、一気に飛び出した。

一瞬で距離を詰め、最大限に威力を上げた木刀を叩きこんだ。

完全に虚を突いたと思ったが、シギは冷静に炎の剣で受け止めようとしていた。

しかし先程までと違い、木刀の威力は最大だ。鉄をも切り裂く。

炎を固めた剣では防ぎきれない。

炎の剣を断ちきり、木刀がシギを襲う。

捕えたと思ったが、シギの姿は消えていた。

シギは十分な距離をとり、私を見ていた。

完璧な攻撃だったはずだった。避けられるわけが無いはずだった。しかし彼は無傷で立っていた。

彼の實力は私の予想のはるか上をいつていたのだ。

「中々の威力だ。こいつは鉄ぐらいの強度はあるのだがな。あっさり断ちきられるとはな」

シギは断面を見ながら感心していた。

褒められて嬉しいが、自分の必勝パターンをあっさりかわされ、それどころではなかった。

「お前は俺を十分楽しませてくれた。その礼におれもお前に少し面白いものをみせてやろう」

そう言うとシギは眼の間で手を合わせると少しずつ開いて行った。

徐々に手を開けていくと、手の間に炎が集まり、肩をなしていく。

そこには一本の剣で出来ていた。

先程までの剣とは違い、まるで黒い水晶で出来ているかのような美しさだ。

「これが本来の俺の剣だ。これを作るのには相当苦労したぞ」

シギは傍にあった鉄柱を切った。

軽く腕を振るうその動きは速く、辛うじて眼で追える程だった。

それだけで今までののが全然本気で無いことが分かった。

接近戦では自分が有利などと思っていた自分が恥ずかしい。

全然、相手の実力を測れていなかった。

シギは小さく切り取った鉄柱をこちらに寄りしてきた。

断面をみて私は息をのむ。

凄まじく綺麗な断面だった。

自分がやってもこうはできないだろう。

「さて、絢。お前ならどう防ぐ？」

シギはゆっくりと私に歩いて来る。

私は剣を構え必死に考える。

「そこまでだ！」

突如、大きな声が響き渡る。

## 十四話（後書き）

戦闘は書くのが本当に難しいです。

そして今回は珍しく長くなりました。二つに分けようかと思ったのですが、たまには長いのも良いかと。（本当はこのぐらいが普通なのか？）

セイバーの能力？あまり気にしない方向でお願いします！

## 十五話

Side: 絢

突然の大声で現状が理解できない私は茫然としていた。

シギは若干機嫌が悪そうにとある柱の上を見ていた。

シギの視線の先を追っていくと一人の人影が見えた。

うわー！。なんか柱のてっぺんで決めポーズみたいな恰好で立っている。

馬鹿となんとかか……ああ、違った。なんとかと煙は高い所が好きって奴かな。

赤を基調にした服で、髪を逆立てている若い男だ。高校生ぐらいか？

男は掛け声と共に飛び降りてきた。

なんか途中で無駄なひねりとか加えていた。

男は私とシギの間に飛び降りると、シギを指さし叫ぶ。

「話に聞いた通り極悪人のようだな、シギ・スプリングフィールド！こんな可憐な少女に武器を向けるなど！恥を知れ！」

……え〜と。いきなりすぎて訳が分からないんですけど。



なんでこいついきなりシギに喧嘩売ってるの？自殺願望でもあるの？爆弾に自分で火をつけているんだよ？

シギはため息を吐くと私達に背を向け、歩きはじめた。

いやいやいやいや！こんあ状況で帰らないでよ！私どついたらいいのよ！？

「待て！逃げる気か？男なら正々堂々と戦え！」

こいつはこいつでさっきから何言っているのよ！

「興がそれだ。今回はこれまでだ」

そう言い残し、シギは再び歩きはじめた。

もうなんでも良いから早く帰って！そして私もこの馬鹿に絡まれる前にとつと逃げるしかないわね。

そんなことを考えていると男はどこからか、弓を出し、矢を構える。

……は？な、なにをするき？

男は躊躇なく、後ろ姿のシギに矢を放った。

ええええええええ！！

何やっての？こいつ！

帰るって言っているんだから黙って返しなさいよ！何喧嘩売ってる

のよ！

シギに放たれた矢は銀髪の女性が素手で掴んでいた。

「どうしてもやりあいたいらしいな」

シギは遠目でもはっきり分かるくらい深いため息を吐いた。

「貴様のような奴を野放しにはできん。大人しく拘束される」

「断つたら？」

「ふん。馬鹿につける薬はないか。実力行使させてもらう」

馬鹿はあんただ。なんなのよこいつは。

話に聞いたって言うていたけど誰にどんなことを聞かされたのかしら？

まあ、この様子だと正義の魔法使いの誰かに極悪人とでも聞いたのかもね。

男は二つの剣をとりだした。

あれ？あの剣どっかで見たような。

……ああ、f a t eのアーチャーが持っていた奴だ。

え？ということとはひょっとしてその格好、アーチャーのつもり？

その服、手作り……にしては上手いわね。裁縫の達人かオーダーメイドか。

こいつも転生者なのかしら？

だけどさあ。

同じfateのセイバーの能力もらっている私が言うのもなんだけど、

正直ひくわぁー！。

## 十五話（後書き）

新たな転生者登場！

思いつきり痛い奴にしてみました！こいつの末路は一つだけ！

活動報告を書いてみました。これから（たまに？）書いていくのでよければそちらもお願いします。

## 十六話

Side:エヴァ

男がシギの攻撃を防ぐ。

男の戦い方は頭や心臓など一撃で終わる急所を守るのではなく、あえて急所に隙を作り相手の攻撃を誘い、防いでいくやり方だった。

今のところ戦闘は男の考えている通りになっている。

と余程の実力者でなければ思うだろうし、本人もそう思っているだろう。

しかし実際戦闘をコントロールしているのはシギだ。

奴のセンスは驚くのを通り越して呆れるくらいだ。

相手の実力を正確に測り、相手に自分が押している、後少しで倒せる。と思いきませる。

その後一步の状態にシギが少し力を加え、実力以上の力で戦わせ続ける。

そうやって相手の実力を伸ばし、秘めた力を引き出すのだ。

私も昔よくやられた手だ。

私も相手の力を測り、手加減することは当然出来る。

しかしあのような器用なまねはできない。

ところであの男は一体なんだろうか？

男の戦い方は危険極まりない。一步間違えれば即死なのだ。

あのような戦い方は余程の腕と自信がなければできないことだ。

だがあの男の実力は大したことはなかった。

せいぜいそこらの一般の魔法使い相手に余力を残して勝てる程度だ。

あれでシギの相手をする気になっているとは笑い話にもならん。

シギが男の剣の一つを弾き飛ばした。

しかし次の瞬間男の手は剣を握っていた。

シギはまた剣をはじき、二度目は剣に傷をつけ目印にし、四度目は剣を両断した。

飛ばした奴が戻ってきたのか、新しいのを出したのか、兎に角剣は直ぐに手に収まっていた。

シギは男の剣をはねのけ、距離をとった。

接近戦の技術も未熟、双剣も常に二つあること以外みることがない。

シギが溜息を吐く。

「つまらんな。それで終わりか？」

シギはつまらなそうに言う。

シギの言葉に男が怒る。

男は片手を頭上に上げる。

男の頭上に十数本の剣や槍が現れ、一斉にシギに放たれた。

シギはそのすべてを剣で弾いた。

「これで終わりか？時間の無駄だな」

「調子に乗るなよ！いいぜ！俺の取って置きの矢をお見舞いしてやるぜー！」

男は怒鳴ると、後方に大きく飛び下がり距離をとる。

「くたばりやがれ！偽・螺旋剣カラトホルグ！！！」

男は矢を放つ。

矢はシギの障壁に当たった瞬間、巨大な爆発と火柱を起こした。

火柱をみながら男は高笑いする。

燃え上がる赤き炎を内側から黒い炎が突き破り、瞬く間に飲み込んだ。

男の笑いが止まる。

「今のは中々面白かったな。炎に耐性のない奴なら多少は効くかもな。いずれにせよ、見た目が派手なだけで威力はお粗末なものだ」

男は驚愕していた。

よほどあの技に自信があつたのだろう。

しかしそれを無傷で防がれたのだ。衝撃は大きいはずだ。

男は突如、眼をつぶり、詠昌を始めた。

私は男の行動に呆れた。

相手の動きを止めた訳でも、十分な距離をとっている訳でもないのに眼をつぶり詠昌を始めるなど、殺してくれと言っているようなものだ。

当然シギはそんなふざけたまねを許す訳もなく、一瞬で距離を詰めると男の顔を蹴りつけた。

倒れる男の髪を掴み、持ち上げる。

「お前、ふざけているのか？そんな詠昌やらせる訳ないだろうが」

「くそつたれ、この術さえできればお前なんて」

「ほう。お前の切り札と言う訳か。……いいだろう。俺の楽しみを



邪魔したんだ。精々面白いものをみせてみる」

シギは男から距離をとり、男は詠昌を始めた。

## 十七話

Side: 絢

男がつくりだしたのは正にアーチャーの固有結界『無限の』。

……

『無限の……剣……なんとか』だった。

とにかく見渡す限り剣だ。

これだけ多いと正直薄気味悪いわね。

男は得意げに笑っている。なんかあの笑い方むかつくわね。

シギは辺りを見渡した。

「変わった結界だが……これがどうかしたか？」

……シギの機嫌がますます悪くなっている気がする。

「はっ、余裕がましていられるのもこれまでだ。

『ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣。剣戟の極致。恐れずして  
かかって来い！』」

……うわ~~~~。

マジで？本気と書いてマジと読む？

アニメでバーサーカー戦の時にアーチャーがあんな台詞言っていた気がするけど、もしかして覚えたの？そして覚えていたの？

どんびきやわ〜。

何あのどや顔。殴りて〜〜〜！

「それで？」

シギは心底詰まらなそうに聞く。

シギの態度が気に入らず、男は怒鳴り散らし、片手を掲げた。

空を見上げると天を覆い尽くす無数の剣がひしめいていた。

あ、あいつ超馬鹿で痛い奴だけど、流石にチート転生キャラなだけはあるのかもしれない。

いくらシギでもこの数は捌ききれないだろう。

シギの顔をみるとさっきまでとは少し雰囲気が変わっていた。

流石のシギもこの光景にはプレッシャーを感じているようだ。

そんなことを考えているとすぐ傍に刹那がやってきた。

「赤松さん。この位置ではシギに近すぎます。離れましょう」

確かにあれだけの剣が襲ってくるのならもつと離れたほうが良いだろう。

私は刹那と共にエヴァ達の所に向かった。

「少しまずいんじゃないのかい？」

「そうだな」

真名の問いにエヴァが答える。

真名もエヴァもどうやらシギのことが心配らしい。

彼女達にとっては大切な人らしいので心配する気ももつともだ。

しかし彼女達の次の会話に私は困惑した。

「まあ、こうなったのは奴のせいだしな。責任は取ってもらおうさ」

「あーなったらシギは簡単には止められないしね」

「簡単どころの騒ぎじゃありませんよ、明日菜さん」

「ここはやはり溜まった鬱憤を爆発させてもらった方が良いでしょう。問題はあの男が死んだ場合、無事に此处から出られるかどうかですね」

「レイナの心配も分かるが、まあ大丈夫だろう。こういう結界は術者が死ねばとける場合がほとんどだ」

こ、この人達は何を言っているのだろうか？

もうすでにシギが勝つことを前提に話が進んでいる。

そりゃ、さつきまで私もシギの圧勝だと思ったけど、この剣の数を見たらそうとも言っていられない。

私彼女たちにそう言うところエヴァが溜息をついた。

「あのなあ、貴様は今まで何をみていたんだ？さつきの爆発する矢も見た目が派手なだけで威力は精々中の上程度だぞ。今、空に浮かんでいる剣など、何の力も感じられない唯の鉄屑と同じだ」

エヴァの言葉で私も気がついた。

確かにさつき見たカラド……なんちゃらも恐れるほどの魔力は感じなかった気がする。

今空に浮かんでいる剣もなんの威圧も感じられない。数の多さに圧倒されていただけだ。

原作だと確か一つ一つからとんでもない力を感じられたはずだが、それがないのだ。

ひょっとしたらあの男は能力を使いこなせていないのかもしれない。

『見た目の派手さばかりが優先し、中身はお粗末なものだ。赤松絢お前も裏の世界に関わって生きる気なら、うわべだけでなく物事の本質を把握しろ』

確かにエヴァの言う通りだ。

私は今の言葉を胸に刻みつけた。

男が掲げた腕を振り下ろすと同時に無数の剣がシギに降り注いだ。

シギは唯たっていた。迫りくる剣を唯見ていた。

私は一瞬にして背筋が凍りついた。

シギの身体から黒い炎が、今まで見てきたものとは明らかに桁はずれな炎が噴き出した。

黒い炎はとぐろを巻き、膨張し、無数の剣を次々に飲みこんでいく。

炎に触れた瞬間、剣が綿あめのように溶けて無くなっていく。

いったいどれ程の高温なのだろうか。

かなりの距離をとっていたはずだというのに、熱さが此処まで伝わってくる。

熱いはずなのに私の身体は寒さで震えていた。

あの時、シギと戦っていたあの時、今の炎を出されていたら私なんて一瞬で消え去っていただろう。

シギは何でもない様子で炎を操っている。

この男は一体どれ程の力を隠し持っているのだ!?

全ての剣を消され、男は茫然としていた。

「な、なんだよこれは。なんなんだよ！！ふざけるな！俺が最強だ！俺が英雄だ！！」

それを、なんなんだよお前は！？爺だつて言っていたじゃねえか！俺が一番強いって、俺なら余裕で勝てるって！！」

「ふん。やはりあの妖怪爺の回しものか。残念だがお前は爺が俺の実力を把握したくて送った、唯のかませ犬、使い捨ての道具だ」

「ち、違う！俺は選ばれたんだ！俺は特別な存在なんだ！」

「もう言い黙れ。特別な存在だと思いたければ思っている。理想を抱いて焼死しろ」

黒い炎が男を包む。

男は塵一つ残さず消え去った。

## 十七話（後書き）

ようやく痛い男がお亡くなりになりました。

次回にこの痛いキャラをだした意味が分かります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5774s/>

---

真祖の吸血鬼と漆黒の異端者

2011年10月24日23時23分発行